

Ⅲ 研 究 事 業

研究事業の全体構想

東洋文庫は、1924年、欧文貴重書1,100点余を含む欧文図書資料からなるモリソン（G. E. Morrison）コレクション、ならびに和漢の貴重古典籍からなる岩崎文庫を中核として、岩崎久彌氏によって、アジアの貴重図書資料に関する民間の研究図書館として創設された。その後90年以上にわたり、一貫してこれらの貴重図書資料を中核とする100万冊に及ぶアジア諸地域の現地語資料を継続的・系統的に収集し、それらのすべてを散逸させることなく保存・管理し、同時に広く世界の研究者ならびに市民に公開することを目的とした事業を進めてきた。

研究事業の長期的な目的は、これらのアジア研究に関する貴重図書資料を保存・管理・公開し、なおかつアジア現地語資料を収集・整理して、内外の研究者の利用に供するとともに、これらの資料に基づく広範なアジア研究を推進して、世界のアジア研究の進展に大きく貢献することに置かれている。このような研究事業を284名に及ぶ研究員を擁して推進する類似の民間の研究図書館は国内には存在せず、世界的に見ても稀有な存在であり、アジア研究の長い伝統を有する東洋文庫が世界的に高く評価される理由であると同時に、長年にわたって蓄積されてきた特色ある研究を継続的に推進することは、世界のアジア研究者が切望するところでもある。

研究事業の目的

東洋文庫は、この全体構想をさらに効果的に実現するために、これらの基本的な課題を推進する中で、2012年度以来、以下の点に一層重点を置いて、研究事業を推進してきた。

- (1) 2011年3月11日の東日本大震災の教訓を踏まえ、貴重資料に関する書誌的資料研究をより一層強化し、併せて貴重資料の修復・保管・複製化・電子化という連続した資料保存とその公開をより系統的かつ持続的に推進する。
- (2) 大きく変動するアジア＝世界情勢に対応する研究として、東洋文庫のすべての研究班の連携によって構成される「総合アジア圏域研究班」を設置し、主題研究・地域研究・資料研究を連結した「総合アジア圏域研究」を全アジア的視野から推進する研究体制を構築する。

(3)「総合アジア圏域研究」に伴う資料交流・人的交流・国際交流を一層推進し、電子化などによって研究成果を広く発信し、国際的な発信力を強化する。

(4) 東洋文庫における資料研究・総合アジア圏域研究・国際交流・国際発信などの基本事業に不可欠な若手人材を育成する。

特に2016年度より、①アジア資料研究データベースの構築（試行期）、②資料調査・研究の推進と、それによる現地研究機関との共同研究の推進、③国際シンポジウム・ワークショップの開催による国際発信と国際交流の推進、④研究成果の刊行・発信の強化、⑤若手研究者の育成、という5点の重点事業目標を設定して、研究班によるアジア現地研究・資料調査と収集を基礎に、研究データの保存・管理・公開を一体化した総合的アジア研究データベースの構築を推進すると共に、東洋文庫の刊行物や各種講演会・講習会ならびにミュージアムによる経常的な公開展示などの取り組みを通して、広く内外にその研究成果を発信している。

資料調査・研究の推進と、それによる現地研究機関との共同研究の推進についていえば、系統のかつ継続的にアジアの各地域に関する現地の原語資料を収集し、それを現地の研究者・研究機関と共同で整理・編集して目録を作成し、世界の研究者の用に供している。特徴的な活動としては、中央アジア研究において、ロシア・サンクトペテルブルクのロシア科学アカデミー東洋写本研究所との協力関係・信頼関係のもと、中央アジア出土のウイグル文書の目録の編集を共同で行い、20年以上にわたり目録の編集を継続して行い、現在はこれをデータベース化してデータの充実に取り組みつつ内部公開し、外部公開のための協議を行っている。同様に、協力協定機関であるアメリカのハーバード・エンチン研究所や、台湾の中央研究院などとの間で長年にわたって調査協力・国際共同研究・資料交換・人材交流等を行っている。このような研究機関相互の信頼関係に基づいて長期間にわたって継続的に行われる研究活動は、個人や研究グループが短期的に実現できるものではなく、東洋文庫が研究図書館として実施するにふさわしい事業であるといえる。

アジア資料研究データベースの構築についていえば、①資料、②研究（分類・目録・索引など）、③成果、の三者を一体化した総合的アジア研究データベースの作成と、それによる研究データの保存管理、成果の公開発信を目的とするものである。具体的には、アジア各地域の原資料のデジタル化と分析・解読を基礎とし、これに関連する研究情報をメタデータとして付加し、多分野にわたる研究を横断的かつ通時的に検索することが可能な汎用性の高い総

合的研究データベース・システムを構築するべく取り組んでいる。これはアジアに関する基礎資料研究の長い伝統と蓄積を有する東洋文庫だからこそ可能であると同時に、学術団体としての東洋文庫の特徴を十分に体现しうるものと考ええる。

2018～2020年度の重点事業目標

東洋文庫の基本的な事業を継続的に推進するなかで、2018～2020年度において重点的に取り組む主要な事業項目を以下に掲げる。

- (1) アジア基礎資料研究の構築と、それによる現地研究機関との共同研究の新展開
- (2) 総合的アジア研究データベースの推進（開発期）
- (3) 国際シンポジウム・ワークショップの開催による国際発信と国際交流の推進
- (4) 研究成果の刊行・発信の強化
- (5) 若手研究者の育成

アジア基礎資料研究については、従来の研究班主体の調査研究体制を改め、研究部執行部の主導のもとアジアのすべての地域に跨がる資料の収集・保存・研究・公開が一体化した、東洋文庫の伝統と蓄積を継承・発展させる基礎資料研究の構築に重点を置く。特に、すべての研究班が参画する総合アジア圏域研究班において、アジア各地の資料に用いられた紙に対して新たに導入する精密顕微鏡による精密調査を行い、時代別・地域別の紙質分布データベースを構築することで、資料の研究・保存・公開の各方面に有効活用できる基礎データを蓄積し、東洋文庫の伝統であるアジア資料学をより深化・展開させることを目指す。また、総合的アジア研究データベースの構築は、2018～2020年度において最も重点を置いている項目の一つであり、2015～2017年度の「アジア資料研究データベースの構築」を試行期、今期を開発期に位置づけ、データ収集、システム開発において完成の域に達することを目標としている。

特定奨励費による本研究事業は、基本的には、アジアに関する資料の収集・保存・研究・公開の一体化とそのための効果的な事業運営に特徴がある。具体的には、【資料の収集・保存】研究者による資料（国内外の専門書・和漢洋の古典籍）の収集、多言語に通じた司書による蔵書資料検索データベースの充実、専門家による和漢洋の古典籍の保存修復、【研究】研究者によるアジア基礎資料研究、研究者によって蓄積された研究データ（研究資源・研究成果）

の保存・活用、若手理系研究者との共同による総合アジア研究データベースの構築および他機関で作成された資料研究データベースとの連携、すべての研究班による総合アジア圏域研究国際シンポジウムの開催、ハーバード・エンチン研究所、ECAF（European Consortium for Asian Field Study）を始め協定機関との国際連携の強化、【公開】収集した書籍の蔵書・資料検索データベースによる公開、蓄積された研究データの総合的アジア研究データベースによる公開、定期刊行物・オンラインジャーナル・論叢等出版物・機関リポジトリ「ERNEST」（<https://toyo-bunko.repo.nii.ac.jp/>）による研究成果の発信、内外の研究者による広く一般に向けた東洋学講座の開催、外国人研究者による特別講演会の開催、東洋文庫の蔵書に通曉した学芸員によるミュージアムの企画展示などに対し、研究員・司書・学芸員が一丸となって取り組むことで、アジア研究の総合的研究水準を高めると同時に、東洋学に携わる後進の育成と一般への普及に貢献することを目指す。

研究事業の効果

研究事業の効果について、2018～2020年度の重点研究事業である紙料調査を中心に述べる。

a. アジア基礎資料研究

東洋文庫が所蔵するアジア関連の図書・資料は洋書30万冊、和漢書70万冊にのぼり、書写・印刷時期は、洋書は15世紀、和漢書は8世紀を筆頭に、それぞれ現代に及び、書写・印刷地域は、アジアとヨーロッパを中心とした全世界にわたっており、しかも、そのすべてが原典である。このように広範かつアジアに集中した内外の図書・資料を保管・公開して世界のアジア研究者の用に供し、合わせて284名に及ぶ研究員がアジア資料研究に従事する研究図書館は世界に類を見ないといえる。これらの蔵書を維持・管理することは東洋文庫に課せられた使命であり、その記述資料を保存・修復するためには、資料の素材である紙質・紙料の分析が不可欠である。この紙料調査を東洋文庫所蔵資料とアジア諸地域の現地資料館との双方において進めることを、今期3年間の重点事業として計画している。

紙質調査の効果は、諸方面に期待できる。アジア各地の紙の製法・特徴を明らかにすることで、資料に用いられた紙の製造時期・地域が特定できるようになり、ヨーロッパに輸出されたアジアの紙が、印刷された後にアジアにもたらされるなど、紙という文化資源の国際流通の実態や、紙の流通を背景とした書籍流通による知的文化交流の実態が明らかとなる。例えば、古代か

ら楮、三桮で紙を漉いたアジアに比較して、ヨーロッパではリネンや羊皮紙が用いられ、紙文化の好対照をなしている。東洋文庫所蔵資料は時代的にも空間的にも、世界のアジア関連の書籍資料の全体をカバーしており、紙料の標本と紙質の標準を提示するにふさわしい研究を行う条件が整っている。

本研究項目は、全研究班が参画する総合アジア圏域研究によるアジア基礎資料研究において、東洋文庫をはじめ国内外の文献資料の研究・保存修復・公開（閲覧・展示）を目的に紙質調査を行い、時代・地域と関連づけた紙質分析データのマトリックスを作成し、国際標準として国内外に発信することを目指している。

具体的な取り組みとしては、紙譜（紙の素材資料集）、15世紀のインキュナブラ（西欧で作られた最初期の印刷物）やマニユスクリプト（特に西洋の古写本）をはじめとする古今東西の古典籍、紙関係の辞書・研究書・図録等を収集し、若手研究者の協力のもと精密顕微鏡によるサンプル調査を実施し、今後の長期的な調査のための土台づくりを進めている。

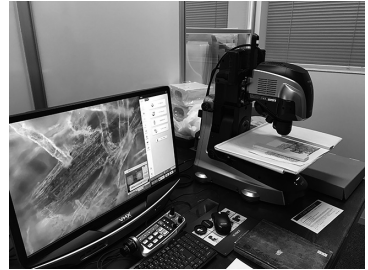
b. 資料収集・整理

資料収集においても、国内の資料館・図書館と連携し、アジア関連紙料の調査及び整理を進めることで、東洋文庫が作成する紙質分析データのマトリックスの一層の充実を図る。また海外の連携研究機関と協力して紙質調査を行い、東西比較に基づく国際的な紙料の分析・分類を行う。同時に、様々な素材・地域で書写・印刷された資料に対して最適の修復・保存方法を検討・実施する。

具体的な取り組みとしては、2018年度より、若手研究者を中心に、書誌学者・歴史学者・保存修復技術者・情報学専門家からなる紙質調査チームを結成し、資料の保存・修復の観点に立った調査が可能な体制を構築した。

c. 資料研究成果発信

文理融合型アジア資料科学研究シリーズとして、これまで開催してきた講習会・講演会・研究会をより幅広い時代・地域を対象に開催し、紙質そのものの歴史的特徴のみならず、同時代における文献・書物の格式と、用いられた紙との関係性を明らかにし、紙料に託された社会的役割を吟味する。また、東洋文庫所蔵資料の紙料をもとに作成された紙質分布データベースが、国際



精密顕微鏡によるインキュナブラの調査風景

的な標準たり得るよう、国内外の資料館と連携して、より一層の充実を図ることも必要不可欠である。

具体的な取り組みとしては、紙質分布データベースによる研究成果発信を、より効果的に推進するため、2019年度に国内研究機関とのデータベース連携の検討を開始した。

d. 普及活動

紙料調査は単なる素材分析にとどまらず、紙の特徴から版本の刊行された時代・地域・文化的背景を特定することができる。その成果を、講習会や展示会等の普及活動を通して対外的に発信することで、紙料研究の重要性に対する認知度が高まり、紙とアジアの深いつながりに対する社会的な関心を喚起することができる。また、接写用デジタルカメラを使って資料の特徴を簡易的に捉えることもできるため、この方法を対外的に広めることで、アジア諸地域の歴史資料の収集・整理・保存修復に取り組む資料館や、それらを用いて研究する若手研究者の育成に大きく貢献することができる。

具体的な取り組みとしては、2018年度に紙質調査の一般への普及を目的に、国宝『毛詩』、13世紀刊行の高麗版大蔵經、18世紀のトルコで刊行された『世界の鏡』等の紙質調査を行い、その結果を東洋文庫ミュージアムで展示した。

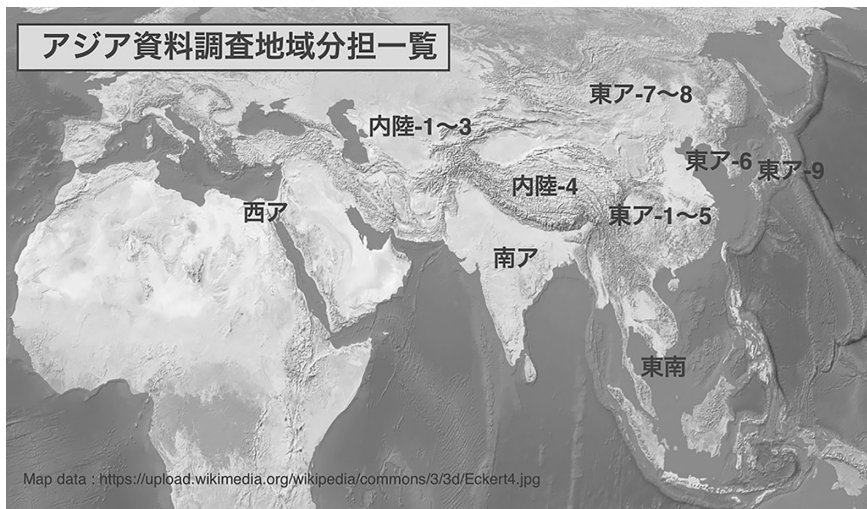
最後に、2018年度より開始した「東洋文庫奨励研究員制度」は、若手研究者の育成および雇用促進のための体制を一層充実させるものであり、ひいては、東洋文庫の事業の安定的・継続的な実施を可能にし、かつ東洋学の伝統の継承と発展に大きく寄与するものである。その効果は東洋文庫の内部のみにとどまるものではなく、将来にわたって世界の研究者に裨益するとともに、アジアで育まれてきた人類の叡智を広く一般の方々に伝える公益性の高いものとなる。

1. アジア基礎資料研究

2018年度より、従来のアジア各地域の特徴に沿った研究班・研究グループ主体の調査研究を、研究部執行部の主導のもとに統括され、資料の収集・保存・公開・研究が一体化した、東洋文庫の学問的伝統と蓄積、および国内外の研究ネットワークを継承・発展させる研究体制に改編し、「紙料」調査を中心としてアジア諸地域を横断的に比較総合する「アジア基礎資料研究」に重

点を置くこととした。具体的には、研究部執行部が統括する5つの重点事業目標（p.25「2018～2020年度の重点事業目標」を参照）に基づき、西は北アフリカから東は日本までをカバーする全6研究部門13研究班が、20の基礎資料研究テーマ（p.30「アジア基礎資料研究のための6部門13研究班20テーマ」を参照）を設定して相互に連絡・連携を保ちながら、東洋文庫が収集・所蔵する一次資料の文献学的分析（解題・目録・訳注等の作成）と、それに基づく「紙料」研究を持続的に推進した。これらの研究班・研究グループの諸活動は「総合アジア圏域研究」のもとに連結することで、アジア諸地域の歴史と文化の地域連関と相互影響について、アジア全体を視野に入れた学際的共同研究を推進し、現代アジアの複合的・動態的な把握に努め、その研究成果を、講演会・刊行物・オンラインジャーナル・研究データベース・ミュージアム展示など多様な方法で発信・公開・普及するべく取り組んだ。

5つの重点事業目標のうち、研究部執行部では、特に研究データベースの構築と若手研究者の育成に力を入れており、他の3項目（アジア基礎資料研究の構築と現地研究機関との共同研究、国際シンポジウム・ワークショップの開催による国際発信と国際交流、研究成果の刊行・発信）の実施においても常にこの2項目と密接に関連するよう留意した。



本図は、次頁にあげる「アジア基礎資料研究のための6部門13研究班20テーマ」の「略号」によって、各研究テーマが分担する資料調査地域を示したもの。

アジア基礎資料研究のための6部門13研究班20テーマ

部門		研究班	アジア基礎資料研究テーマ	略号
超域アジア		総合アジア圏域	アジア資料学の深化—保存・研究・普及のための文理融合型アジア資料学の展開と研究データベースの構築	—
		現代中国	現代中国の総合的研究(4)	—
		現代イスラーム	近現代イスラーム地域の構造変動	—
歴史文化研究	東アジア	前近代中国	中国古代地域史研究	東ア-1
			東アジアの古代・中世遺跡出土の遺構・遺物の考古学的研究	東ア-2
			中国社会経済・基層社会用語のデータベース化	東ア-3
			宋以後の法令分析を通じた中国前近代社会の構造解明	東ア-4
		近代中国	20世紀前半日本の中国調査研究機関に関する総合的研究	東ア-5
		東北アジア	近世の朝鮮で作製された各種記録類についての基礎的・総合的研究	東ア-6
			清代満洲語文書資料及び画像資料等のデータベース化に関する研究	東ア-7
			清代中国諸地域の構造分析：政治・社会経済・民族文化の史的展開	東ア-8
		日本	岩崎文庫貴重書の書誌的研究(4)	東ア-9
	内陸アジア	中央アジア	非漢字諸語出土古文書の研究	内陸-1
			近現代中央ユーラシアにおける出版メディアと政治・社会運動	内陸-2
			日本所在の敦煌・吐魯番文書の整理と研究	内陸-3
		チベット	チベット語資料の活用とチベット文化の複合的研究	内陸-4
	インド・東南アジア	インド	インド中世・近世における文書史料研究	南ア
		東南アジア	近世東南アジアをめぐる旅行記史料の研究	東南
	西アジア	西アジア	文書資料による比較制度研究	西ア
	資料	東アジア資料	東アジア現地資料の研究	—

A. 資料調査・研究テーマごとの研究体制

○超域アジア研究

〈超域アジア研究部門〉

総合アジア圏域研究班「アジア資料学の深化—保存・研究・普及のための
文理融合型アジア資料学の展開と研究データベースの構築」

総括	斯波義信◎
副総括	濱下武志◎、平野健一郎◎、會谷佳光◎
現代中国	青山瑠妙、中兼和津次、村田雄二郎、斯波義信◎*
現代イスラーム	粕谷 元、池田美佐子、吉村慎太郎、湯浅 剛
前近代中国	太田幸男、高久健二、斯波義信◎*、山本英史
近代中国	内山雅生
東北アジア	六反田豊、石橋崇雄、細谷良夫、加藤直人、小沼孝博、 小長谷有紀
日 本	深沢眞二
中央アジア	梅村 坦、小松久男、氣賀澤保規
チベット	吉水千鶴子
インド	小名康之
東南アジア	弘末雅士
西アジア	三浦 徹、高橋英海
東アジア資料	斯波義信◎*、塚原東吾
紙料分析	江南和幸、徐 小潔
歴史地図	大澤顯浩、高橋公明、杉本史子
比較研究	L. グローブ
研究データベース共同研究	會谷佳光◎*、相原佳之◎
(研究補助者)	小澤一郎☆

(◎は専従者、*は重複、☆は若手研究者を示す。以下同じ)

現代中国研究班「現代中国の総合的研究(4)」

総括 村田雄二郎*

副総括	青山瑠妙 *
資 料	斯波義信◎*、貴志俊彦、新村容子、城山智子、 村上 衛、岡本隆司
政治・外交	青山瑠妙*、毛里和子、天児 慧、興梠一郎、 唐 亮、平野 聡、徐 顕芬、森川裕二、松村史紀、 平川幸子、神田豊隆、堀内賢志
経 済	中兼和津次*、巖 善平、丸川知雄、寶劔久俊、 唐 成、峰 毅
国際関係・文化	村田雄二郎*、中村元哉、平野健一郎◎*、 濱下武志◎*、田中明彦、川島 真、貴志俊彦*、 砂山幸雄、高田幸男、古田和子、土田哲夫、尾形洋一、 大澤 肇、小浜正子、田中 仁、相原佳之◎*、 加藤恵美、青山治世、関 智英

現代イスラーム研究班「近現代イスラーム地域の構造変動」

総 括	粕谷 元 *
副総括	三浦 徹 *
アラブ トルコ	池田美佐子*、小杉 泰、鈴木恵美、堀井聡江 粕谷 元*、大河原知樹、設楽國廣、秋葉 淳、 佐々木紳
イラン	吉村慎太郎*、松永泰行、黒田 卓、鈴木 均、 阿部尚史
中央アジア	湯浅 剛*、小松久男*、宇山智彦、長縄宣博、 地田徹朗
日本・比較	三谷 博

○歴史文化研究

〈東アジア研究部門〉

前近代中国研究班

「中国古代地域史研究」

総 括	太田幸男 *
副総括	窪添慶文

飯尾秀幸、多田狷介、松丸道雄、藤田 忠、靱山 明、
塩沢裕仁、池田雄一、金子修一、川合 安、小嶋茂稔、
小寺 敦

「東アジアの古代・中世遺跡出土の遺構・遺物の考古学的研究」

総 括 高久健二 *

副総括 妹尾達彦

清水信行、早乙女雅博、飯島武次、井上和人、小嶋芳孝、
金沢 陽、菅頭明日香

「中国社会経済・基層社会用語のデータベース化」

総 括 斯波義信◎*

副総括 渡辺絃良

大澤正昭、徳永洋介、青木 敦、廣瀬紳一、石川重雄、
土肥祐子、濱島敦俊、大川裕子

「宋以後の法令分析を通じた中国前近代社会の構造解明」

総 括 山本英史 *

副総括 鈴木立子

宋 代 大澤正昭 *、青木 敦 *、小川快之

元 代 鈴木立子 *

明 代 鶴見尚弘 *、岸本美緒、濱島敦俊 *

明清代 山本英史 *、寺田浩明、西 英昭、高遠拓児、奥山憲夫

近代中国研究班

「20世紀前半日本の中国調査研究機関に関する総合的研究」

総 括 内山雅生 *

副総括 久保 亨

政 治 本庄比佐子、松重充浩、田中比呂志

経 済 久保 亨 *、金丸裕一、弁納才一、富澤芳亜、
吉澤誠一郎、吉田建一郎

社 会 内山雅生 *、高田幸男 *、佐藤仁史、浅田進史、山本 真、
瀧下彩子◎

東北アジア研究班

「近世の朝鮮で作製された各種記録類についての基礎的・総合的研究」

総 括 六反田豊 *

副総括 吉田光男

糟谷憲一、井上和枝、須川英徳、武田幸男、森平雅彦、
山内弘一、山内民博

「清代満洲語文書資料及び画像資料等のデータベース化に関する研究」

総括 加藤直人 *

副総括 中見立夫

満洲語・漢語文献

松村 潤、加藤直人 *、細谷良夫 *、楠木賢道、杉山清彦

満洲語・モンゴル語文献

中見立夫 *、柳澤 明

「清代中国諸地域の構造分析：政治・社会経済・民族文化の史的展開」

総括 石橋崇雄 *

副総括 C. A. ダニエルス

岸本美緒 *、柳澤 明 *、武内房司、鶴間和幸

日本研究班

「岩崎文庫貴重書の書誌的研究(4)」

総括 深沢眞二 *

副総括 齋藤真麻理

石塚晴通、今西祐一郎、上野英二、大谷俊太、辻本裕成、
宮崎修多、柳田征司、和田恭幸

〈内陸アジア研究部門〉

中央アジア研究班

「非漢字諸語出土古文献の研究」

総括 梅村 坦 *

副総括 松井 太

P. ツィーメ、林 俊雄、妹尾達彦 *、小田壽典、橘堂晃一、
熊本 裕、森安孝夫、吉田 豊

「近現代中央ユーラシアにおける出版メディアと政治・社会運動」

総括 小松久男 *

副総括 長縄宣博 *

新免 康、堀川 徹、濱本真実、野田 仁、塩谷哲史

「日本所在の敦煌・吐魯番文書の整理と研究」

総括 氣賀澤保規＊
副総括 片山章雄
妹尾達彦＊、岡野 誠、関尾史郎、荒川正晴、石塚晴通＊

チベット研究班

「チベット語資料の活用とチベット文化の複合的研究」

総括	吉水千鶴子＊
副総括	星 泉
言語・チベット文学	星 泉＊
近現代チベット社会	大川謙作
中央アジア出土チベット語文献	武内紹人
仏教・ボン教	御牧克己、宮崎展昌
密教・仏教美術	立川武蔵
仏教思想	川崎信定
歴史	山口瑞鳳

〈インド・東南アジア研究部門〉

インド研究班「インド中世・近世における文書史料研究」

総括 小名康之＊
副総括 石川 寛
吉水清孝、水野善文、三田昌彦、太田信宏、萩田 博、
栗山保之

東南アジア研究班「近世東南アジアをめぐる旅行記史料の研究」

総括 弘末雅士＊
副総括 嶋尾 稔
牧野元紀、坪井祐司、北川香子、飯島明子、山口元樹、
青山 亨、島田竜登、工藤裕子

〈西アジア研究部門〉

西アジア研究班「文書資料による比較制度研究」

総括 三浦 徹*
 副総括 近藤信彰
 ヴェラム文書 佐藤健太郎、吉村武典、亀谷 学、原山隆広◎、三浦 徹*
 オスマン帝国資料
 林佳世子、永田雄三、秋葉 淳*、大河原知樹*、高松洋一
 イラン資料 近藤信彰*、守川知子
 中央アジア文書
 堀川 徹*、磯貝健一、矢島洋一

○資料研究

〈資料研究部門〉

東アジア資料研究班「東アジア現地資料の研究」

総括 斯波義信◎*
 副総括 相原佳之◎*
 田仲一成
 日 本 浅野秀剛、片桐一男、吉田伸之
 中 国 上田 望、尾崎文昭、片山 剛、佐藤慎一、戸倉英美、
 濱下武志◎*、馬場英子、末成道男、藤井省三、
 邵 迎建、會谷佳光◎*
 朝 鮮 藤本幸夫
 内陸アジア 森安孝夫*
 梅原考古資料 山村義照◎
 情 報 廣瀬紳一*

B. アジア基礎資料研究における重点活動方針

(1) アジア基礎資料研究の構築と、それによる現地研究機関との共同研究の新展開

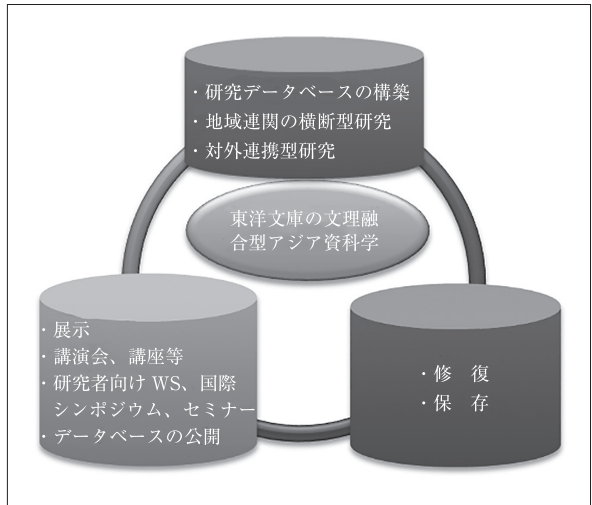
担当：會谷佳光、相原佳之、小澤一郎

東洋文庫は、国内外を通じて、専門の保存修復室を持つ数少ない研究機関

の一つである。資料の素材調査の目的とその意義は、東洋文庫における研究活動・閲覧公開・ミュージアム展示などのすべての局面において、日常的に調査を実施して、その成果を蓄積し保存修復に活用することで、東洋文庫が収集した古今東西の貴重資料を永く後世に伝承することにある。さらに、その成果を研究データベース化して広く発信することで、国内外のアジア関係資料を連携して保存修復・研究・伝承することに貢献することが可能となる。すなわち資料の素材調査と研究データベースによる成果発信は一体不可分であり、東洋文庫が研究図書館として取り組む特色ある研究活動の中心をなす課題であるといえる。

東洋文庫では、故藤枝晃京都大学名誉教授による敦煌出土文書の古写本研究を基礎に、藤枝氏の学問を継承する石塚晴通研究員と、理系研究者としての視点から精密顕微鏡による敦煌文書等の紙質分析で成果を上げてきた江南和幸研究員の指導のもと、2012年度以来、東洋文庫の蔵書を使った素材調査をアジア各地域の資料に対して実施する研究を行い、データの蓄積を進め、それらの成果を継続的に公開講座「アジア資料学研究シリーズ」などを通して明らかにしてきた。

とりわけ強調すべき点は事業遂行のための実施体制の確立である。今回の事業計画の中核をなす紙質研究は、研究者個人の経験と熟練に依拠し、国・地域・言語で分断された従来の書誌学の限界を克服するべく、すべての研究班・研究グループの参加の下にアジア各地域の紙料情報を系統的に調査収集し、東洋文庫所蔵資料の科学的検討に基づいて相互に比較分析しつつ、古今東西のアジア関連資料の紙質につき東洋文庫から発信する総合的な国際的分析標準を作成し、地域文化の表象である紙をめぐる「知識」の交流史研究に資する点に重点を置いている。



以下、各研究班が取り組んだアジア基礎資料研究について報告する。

〔研究実施概要〕

資料のデジタル化公開等による電子図書館の機能を混在させた図書館のハイブリッド化が進む中、資料の現物（書籍・地図・絵画・考古遺物・陶器等）からしか読み取れない情報（紙・墨等の素材や生産された地域・時代等）を分析・研究・蓄積・公開していくことは、アジア・ヨーロッパの様々な時代・地域の資料を所蔵する東洋文庫だからこそ実現可能な研究課題である。

総合アジア圏域研究では、「紙質調査チーム」（下記のメンバー表を参照）が中心となって、紙譜（紙の素材資料集）、15世紀のインキュナブラ（西欧で作られた最初期の印刷物）やマニユスクリプト（特に西洋の古写本）をはじめとする古今東西の古典籍、紙関係の辞書・研究書・図録等を収集した。

役 割	担当者（所属・職名）
総括・漢文大蔵経諸版の調査	會谷 佳光（東洋文庫・主幹研究員）
研究データベース企画立案	相原 佳之（東洋文庫・研究員）
研究データベース・システム開発	中村 覚（研究協力者、東京大学史料編纂所助教）
調査全般・技術指導	徐 小潔（東洋文庫・研究員）
満洲語文献の調査	多々良圭介（東洋文庫・研究部・奨励研究員）
漢籍・洋書の調査	段 宇（研究協力者）
資料全般	水口 友紀（研究協力者、東洋文庫・図書部・保存修復臨時職員）
ちりめん本等の調査	田村 彩子（研究協力者、東洋文庫・図書部・保存修復臨時職員）
欧米・アジアの比較研究	L. グローブ（東洋文庫・研究員）
調査研究顧問	江南 和幸（東洋文庫・研究員）
	石塚 晴通（東洋文庫・研究員）

精密顕微鏡 VHX-7000を使用してサンプル調査を実施し、中国・浙江図書館編『中国古籍修復紙譜』上・下（国家図書館出版社、2017年）のサンプル紙を調査して、20～1,000倍からなる1万枚弱の紙質データを蓄積し、紙質データベース（画像データは国際規格 IIF（International Image Interoperability Framework）対応）を構築すると同時に、機械認識による紙質データ分析を

試みた。これらの成果は、3月13～14日、実践女子大学文芸資料研究所主催のシンポジウム「紙のレンズから見た古典籍—高精細デジタルマイクロスコップの世界—」に共催機関として参加して下記の発表を行い、今後の紙質データベースの構築やデータ分析における協力について意見交換を行った（オンライン開催）。

徐小潔・會谷佳光『『大清聖祖仁皇帝実録』（康熙帝実録）の紙質—大紅綾本と紫綾本—』

中村覚「機械は紙を見分けられるのか—紙質観察画像データベースの構築と画像分類における機械学習技術応用の試み—」（共同研究者：徐小潔・段宇・多々良圭介）

現代中国研究では、政治・外交グループが4月に上海国際戦略問題研究会との間で「コロナ対策と日中関係」と題するワークショップを開催した。経済グループは、毛沢東時代の経済制度と政策に関する学会（中国経済経営学会）で報告を行い（オンライン開催）、多くの学会員と討論を行った。これまで報告・議論してきた論文を『毛沢東時代の経済』と題する書籍にとりまとめ、名古屋大学出版会から出版する準備を行った。国際関係・文化グループは、オンライン会議システムを積極活用して、国内外の研究者と研究成果の共有を進めた。また、若手研究者育成の場としても機能してきた「中国当代史研究ワークショップ」の成果を中国語で出版する準備を進めた（2021年度刊行予定）。

現代イスラーム研究では、中東・中央アジアの歴史的に重要な諸法令を翻訳し、順次データベース化してWeb公開する作業の一環として、トルコグループでは粕谷元編『トルコにおける議会制の展開』（東洋文庫、2007年）所収のオスマン帝国憲法（1876年）およびトルコ共和国憲法（1924年）を改訳するとともに、これらに注釈と解題を付す作業を進め、その改訳を終えた（2021年度前半に公開予定）。イラングループでは、イラン憲法（1906年憲法と1907年憲法補則）の翻訳および注釈を付す作業が完了した（解題を付して2021年度前半に公開予定）。アラブグループでは、エジプト憲法（1923年）の翻訳および注釈を付す作業を行い、全条の下訳を完成させるとともに、チュニジア憲法（1861年）の翻訳作業に着手した。これらの作業のために、イラングループ・アラブグループではオンラインによる訳文検討会を重ねた。さらに、3月4日にはアラブ・イラン・トルコグループ合同の訳文検討会をオンラインで開催した。「シャリーアと近代：オスマン民法典研究会」（代表：大河原知樹研究員）では、オスマン民法典（メジェッレ）のアラビア語訳の

講読・翻訳作成および研究成果公開に向けて9回の研究会を開催した。2月19日にイラングループ主催で研究集会を開催し、鈴木均研究員、黒田卓研究員、阿部尚史研究員、および若手研究者の徳永佳晃氏・中村菜穂氏等が報告を行った（ともにオンライン開催）。

東アジア研究では、前近代中国・近代中国・東北アジア・日本の4研究班を組織し、分担してアジア基礎資料研究に取り組んだ。

前近代中国研究班では、中国古代史研究の深化のため、文献史料の精密な理解と新出史料の利用の双方が必要であることから、原則、月2回研究会を開催して、東洋文庫所蔵の豊富な中国地方志資料および東洋文庫のインターネット環境を活用し、文献史料として『水経注疏』巻10漳水篇の精読を進めるとともに、新出史料として『嶽麓書院藏秦簡』所収の律令・律令関係文書の講読と講読方法の検討を進めた。ただし、新型コロナウイルス感染症拡大の影響により、当初の計画よりも進捗が遅れが生じた。また、外国人特別研究員として張鵬飛氏（広東省警察大学院文学部写作研究室主任）を受け入れ、研究会等を通じて学術交流を行ったり、『水経注』に関わる問題について国外の研究者と積極的な意見交換を行い、研究成果の寄贈を受けたりした（【東ア-1】）。なお、【 】括弧内の略号については、p.30「アジア基礎資料研究のための6部門13研究班20テーマ」を参照。以下同）。

「東アジアの古代・中世遺跡出土の遺構・遺物の考古学的研究」グループでは、新型コロナウイルス感染症拡大の影響により、中国東北地方や韓国の遺跡踏査を行うことができず、原三国～三国時代の発掘調査報告書の収集を中心に行った（【東ア-2】）。

前近代中国の社会のうち、表層については豊かな記録が残され、総体として〈秩序〉と〈階層〉を特色とする様相が長期に持続したことが知られている。一方、基層社会は発展と転変、分化を遂げながらも記録の伝存が少数かつ散漫なため、統合的な分析を妨げてきた。そこで、表層と基層両面の接合、交渉の動態に目を向け、根本史料に即して事実を解明し、研究の新生面を開くことを目指した。①近年における法制史研究の充実に伴い、地方官の裁判機構、同判決文を手がかりとして、地域、地方社会の紛争解決、利害調整の実態に克明な分析を加える作業を第一の支柱とする。②基層社会側で生活知識、実用知識の手引き「百科知識」として求められた「日用類書」、その項目をなす商人・算数・医薬・道釈・法制、また農業などの著述について、訓読と詳注を①と合わせて推進することにより、表層と基層社会の接合面の総合的、具体的な究明に従事した。明代の「日用類書」『新刻天下四民便覧三台万

用正宗』巻21〈商旅門〉のほぼ全体の訳注を終えた。今後は訳文の見直し、関連する東北大学・狩野文庫蔵『商賈指南』との校合・注釈等の整理を行う。また同書巻26〈医学門〉・巻39〈僧道門〉についてそれぞれほぼ2分の1の訳注を終えた。ただし、新型コロナウイルス感染症拡大の影響により、2020年9月まで月例研究会が延期となったため未報告部分が残った。光緒2年(1876)刊・釈頭承集・釈儀潤校『参学知津』(道光7年(1827)頃刊の重刻本)および民国初『武林進香録』・『武林進香須知』の路程書・巡礼書については、ほぼ3分の1の訳注を終えた。今後は、月例研究会で報告を行い、データベース公開へ向けた準備作業を進める(【東ア-3】)。

2018年度に刊行した『中国近世法制史料読解ハンドブック』に続き、若手研究者の養成のためのプログラムとして、『演習：中国近世法制史料』(仮)の刊行を目指して、2020年度はその基礎を構築するはずであったが、新型コロナウイルス感染症拡大の影響により中断を余儀なくされた(【東ア-4】)。

近代中国研究班は、20世紀前半日本の中国調査研究機関に関する資料について中国・香港・台湾等の研究機関と共同研究を予定していたが、新型コロナウイルス感染症拡大の影響により実施を見合わせた(【東ア-5】)。

東北アジア研究班では、戸籍関係資料と帳簿類など冊子体の各種公私記録類について、日本国内の図書館・資料館等での文献調査を予定していたが、調査先各機関の臨時休館や利用制限の強化等により、ほとんど調査ができずに終わった(【東ア-6】)。東洋文庫所蔵の「鑲紅旗檔」および「鑲白旗檔」をはじめとする清朝満洲語文書資料に関する研究を継続して実施した。2019年度に学術交流協定を締結した吉林師範大学満学研究院との間で、国際学術交流を展開する予定であったが、新型コロナウイルス感染症の拡大により、現地調査を実施できず、基本的な今後の交流に関する打ち合わせをオンラインで実施した(【東ア-7】)。東洋文庫所蔵の文献史料のうち、これまでその書誌学上の特徴等がほとんど未詳であったものを改めて検証し直して公開することで、関係研究分野における若手研究者に裨益できるのではないかとの考えから、漢文以外の言語文字を用いて記載された清代文献史料類について、これまで各専門研究領域の分野ごとに区分されて別々に登録されている現状を検証し直し、新たに清代文献史料類として総括し、これまでの登録内容に併記する方式も含む新たなデジタル化方式で公開するための計画を立て、その整理と分析作業を進めた。また、この作業と並行して、これまでに収集した文献史料類のマイクロフィルムについて、その一部をすでに公開したことに加え、清代政治・社会経済・民族文化の各専門研究領域をもとに、各地

所蔵の文献史料類について新たなデジタル化方式で公開するための計画を立て、その整理と分析作業を進めた。また、清朝祭祀儀礼研究の一環として、石橋崇雄研究員が東洋文庫所蔵の清朝『壇廟祭祀節次』の解読作業を進展させ、その成果の一部を2021年度に和文訳注本として刊行する準備がほぼ完了した（【東ア-8】）。

日本研究班では、2020年度は、仮名草子を中心とした『岩崎文庫貴重書書誌解題X』の公刊に向けた準備作業を進めようと努めたが、新型コロナウイルス感染症拡大による制約のため作業が予定通りには運ばなかった。ただ、それら資料の図版掲載のため、2019年度にデジタル撮影した画像について、東洋文庫のデータベース上に公開する準備を進めた。また、東洋文庫ミュージアムと連携して、「三菱創業一五〇周年記念 岩崎文庫の名品—東洋の叡智と美—」展の企画立案と、図録『岩崎文庫の名品：叡智と美の輝き』の編集・解題執筆に協力した（【東ア-9】）。

内陸アジア研究では、中央アジア・チベットの2研究班を組織し、分担してアジア基礎資料研究に取り組んだ。

中央アジア研究班では、ドイツ・トルコ・日本を結ぶオンライン形式で、メンバー制（現在、若手研究者を含め9名）を基本として「突厥碑文研究会」を7回開催した（【内陸-1】）。東洋文庫所蔵の近現代中央ユーラシアの新聞・雑誌資料を同時代の現地語史料として活用するべく、講読研究会をオンライン開催するとともに、新たな新聞・雑誌資料を収集した。また、研究会で講読した新聞・雑誌の論説・記事の翻訳と訳注を東洋文庫のホームページに掲載するべく準備を進めた。新型コロナウイルス感染症拡大の影響により、対面式の国際交流は実施できなかったが、ウズベキスタンの研究者の協力を得て、同国の国立ナヴァーイー図書館に所蔵される近現代中央ユーラシアの新聞・雑誌資料の詳細な所蔵データを入手することができた。これは今後の国際共同研究に活かしていく予定である（【内陸-2】）。

日本はかつて敦煌・吐魯番文書やその文物の研究で世界をリードしてきたが、今日では衰退傾向にある。この現状を変えて再び世界をリードしていくためには、共同研究を着実に進め、若手・中堅研究者を一人でも多く育て、研究成果を発表していくしかない。東洋文庫はこの分野で多くの文書研究の成果を上げているものの、戦前来、日本国内の諸機関や個人に所蔵されてきた多数の文書類について、その所蔵状況や内容の系統的把握と集約が十分でない点が課題として残っていた。来日した中国側研究者が着手してはいるものの、必ずしも徹底したものではなく、また、本来これは日本側の研究者が

責任を持って調査し、データ化をはかる必要があり、これを実現可能なのは東洋文庫を措いて他にないと考える。2020年度は、日本に所在する敦煌・吐魯番関係文書の所在状況の概況を把握した上で、国立国会図書館の文書を、紙質を含めて実地調査する予定であったが、新型コロナウイルス感染症拡大の影響により実施できなかった。また、敦煌・吐魯番文書の研究に生涯をかけて従事した土肥義和研究員（2020年3月14日逝去）が残された膨大な「土肥義和敦煌吐魯番文書調査資料（通称「土肥ノート」）」の整理に入った（2017年度寄託、ダンボール10箱分）。これらは敦煌文書の研究に貴重な手がかりとなる調査ノートであり、2020年度はその全容の把握、整理とデータベース化の方向性を確定する作業を、若手・中堅研究者の協力を得て着手したが、主要なノート5冊を把握したところで終了した。当資料をめぐっては、2021年度からの3ヶ年計画の期間内に、国際敦煌プロジェクト（IDP）に掲載される実文書（画像）との対応関係を明らかにし、実文書（画像）と土肥氏の録文・コメントを並べた形でデータベース化し、東洋文庫で公開する予定である。上記の研究活動の拠点である内陸アジア古文献研究会は、前半こそ新型コロナウイルス感染症拡大の影響により実施できなかったが、11月以降、月1回のペースでオンライン開催した（【内陸-3】）。

チベット研究班では、チベットの歴史、言語、宗教（仏教・ボン教）、社会に関する一次資料の基礎研究として、ウパロセル編纂『大蔵経テンギル目録』、トゥカン著『西藏仏教宗義』、中央アジア出土チベット語文献、シャン・タンサクバ著『中観明句論註釈』について調査・研究した。研究成果として刊行予定の『西藏仏教宗義研究』第11巻、『中観明句論註釈』第3巻の編集準備を進めた（【内陸-4】）。

インド・東南アジア研究では、インド・東南アジアの2研究班を組織し、分担してアジア基礎資料研究に取り組んだ。

インド研究班では、前年度に引き続き12～16世紀北インドのヒンドゥー王権の刻文を中心とした史料研究、近世ムガル帝国の史料目録の作成の一環としての公文書の研究、南インド10～16世紀のヒンドゥー王権の公文書（碑文・銅板文書）を中心とした史料研究を行った。次年度以降も視野に入れた形で、新たにインド古代のプラークリット文献の収集を開始した。また、研究員各自の研究分野における近年の研究を中心とした文献目録の作成に取り組んだ。また、病気療養中であった小名康之研究員が回復し、オンラインの形ではあるが研究班の活動に復帰した。（【南ア】）。

東南アジア研究班では、研究テーマ「近世東南アジアをめぐる旅行記史料

の研究」を推進するため、原則、月3回の研究会を開催した。年度の前半は、昨年度から講読してきた17世紀の終わりにサファヴィー朝下のペルシアからシャムのアユタヤ朝に赴いたペルシア使節の航海記、*The Ship of Sulaiman* (tr. by John O’Kane, 1972, London) の本文 Part I の後半のインドからシャムに至る部分と、Part II のシャムの首都アユタヤに到着し、国王やアユタヤ在住のペルシア系住民との接触、国王の象狩りへの招待の箇所を輪読した。マレー半島西岸のテナセリウムからマレー半島を横断し、チャオプラヤー川を遡りアユタヤに至るまでのシャムの状況、またアユタヤ在住のペルシア系住民の王朝におけるプレゼンス、さらに国王の使節への対応を検討した。これを通して、近世東南アジアの港市国家として全盛期にあったアユタヤ朝が、多様な出身地の人々を抱えていたことや、そこでの社会統合のあり方を検討した。

また、前近代の東南アジア社会を検討するための重要な資料となる、東洋文庫所蔵の故仲田浩三氏収集の東南アジア島嶼部を中心とする碑文拓本と関係資料の整理を進めた。その目録『東南アジア島嶼部を中心とする碑文拓本と関係資料』を2022年度に出版するための準備を進めた。

東南アジアへの海外出張は見合わせざるを得なかったが、2019年度のインドネシアでの訪問調査により、その存在が判明した1930年代に中部ジャワのスラカルタで建材屋を営んでいた華人の残した帳簿やメモ、ビジネス相手とのやりとりをめぐる Qiep Hong 文書を購入した。当時のインドネシアの社会経済史や日中関係史の資料として貴重であり、2021年度以降カタログ化および内容の分析を進める予定である。今後の分析を通して、この種の資料を基にした国際交流や国際シンポジウム開催の可能性を構想した（【東南】）。

西アジア研究では、新型コロナウイルス感染症拡大により、国内外での移動や集会の開催が困難になった。このため、国際集会および資料講読セミナーが2021年度以降に延期となった。ヴェラム文書研究（第二期）については、2019年度にフェス関係の7文書の校訂・研究を進め、*The Vellum Contract Documents in Morocco in the Sixteenth to Nineteenth Centuries*, Part II (TBRL22) を刊行したことで、未校訂の文書は皮紙文書4点と木片文書46点となる（【西ア】）。

東アジア資料研究では、台湾の中央研究院歴史語言研究所との間の資料交換協定（2006年締結）に基づき、同研究所から漢籍電子文献資料庫（データベース、約7億字）の提供を受けた。その対価として、東洋文庫所蔵の貴重洋書・漢籍約10,000コマのデジタルデータを提供した。また、本協定を2021～2023年度まで延長するための合意書を締結した。これにより、同研究所の

作成した漢籍電子文献資料庫の東洋文庫内における授權使用の条件を確保したことになる。このことは、東洋文庫の研究員および閲覧者の研究に寄与すること、きわめて大きいものがある。

(2) 総合的アジア研究データベースの推進（開発期）

担当：會谷佳光、相原佳之

全研究班が参画する総合アジア圏域研究では、研究部執行部の研究データベース共同研究担当者が中心となって研究データベースの構築をより一層推進するべく取り組んだ。2020年度は、新型コロナウイルス感染症拡大の影響により「研究データベース会議」は未開催に終わったが、「(1) アジア基礎資料研究の構築と、それによる現地研究機関との共同研究の新展開」で実施できなかった出張予算をデータベース作成のための謝金に投入することで、当初の想定以上にデータベースの構築を推進することができた。

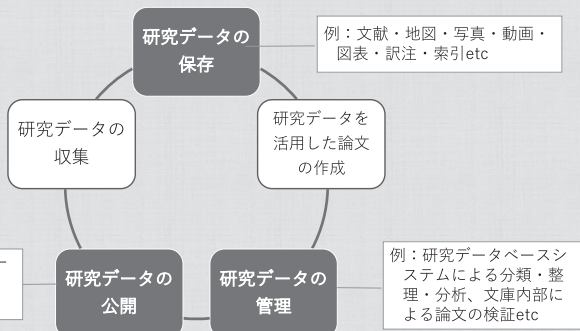
研究部の取り組む研究データベースは所蔵資料のデジタル化とは異なり、東洋文庫の研究員・研究班の長年にわたる資料調査・研究活動の研究成果（論文・著作・索引・訳注・図表など）およびその副産物として収集・作成された研究データ資源を、保存・管理・公開するためのデータベース・システムであり、研究データベース会議を基盤に、研究データベース共同研究担当者が研究班・研究グループと協力して所蔵資料のデジタル撮影、およびメタデータ等の作成を進めると同時に、研究協力者の中村覚氏（東京大学史料編纂所前近代日本史情報国際センター助教）と協同してシステム開発に取り組んだ。

研究データベース全体のタイムスケジュールについては、次頁の図で示したように、2015～2017年度の試行期を経て、2018～2020年度は、第2段階の「開発期」に位置づけ、研究データベース会議を基盤に研究データベースの開発を進め、共通のフォーマットに基づくプラットフォームを持ち、地域横断的かつ通時代的な汎用性の高い横断検索システムを完成させ、システム開発およびデータ収集・整理に取り組み、2020年度までの公開を目指した。画像データについてはIIIF（International Image Interoperability Framework）を導入し、テキストデータについてはTEI（Text Encoding Initiative）を導入するなど、国際規格に準拠したものとすることで、国立情報学研究所（NII）、アメリカのハーバード・エンチン研究所等、国内外の関係諸機関との連携も視野に入れている。2021年度以降は、第3段階の「発展期」に位置づけ、各研究

総合的アジア研究データベースのコンセプト

研究データの保存・管理・公開が一体化した、人文系に特化した研究データベースを構築し、国際標準として国内外に発信する。

例：WEB公開によるデータの利活用、外部による論文の検証etc



2015～17年度
試行期

2018～20年度
開発期

2021年度～
発展期

計画立案・システム検討

データ収集・システム開発

データ拡充・国際規格化 (IIIF・TEI)

データベースのデータの拡充、国際規格化に不断に取り組んでいく。

東洋文庫の刊行物のデジタル化公開をより一層推進するため、2018年9月、東洋文庫リポジトリ「ERNEST」(<https://toyo-bunko.repo.nii.ac.jp/>)を新システム「JAIRO Cloud」に移行して以降、データの充実に努めた結果、登録データ件数は4,649件に達し（2021年3月末現在）、2020年度（2020年4月～2021年3月）のダウンロード件数は108,107件を記録した。今後、研究員の研究成果やその副産物を保存・管理するための受け皿としても活用していく。

2020年度は開発期の第3年度として、データ収集により力を入れるとともに、理系研究者中村覚氏（前出）の協力のもと、東洋文庫の研究員・研究班の長年にわたる資料調査・研究活動の成果である研究データ（史資料・写真・地図・パンフレット・論文・解題・索引・研究ノートなど）の保存・管理・公開を一体化したデータベース・システムのプロトタイプ版を開発し、デー

2020年度東洋文庫リポジトリ「ERNEST」利用統計

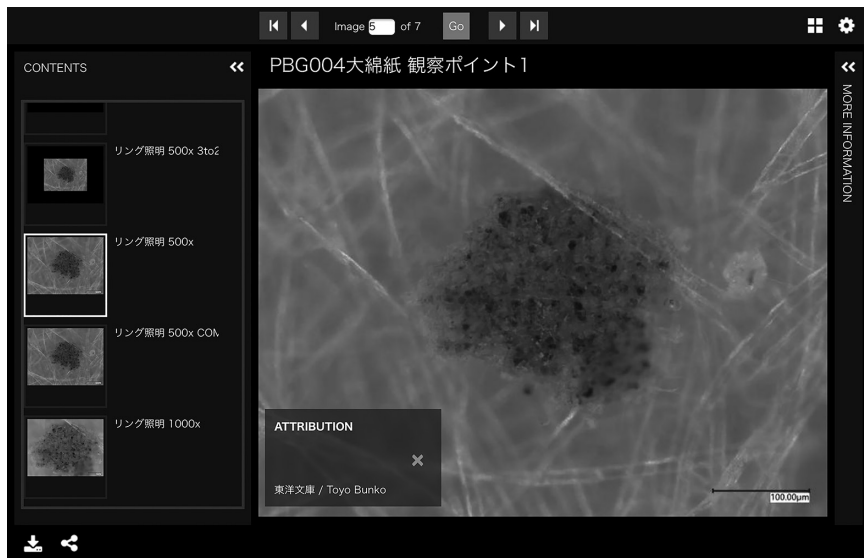
年 月	検 索	閲 覧	ダウンロード
2020年 4 月	1,346	3,338	8,278
5 月	1,690	5,085	7,255
6 月	3,397	7,122	9,332
7 月	3,456	9,902	14,048
8 月	2,318	6,282	7,974
9 月	1,368	3,791	6,033
10月	1,784	4,094	11,442
11月	1,367	4,998	9,709
12月	1,759	5,203	7,982
2021年 1 月	1,341	4,936	7,601
2 月	1,232	3,406	6,422
3 月	4,459	7,405	12,031
合 計	25,517	65,562	108,107

データベース計画のうちデータ収集・整理が一定程度完了したものを登録して試験運用を行った。

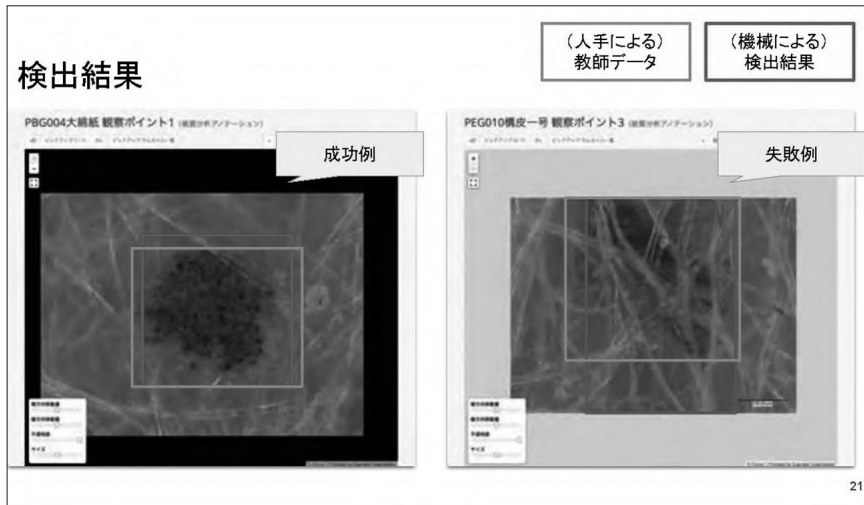
文理融合型アジア資料学の主要課題として、紙質調査チーム（p.38を参照）主導のもと、サンプル資料として紙譜（紙の素材資料集）の紙質データを収集して、紙質判断のため基準データを蓄積し、紙質調査に適した研究データベース・システムの構築を進めた。さらに蓄積した紙質データをもとに、機械学習により紙の作成原料について初歩的な判定ができるシステムの開発を始めた。この開発にも、上記の中村覚氏の協力を得ている。

テキストの自然言語処理に有用なツールである N-gram につき、同ツールを用いた研究に通じた中塚亮氏（東洋文庫奨励研究員）と打ち合わせを行い、東洋文庫における N-gram の利用可能性と今後の協力について話し合った。N-gram 導入のため、中塚氏の研究対象である『新刻鍾伯敬先生批評封神演義』22冊（計1,178コマ）、『新刻全像三宝太監西洋記通俗演義』22冊（計1,340コマ）のデジタル撮影を行った。

現代中国研究の国際関係・文化グループでは、東洋文庫が所蔵する「日本人の中国旅行記」の文献目録と解題の作成に尽力し、下記の研究成果、および関連する過去の東洋文庫刊行物を東洋文庫リポジトリ「ERNEST」上に公



2020年度に構築した紙質分析データベースの画面



開発中の機械学習システム
(中村覚氏のレジュメより)

開した。

村田雄二郎・池田尚広・久保茉莉子・関智英・中村元哉・山口早苗・吉見崇『明治以降日本人の中国旅行記（解題）』補遺（戦後篇）

<http://doi.org/10.24739/00007426>

東洋文庫近代中国研究委員会『明治以降日本人の中国旅行記（解題）』（東洋文庫、1980年）

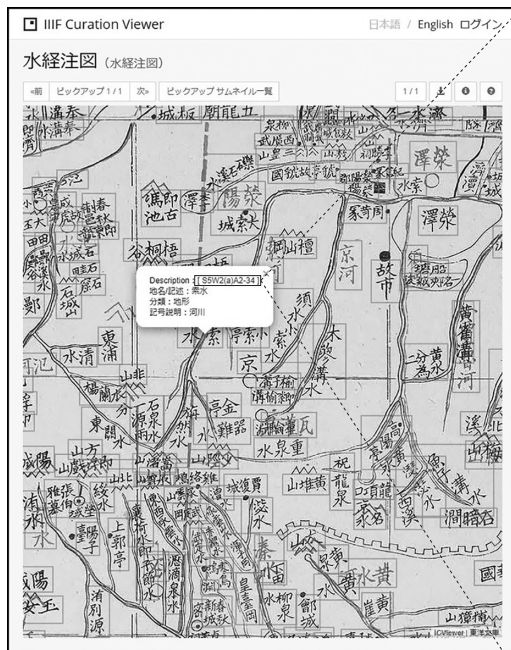
<http://doi.org/10.24739/00007427>

現代イスラーム研究では、「日本における中東・イスラーム研究文献 DB」のアップデートを日本中東学会と連携して継続し、1,200件の新文献を「イスラーム地域研究資料室サイト」に掲載し、データベース文献総件数は59,820件（2021年3月末）となった。年間のアクセス数については、後掲の「2020年度研究データベース・アクセス数」を参照。

東アジア研究のうち前近代中国研究班では、中国古代地域史研究の基礎資料ともいべき『水経注』の研究にとり、極めて有用な『水経注図』（楊守敬・熊会貞撰、光緒31年（1905）宜都楊氏觀海堂刊本朱墨套印、全8冊）のデータベース構築を進めた。『水経注図』には全8冊に分割して地図が収録されているが、これをデジタル撮影し、画像上で繋げて1枚の地図にした上で（2019年度実施）、IIIF 画像上に地名等の記述と位置情報をアノテーションとして付与する作業を進め（計23,100件）、中村覚氏（既出）との協同のもと、地名や記述、図中の区画などから検索できるシステムを開発し（次頁の図を参照）、2021年3月までに全データの登録を終えた。今後、改良の上、2021年度前半に一般公開する予定である（【東ア-1】）。

2019年度に引き続き、朝鮮半島における原三国時代～三国時代遺跡のデータベースの作成を進めた。とくに今年度は辰韓・新羅地域の集落および墳墓資料のデータベース化を行った（マイクロソフト社 Access を使用）（【東ア-2】）。

「中国社会経済・基層社会用語のデータベース化」グループでは、『新刻天下四民便覧三台万用正宗』巻21、商旅門、および東北大学・狩野文庫蔵『商賈指南』の語釈1,219項目を整理し、研究データベース公開に向けての補訂作業を継続した。『中国社会経済史用語解』〈法制篇〉の約12,000語にわたる用語解説データの Excel 入力、および第1レイヤ～第3レイヤの項目分類をほぼ完了し、研究データベース公開に向けた分類・解説文の補訂等の追加作業を継続した。また、唐奨基金では、既刊『中国社会経済史用語解』〈財政〉〈経済〉〈社会〉〈公文書〉のデータベース（東洋文庫サーバ内に構築したコピー



地名に情報（アノテーション）が付けられており、その部分をクリックすると、詳細情報へのリンクと簡易情報が表示される。



地名の詳細表示。「索水」という地名の情報が表示されている。

データ）を利用して各用語の参考文献・引用文献の追加と解説の修正作業を進め、『増補改訂 中国社会経済史用語解』刊行に向けた準備を行った（【東ア-3】）。

東北アジア研究班では、今まで所属研究員が1980年代以降に実施した、中国東北部、新疆ウイグル自治区、モンゴル、ロシア極東等における調査の画像・映像資料等に対して整理・研究を行った（【東ア-7】）。C.A. ダニエルズ研究員が中国雲南省で収集して東洋文庫に寄贈した碑文資料162件について目録整理、碑文の翻字（計46点）を継続するとともに、研究データベース構築（IIIF による画像公開とアノテーション機能による釈文の付加など）について検討した（【東ア-8】）。

内陸アジア研究のうち中央アジア研究班では、2020年度に刊行した *Catalogue of the Old Uyghur Manuscripts and Blockprints in the Serindia Collection of the*

Institute of Ori-ental Manuscripts, RAS, Volume 1. の基礎の1つとなったマイクロフィルムのデータベースについて、すでに東洋文庫にてExcelを基盤とした専用のシステムを構築済みであるが、カタログの出版によって明確となったIOM (Institute of Oriental Manuscripts) のデータを取り入れつつ、今後も整備を継続する予定である (【内陸-1】)。将来のデータベース化に備えて、*Yash Turkistan* (『若きトルキスタン』) 1929～1938年、*Islam Mejellesi* (『イスラーム雑誌』) 1924～1927年、*Asri Muslumanlik* (『現代のムスリム』) 1924～1927年等の雑誌資料と関連資料のCD化を行った (【内陸-2】)。

チベット研究班では、河口慧海請来チベット写本大蔵経について、すでに撮影した「宝積部」全6巻 (第51～56巻) の画像データを利用した研究データベースを構築するため、10月にライデン大学シルク教授の研究チーム (Open Philosophy; <https://openphilology.eu>)、ウィーン大学タウシャー教授の研究グループ (チベット大蔵経プロジェクト、Buddhist Kanjur Collections; <https://www.univie.ac.at/cirdis/research/buddhist-kanjur-collections-in-tibet-s-southern-and-western-borderlands>) と覚書を締結した。これに基づき、国際共同研究を目的とした画像共同利用を開始した。東洋文庫チベット研究班が画像データの調査と宝積部經典の研究資料の調査を行い、ライデン大学の研究グループが宝積部經典の解題、ウィーン大学の研究グループが河口慧海請来写本大蔵経の系統と資料的価値に関する解説を作成した。これらの画像と研究成果は後日一般公開する予定である。また、同様な形式での公開を目指して華嚴部第49～50巻・般若部第35～38巻 (計2,006コマ) のデジタル撮影等を行った。

この他、河口慧海請来チベット語蔵外文献写本の解読作業を進め、チベット語活字体テキストとして入力し、研究データベースの作成を行い、そのうち2点をTibetan E-Textsとして東洋文庫リポジトリ「ERNEST」に公開した (下記) (【内陸-4】)。

蔵外373 : <http://doi.org/10.24739/00007424>

蔵外443 : <http://doi.org/10.24739/00007425>

インド・東南アジア研究のうち東南アジア研究班では、*The Ship of Sulaiman* (tr. by John O’Kane, 1972, London) のPart I と II のうち輪読した箇所の本文内容について、日付・トピック・概要・関連情報の諸点をまとめた (Excelで作成、件数128) (【東南】)。

西アジア研究では、西アジア研究班収集のアラビア語木片文書46点 (第1期29点、第2期17点) につき、平面 (2D) 撮影 (第2期17点) および試行的な立体 (3D) 撮影 (第1期5点、第2期6点) を行った。将来的に校訂



アラビア語木片文書の1つ

作業結果とともに研究データベースとしての公開も視野に入れている（【西ア】）。

上記の各種データベースの登載と運用に必要な IIF 対応の画像サーバ、静的ファイルサーバ、アプリケーションサーバにつき、購入およびレンタルの方式で導入した。2021年度前半に公開し、蔵書データベース・TB OPAC・リポジトリ「ERNEST」と連動させつつ運用していく予定である。

東アジア資料研究では、現地調査によって得られた写真・録画・文献資料の電子データ化、およびデータベース化とその公開を実施した。

（一）写真

梅原考古資料26,000件につき、年次計画に従って、電子化・公開を実施してきているが、2020年度は、2018年度の縄文時代、2019年度の弥生時代に引き続き、銅鐸資料3,950件をデータベースに構成し、電子化して2021年1月に公開した（登録制、山村義照研究員担当）。公開後、アクセス数が急上昇しており（p.54「2020年度研究データベース・アクセス数」を参照）、考古学分野の研究に対する貢献の大きさが確認できる。

梅原考古資料 銅鐸 画像データベース

1. 本資料は、(財) 梅原考古資料の経緯調査成果された銅鐸関係資料、及び銅鐸土が蒐集した日本ならびに海外の考古学研究所・個人より提供された銅鐸関係資料の画像・記録を収録したデータベースである。 記述…

フリーワード

出土地・銅鐸等通称

伝承 所定	地域 府県等	市町村名	銅鐸等通称	補遺
<input type="text"/>	<input type="text"/>	<input type="text"/>	<input type="text"/>	<input type="text"/>

関係機関・関係者等

所属機関	所属者等	関係機関・関係者等	補遺
<input type="text"/>	<input type="text"/>	<input type="text"/>	<input type="text"/>

出土品

銅鐸等	銅鐸等通称	銅鐸出土物	補遺
<input type="text"/>	<input type="text"/>	<input type="text"/>	<input type="text"/>

記録資料


記録資料形態	記録資料内容	補遺
<input type="text"/>	<input type="text"/>	<input type="text"/>

時期区分

整理番号
(分類記号)

特記

検索



【伝承所定】	伝承
【地域 府県等】	鳥取県
【銅鐸等通称】	(伝) 倉吉国出土銅鐸
【出土地・銅鐸等通称 補遺】	(財) 倉吉国
【所属機関】	京馬考古資料館
【所属者等】	京馬悦蔵
【関係機関・関係者等】	山川七左衛門
【関係機関・関係者等 補遺】	山川氏 悦蔵
【銅鐸等】	横帯文銅鐸
【出土品 補遺】	原始給首有
【記録資料形態】	写真
【記録資料内容】	文様模式
【記録資料 補遺】	a.正面B面 身上部・ 原始給首(水島) b. 側面B A面・側面A B面
【整理番号 (分類記号)】	NY-146 3843a・ 3843b
【特記】	梅原氏「銅鐸の研究」 国院 (国録) 第13 3

梅原考古資料 銅鐸 画像データベース

<http://124.33.215.236/umeharadotakuopen/umejpdotakuqueryinput.php>

(二) 動画

- 1) 「中国祭祀演劇資料」の「海陸豊戯」として、「大会諸侯」「三英戦呂布」53分を下記の URL にて公開した (田中一成研究員蒐集)。

http://124.33.215.236/movie/VII_taikaisiyoko/taikaisiyoko.html

<http://124.33.215.236/movie/saneiseinryofuB/saneiseinryofuB.html>

- 2) 「中国浙江省木偶戯資料」として、「娘娘伝」50分、「薛丁山与樊梨花 三擒三放」67分を下記の URL にて公開した (馬場英子研究員蒐集)。

<http://124.33.215.236/movie/baba/20200709/chinjushi.html>

<http://124.33.215.236/movie/baba/20200912/fanlihua.html>

いずれもアクセス数が上昇しており、中国演劇史研究への貢献を確認できる。

最後に、2020年度までに公開済みの研究データベース・アクセス数を次頁に挙げておく。

2020年度研究データベース・アクセス数

データベース名	2020年 4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	2021年 1月	2月	3月	計
中国経済史用語 DB	11,302	11,689	12,323	12,987	11,738	12,586	13,011	12,604	14,230	18,777	17,779	19,687	168,713
宋会要輯稿食貨編 社会経済用語 DB	16,760	17,329	17,785	18,662	17,859	19,141	19,797	19,194	32,848	33,662	31,580	34,981	279,598
梅原郁編『唐宋編年 語彙索引』DB	5,422	5,613	5,534	5,847	5,291	5,671	5,861	5,675	5,968	6,466	5,824	6,451	69,623
新版唐代墓誌所在総 合目録（増補版） DB	2,097	2,178	2,110	2,195	1,990	2,134	2,207	2,139	2,411	2,525	2,270	2,513	26,769
日本における中東・ イスラーム研究文献 DB	※2020年4月～2021年3月の期間統計												16,477
梅原考古資料	42,889	45,346	45,958	48,932	44,204	49,963	51,672	50,106	52,787	54,809	50,493	55,907	593,066
日本 縄文時代之部													
同	37,412	38,702	38,459	40,954	36,992	41,959	55,397	53,691	55,901	55,903	53,383	59,135	567,888
日本 弥生時代之部													
同										99,295	114,378	136,714	350,387
銅鐸之部													

(3) 国際シンポジウム・ワークショップの開催による国際発信と国際交流の推進

担当：會谷佳光、相原佳之

前記(1)(2)の諸活動によって得られた最新の研究成果を、国際シンポジウム・ワークショップを開催して、広く国際的に発信することで、世界のアジア研究の進展に大きく貢献すべく取り組んだ。その一方で、アジア諸地域の現地研究機関・図書館との学術交流を積極的に推進することで、新たな分野の資料群を探索・収集し、研究図書館としての東洋文庫の一層の充実に取り組んだ。

国際シンポジウムの運営全般、および総合アジア圏域研究班の諸活動に携わって研究活動を補助する人材、および欧文による成果発信を強化するための人材を確保・育成すべく取り組んだ。

〔研究実施概要〕

総合アジア圏域研究では、2020年度、**中央アジア研究班**「非漢字諸語出土古文文献の研究」・「日本所在の敦煌・吐魯番文書の整理と研究」両グループのコーディネートによって「内陸アジア古文書研究アーカイブの役割：敦煌・吐魯番出土古文文献をめぐって」をテーマに国際シンポジウムを開催する予定であったが、新型コロナウイルス感染症拡大の影響により2023年度に延期することとなった。

現代中国研究の国際関係・文化グループでは、11月28日、華東師範大学と協同で、1950～1980年代中国を対象とする第9回日中共同研究「中国当代史研究」ワークショップを主催し、若手研究者に対して報告と交流の場を提供した (<http://www.tbcas.jp/ja/20201128WS.pdf>)。12月14日に中央研究院近代史研究所の黄克武氏の参加を得て、氏の最新の研究成果『顧孟余的清



第9回「中国当代史研究」ワークショップの様子

高』と東洋文庫が所蔵する史資料との関係性を検討し、東洋文庫が海外の中国史研究・日中関係史研究に与え得る意味を再考した（ともにオンライン開催）。

東アジア研究のうち前近代中国研究班では、「中国社会経済・基層社会用語のデータベース化」グループが、『増補改訂 中国社会経済史用語解』（唐奨基金）の公刊される時期（2023年度）の前後を目処に、国際シンポジウムの開催を検討している。過去・現在の中国に対して強い関心が集まり、国際的に中国研究者が増大する趨勢のなか、中国史・中国史料そのものへのアクセスは容易でないとされている。その1つの理由は、中国語の習熟の困難と、中国史では史的かつ制度的枠組みが複雑で独自であることが指摘されている。欧米では早くからシナ学の伝統を築いたためか、中国史やその史料学に対する理解や教育法の工夫も進んでいる。将来、中国本土、台湾、欧米の専門家を招き、日本で行われているような訓読法をベースにした読解力や、中国学の促進に資する若手研究者の訓練法をめぐって意見の交換がなされることを期待するが、本研究グループの〈用語解〉をめぐる努力も、そうした試みにおいて有力な話題を提供できると考えている（【東ア-3】）。

近代中国研究班では、2019年度に開催を延期したシンポジウム「戦前日本の華中・華南調査」について、新型コロナウイルス感染症拡大の影響によりオンライン開催とし、若手研究者の積極的な参加を含め、200人以上の参加を得た（【東ア-5】）。

内陸アジア研究のうちチベット研究班では、2020年9月にチベット大蔵経とその研究史をテーマに国際ワークショップを開催する予定であったが、新型コロナウイルス感染症拡大の影響により、2021年度に延期となった（【内陸-4】）。

(4) 研究成果の刊行・発信の強化

担当：中村威也、小澤一郎

資料調査・研究の検討過程や研究成果、および国際シンポジウム・ワークショップの内容を紙媒体・電子媒体によって発信する。特に国際シンポジウムはその速報性を重視して、開催年度にオンラインジャーナル *Modern Asian Studies Review* / 新たなアジア研究に向けて (https://toyo-bunko.repo.nii.ac.jp/?action=repository_opensearch&index_id=1052) で概要を発信し、翌年度以降

に紙媒体で報告論文集を刊行する。また、従来の和文・欧文による発信を一層推進するとともに、新たに中国語による発信を加えることで、多言語による研究成果の国際発信力を強化し、資料交流・人的交流・国際交流に資すべく取り組んだ。

また、出版物の質的向上をはかるため、東洋学の知識と編集校閲技能を兼ね備えた人材を確保・育成し、かつ日本語論文を英訳するネイティブ・スピーカーの協力を得た。

これらの出版物ならびに電子ジャーナルは、日本・アジア・欧米を結ぶアジア研究の国際交流をさらに促進するものとなるよう。

〔研究実施概要〕

東アジア研究のうち**近代中国研究班**では、研究テーマ「20世紀前半日本の中国調査研究機関に関する総合的研究」に係わる研究成果を東洋文庫和文論叢83『戦前日本の華中・華南調査』として刊行した。また、研究成果発表の場として『近代中国研究彙報』第43号を刊行した。その中で日中関係に関わる60年前のインタビュー記録について、若手研究者中心のメンバーによって活字化して掲載した（矢野真太郎「荒木貞夫の口述記録—満洲事変について—」）（【東ア-5】）。

東北アジア研究班では、資料研究データベースの構築の一環として、1980年代以降にグループ構成員が実施した、中国東北部・新疆ウイグル自治区・モンゴル・ロシア極東をはじめとする調査の画像・映像資料等に対する整理・研究を行い、細谷良夫『清朝の史跡をめぐる I 清朝全土篇』を刊行した。本書は、30年以上にわたる中国国内の清朝史跡の調査記録で、今は埋滅してしまった遺跡や文化財も含まれており、貴重なデータを収録している（【東ア-7】）。

内陸アジア研究のうち**中央アジア研究班**では、東洋文庫が所有するロシア・サンクトペテルブルクの IOM (Institute of Oriental Manuscripts) 所蔵ウイグル古文獻カタログとして、*Catalogue of the Old Uyghur Manuscripts and Blockprints in the Serindia Collection of the Institute of Oriental Manuscripts, RAS, Volume 1*, edited by IOM, RAS & The Toyo Bunko. (Chief Editor: Peter Zieme, Compilers: Olga Lundysheva, Anna Turanskaya, and Hiroshi Umemura) の編集・出版を行った。新型コロナウイルス感染症拡大の影響により IOM を訪問できない状況のもと、メールで連絡を取り合いながら編集を進め、ウイグル古文獻の研究史および今回の編集にかかわる日本の貢献について情報を提供した。なお、東

洋文庫独自で進めてきたマイクロフィルムによるテキスト同定作業が今回のカタログ編集作業の基礎データの一つとなっている（【内陸-1】）。

インド・東南アジア研究のうち東南アジア研究班では、「近世東南アジアをめぐる旅行記史料の研究」の研究活動とも関連する、奴隷の社会統合に果たす役割を東南アジアも含めて総合的に考察し、HIROSUE Masashi, “Introduction: The Comparative Study of Mediterranean and Non-Mediterranean Slavery and Bondage from Historical Perspectives”, *Memoirs of the Research Department of the Toyo Bunko*, No.78 (2020), pp.1-3にまとめた（【東南】）。

（5）若手研究者の育成

担当：會谷佳光、相原佳之

東洋文庫では、若手研究者の育成にあたり、常に公益性を重視して、東洋文庫の内部にとどまらず、東洋学の伝統を継承・発展させていくことで、将来にわたって世界の研究者に裨益し、アジアで育まれてきた人類の叡智を広く一般の人々に還元することを目指している。そこで、下記の若手研究者の育成に関わる取り組みを通して、若手研究者が自発的な研究活動等を行えるよう支援した。

〈科学研究費の応募資格を持たない者に対する支援〉

東洋文庫で研究補助等の業務に従事する若手研究者のうち科学研究費の応募資格を持たない者が、日本学術振興会の科学研究費助成事業（科学研究費補助金）「奨励研究」に申請して教育的・社会的意義を有する研究に取り組む場合、所属機関として「奨励研究」に関わる諸手続・管理を承諾することで、その研究を積極的に支援する。

〈東洋文庫奨励研究員の任用〉

博士後期課程修了者については、公募・内部推薦を併用してポストドクターを選抜して「東洋文庫奨励研究員」に任用して科学研究費の応募資格を与え、東洋文庫研究員に準ずる者として『東洋文庫年報』の「役職員名簿」にも掲載し、東洋文庫の資料を広範に利用できるようにするなど待遇面の向上を行うと同時に、研究班・研究グループのメンバーとして資料研究・アジア現地資料調査・国際会議に参加するなど実践的な研究指導を行うことで、研究者としての早期の自立を促すなど、若手研究者の育成・雇用促進を進める。

〈インターンシップ活動等の実施〉

研究者育成のためのインターンシップ活動として、ハーバード・エンチン研究所の研修プログラムへの参加や、若手研究発信支援プログラムによる英語論文の作成指導などを実施する。

〈東洋文庫諸事業への参画による実務経験の蓄積〉

奨励研究員経験者を、国際共同研究や国際シンポジウムなど東洋文庫の各種の公開学術活動に積極的に登用し、アジア各地における日本人研究者雇用のニーズに応える。並行して、若手研究者の参加に基づき東洋文庫の研究図書館としての機能を継承・発展させる一方、『東洋学報』・『東洋文庫欧文紀要』(Memoirs of the Research Department of the Toyo Bunko)等の学術誌の編集、資料収集・整理、および研究データベースの開発・発信等において、研究支援者として雇用して実務経験を積ませるなど、若手研究者の育成および雇用促進のための体制を一層充実させ、東洋文庫の事業の安定的・継続的な実施をはかる。

〈若手研究者の雇用と任期中および任期満了後の支援〉

奨励研究員等若手研究者のためのポストとして「嘱託研究員」を設定し、各部署の諸事業に参画しつつ、かつ東洋文庫の所蔵資料を活用して研究を行うことを支援している。2019年度には新たに「嘱託研究員規約」を施行し、嘱託研究員は所属長の許可を得た上で、本来の業務に影響を生じない範囲内で、個人または東洋文庫の研究班・研究グループの調査研究活動等、研究者としてのキャリアアップのために必要な諸活動を行うことができ、かつ東洋文庫から科学研究費に申請する資格を与え(ただし、文庫等での勤務時間外にみずから主体的な研究を行うだけの十分なエフォートを確保できる場合に限る)、嘱託研究員の任期満了後も東洋文庫の専任研究員として在籍し、文庫の諸施設を利用可能とすること等を定めた。

上記の東洋文庫における若手研究者育成事業についてホームページ上で広く周知する準備を進めた。

[研究実施概要]

総合アジア圏域研究では、若手研究者育成の一環として、精密顕微鏡による紙質調査において、奨励研究員の多々良圭介氏・研究協力者の段宇氏の協力を得た。

現代中国研究の国際関係・文化グループでは、8月24日、研究協力者として研究活動に参画している若手研究者、久保茉莉子氏の『中国の近代的刑事裁判』(東京大学出版会、2020年)、吉見崇氏の『中国司法の政治史1928-1949』

(東京大学出版会、2020年) に対する合評会を開催し、中央大学法学部准教授の山口亮介氏、広島大学大学院文学研究科教授の金子肇氏より、それぞれの専門分野からのコメントを得て、若手研究者の育成に取り組んだ。11月28日、華東師範大学と協同で開催した第9回日中共同研究「中国当代史研究」ワークショップにおいて、若手研究者に対して報告と交流の場を提供した（ともにオンライン開催）。

現代イスラーム研究では、中東・中央アジアの歴史的法令の翻訳作業に複数の若手研究者が研究協力者として参加し、中心的な役割を果たした。

東アジア研究のうち前近代中国研究班「中国古代地域史研究」グループの研究会では、若手研究者が参加者の過半を占める。研究員のほか、外国人研究者も加わる形で共同作業として読解、研究を進めることで、若手研究者の研究遂行能力・執筆能力の向上を図った（【東ア-1】）。現地資料調査（2019年度の韓国現地資料調査に同行）およびデータベース作成において、専修大学大学院博士課程在籍の韓国人留学生1名および修士課程の大学院生1名が研究協力者としてこれまで参加してきた。前者は2021年度に博士学位論文を提出する予定であり、後者は2020年度に修士課程を修了し、川崎市教育委員会の文化財専門職に就職した（【東ア-2】）。

「中国社会経済・基層社会用語のデータベース化」グループの研究を推進しているのは「訳註」の作業であり、正確な和文への翻訳および詳しい註釈を語彙・術語に施すことに注力している。東洋文庫では開設以来（1924～）『歴代正史食貨志訳註』の事業を継続させ、10種の「正史食貨志」本文の訓読と註釈を蓄積し、東洋文庫刊行物の核心をなす「論叢シリーズ」として2009年までに『宋史食貨志訳註』（一）～（六）・索引計7冊（総頁数3,997頁）を公刊してきた。この永年培ってきた実績・経験、なかんずく訳註のスキルは、扱う時代・主題は異なっても、新進気鋭の若手研究者にとって、資料の操作、読解の力量を増進するために有益である。本研究では訳註を主とする月例研究会を営むが、その班員の半数は老練な専門研究者であり、約半数はMC・DC研究者、またPDから現任の大学教員であって、彼らが研究成果を報告するという、一種の「上級セミナー」の形をとっている。若手研究者の担当した報告は、下記の通り。

2020年4月に上智大学准教授として着任した班員の大川裕子氏の「水辺の暮らしをささえた植物—長江下流低湿地水生植物考—」（10月27日）は、農書・本草書・地方志等の史料分析から、長江下流低湿地水生植物は唐代以降に栽培化が進み、宋元時代には商品として栽培が普及し、明代には商業的農

業の進展にともない集約的栽培が行われたことを明らかにし、『東洋史研究』第79巻第4号（2021年3月）に論考を掲載した。白山友里恵氏（上智大学大学院修士課程在学）の「『諸病源候論』における虫表象傷寒類（修士論文）」（11月24日）は、隋代に編纂された、魏晉南北朝期医学の集積ともいえる医学書『諸病源候論』を主要史料とし、病における虫の検討を試みた。原瑠美氏（学習院大学 PD 共同研究員）の「南宋末西湖の「公共性」についての一考察」（2月26日）は、南宋末の文献や地図をもとに軍営や園林の分布、湖岸の占有状況、人々の行楽ルートを整理して、西湖の「公共性」について考察を行った。いずれも班員と議論を重ね、今後の研究課題を探った（【東ア-3】）。

研究班メンバー各自が培ってきた知識や技術を若い研究者や学生に伝え、この研究分野に関心を持つ層の裾野を広げ、ひいては専門研究者を育成するため、各自が研究に活用できると判断した中国近世の法制関係の個別史料を紹介し、それを精読・分析する形式の報告会を頻繁に開催し、その蓄積をもとに入門書『演習：中国近世法制史料』（仮）の刊行を目指したが、新型コロナウイルス感染症拡大の影響により中断を余儀なくされた。この活動を2021年度に継続していくため、報告会のオンライン開催に向けた準備を進めた（【東ア-4】）。

東北アジア研究班では、2019年度に続き、若手研究者の育成を目的に満洲語研究講座を計画していたが、新型コロナウイルス感染症拡大の影響により中止を余儀なくされた（【東ア-8】）。

内陸アジア研究のうち中央アジア研究班の近現代中央ユーラシア定期刊行物研究会では、とくに若手研究者が試訳の作成を担当し、これを全員で検討する形で読解力を高め合った（【内陸-2】）。チベット研究班では、資料研究に若手研究者を参加させ、指導しながら共同研究を行っている。河口慧海請来チベット写本大藏經の研究データベースの作成において、画像データの調査に若手研究者の協力を得た（【内陸-4】）。

インド・東南アジア研究のうちインド研究班では、各研究員は様々な共同研究・学会発表等を通じて若手研究者や海外を含む多くの研究者と交流し、新しい研究動向の把握に努めた（【南ア】）。東南アジア研究班では、若手研究者の研究会への参加を積極的に促すとともに、彼らの研究テーマについて7月・11月の研究会で報告してもらう機会を設けた（【東南】）。

また、嘱託研究員、奨励研究員については、pp.89～90を参照。

なお、2020年度の若手研究者育成の実績として、大学等研究機関の研究職

に採用された方について挙げておく。

- ・小澤一郎

2016～2020年度に嘱託研究員として、欧文による成果発信に従事した。
2021年4月に立命館大学文学部准教授に就任。

- ・濱本真実

2014～2016年度に日本学術振興会特別研究員 RPD として受け入れた後、東洋文庫研究員に就任した。2021年4月に大阪市立大学文学部准教授に就任。

- ・井上弘樹

2016年10月～2018年3月の間、和文編集の臨時職員として『東洋学報』等への編集実務に携わった。2021年4月に東京医科大学医学部講師に就任。

- ・三浦雄城

2019年12月～2021年3月の間、和文編集の臨時職員として『東洋学報』等への編集実務に携わった。2021年4月に東京大学東洋史学研究室助教（任期付）に就任。

- ・西川和孝

2017年度よりクリスチャン・ダニエルス氏寄贈雲南拓本資料のデータ整理・釈文作成作業に従事している。2021年4月に明治大学法学部専任講師（中国語）に就任。

C. 日本学術振興会科学研究費による調査研究

(1) 研究成果公開促進費（学術図書）

①「渤海の古城と国際交流」

[研究代表者：清水 信行]

本書刊行の目的は、これまでの日本を中心とする渤海史研究の成果を刊行することにより、渤海研究における国際交流上の意義を深め、今後の研究に指針を与えることである。申請者の清水信行は共同編集者の鈴木靖民とともに1992年以来、ロシア科学アカデミー極東支部極東諸民族歴史学・考古学・民族学研究所の中世考古学研究部門と、ロシア沿海州の渤海遺跡についての共同研究を続けている。この間、クラスキノ古城跡の発掘調査（1998年～現

在)をロシア極東研究所と共同で行い、報告書を年次的に刊行してきた。その結果、考古学研究、文献史学における渤海研究も大きな進展を遂げた。渤海遺跡の発掘調査では、渤海の典型的な古城の構造が明確になるなどの成果を得、遺物においては渤海国の交流対象や交易の広さが明確になってきた。手工業生産の面でも渤海の中央文化の広がりやその年代も明らかになってきた。また、ロシア沿海州、中国の墓地遺跡の調査が進み、渤海国の建国集団の問題を解決する資料が充実してきた。文献史的にも、渤海国の政治・行政制度の研究、渤海国と唐、日本をはじめとする周辺諸国との関係の研究、渤海国と日本の文化交流や通交ルートの研究など各分野で研究が進展してきた。本書の内容は、第Ⅰ部 渤海の統治制度と国際交流(主に文献史学における最新の研究成果をおさめており、渤海国の政治制度、地方統治制度、国際交流、建国集団などを明らかにしている)、第Ⅱ部 クラスキノ古城の機能と性格(クラスキノ古城の考古学的研究成果をまとめたものであり、この古城が渤海国において果たした役割と機能を考古学と文献史学の視点から検討している)、第Ⅲ部 沿海地方渤海遺跡の出土遺物(クラスキノ古城出土遺物を中心に、渤海国の手工業生産の在り方、中央と地方の技術的な関係などについて検討を加えている)の3部校正となっている。考古学と文献史学の両方の視点から、渤海国の政治、経済、文化的様相を考察する内容となっている。

[研究実施概要]

清水信行・鈴木靖民編『渤海の古城と国際交流』1冊 勉誠出版刊

(2) 基盤研究B

①「戦前・戦中期における華中・華南調査と日本の中国認識」

[研究代表者：本庄比佐子] (2015年度採用、5ヶ年間・最終年度)

戦前・戦中期の中国において、日本の様々な研究調査機関が実施した調査活動資料は、戦後に至ると個別分散的にしか分析されてこなかった。本研究では、戦前・戦中期の中国での調査活動報告等を整理するとともに、その調査内容の実態を究明し、同時期の中国側資料や、近年の中国での研究成果などを比較検討し、当該時期における中国全体の政治・経済・社会文化、ならびに日中関係の特質を、歴史的総合的に考察する。特に、研究対象地域とし

ては、従来の研究では個別にしか取り上げられてこなかった華中・華南地域を中心に、華北に関する研究成果も加えて、中国全土に関する日本の調査研究の全体像を明らかにする。

〔研究実施概要（2019年度繰越分）〕

2019年度は、新型コロナウイルス感染症拡大の影響により、その研究活動の一部を2020年度に繰り越して、次の活動を行った（『東洋文庫年報 2019年度』（2020年3月発行）p.81参照）。

戦前・戦中期に台湾総督府、台湾銀行、満鉄調査部をはじめとする日本の統治機構、企業、研究調査機構などが行った華中・華南調査に関する分析をまとめるとともに、当時、日本人が中国社会をいかに把握していたか、さらにそのような認識が今日の対中観にいかなる影響を与えているか、という問題にまで考察を深めることができた。その成果は、シンポジウム「戦前日本の華中・華南調査」と論文集『戦前日本の華中・華南調査』（東洋文庫、2021年）によって公表され、当該分野の学術研究の発展に資するものとなっている。

早くから華南地域に注目し、1910年代以降、本格的に調査活動を展開したのは台湾総督府や台湾銀行であった。また上海を拠点に中国ビジネスや日中関係に関わる人材を養成した東亜同文書院、同じく上海にあって日系企業が自ら組織した日本人実業協会（上海日本商業会議所の前身）も、華中南地域に関する情報をまとめ、提供していた。しかし1920年代半ばから30年代半ば頃まで、台湾総督府や台湾銀行による華中南調査は減退する。

その後、1930年代半ば以降、当初は中国経済の活況に刺激されて、さらに1938年以降は日本軍の占領地統治に協力し、そこから新たな利益を得ようとする目的の下、満鉄や興亜院による大規模な華中南調査が展開されるようになり、台湾銀行の調査活動も再び積極化した。1930年代末から40年代初めにかけての台湾銀行による華中南調査は、日本軍の占領地統治のための具体的な方策を探った点において、満鉄や興亜院の調査と基本的に一致するものであった。

②「寄進とワクフの国際共同比較研究：アジアから」

〔研究代表者：三浦 徹〕（2017年度採用、4ヶ年間・最終年度）

寄付・寄進という行為は、人類史上広くみられる現象であり、富の再配分

や金融や福祉の役割を果たし、寄進財をめぐって国家から独立性をもつ社会組織が形成された。本研究では、イスラーム地域に広がるワクフという寄進制度を、ヨーロッパや東アジアを含め、地域や時代をこえて比較することによって、ワクフの特徴や変化を明らかにするとともに、世界史（人類史）における寄付・寄進の意味を討究する。

- 1) 国際的な研究者ネットワークにもとづく、世界大の比較研究。
- 2) ワクフ・寄進を「所有、契約、市場、公益」の観点（分析軸）から比較し、そのメカニズムのモデルを構築する。
- 3) 日本と中国の寄進をワクフと対照し、論点化することによって、日本から斬新な研究発信を行う。

〔研究実施概要〕

年度計画の策定・確認、国際研究集会の打ち合わせ、国際研究集会の準備の国内研究会、国際研究集会の開催（東京、東洋文庫）を行い、2021年3月までに、研究成果の論文投稿、研究成果の取りまとめを行う予定であったが、新型コロナウイルス感染症拡大の影響により、計画の変更が必要となった。

上記の理由により本研究課題は2021年度に繰り越しとなったため、2020年度の研究実施概要は次年度の『東洋文庫年報』において掲載する。

③「公論と暴力—革命の比較研究」

〔研究代表者：三谷 博〕（2019年度採用、5ヶ年間・第2年度）

この研究は近代に起きた6つの革命を公論と暴力の関係に着目しつつ比較する。取り上げるのはイギリス・フランス・日本・中国・ロシア・中東の革命で、日本と外国の専門家が互いに緊密な議論を行い、最後は英文論文集を刊行する。革命では公論と暴力が同時に誕生するが、暴力が蔓延する条件を探るのが第1の問題である。また、革命の終わりには暴力が排除されるが、その後、公論が維持されて自由な体制が生まれるのか、公論まで排除されて専制体制が生ずるのか、その分岐要因の解明が第2の課題である。さらに、諸革命がどんな連鎖関係に立っていたのか、アジアなど後発革命の側から先行革命の利用の様子を明らかにする。

〔研究実施概要（2019年度繰越分）〕

2019年度において、新型コロナウイルス感染症拡大の影響により、所属機

関で不要不急の用務での出張・招聘を自粛する方針となったため、予定した研究分担者2名の海外調査、および3月に予定した研究会への研究分担者・研究協力者2名の招聘ができないことが判明した。そのため、調整の結果、当該者の海外渡航やワークショップ招聘は安全が確認されるまで延期する必要があるが生じた。

2020年度において、新型コロナウイルス感染症拡大の影響により外務省から渡航に関する注意喚起が発令され、予定していた海外渡航先でも厳しい入国制限が課されたため、国際会議で発表する論文を執筆するために必須であるロシア・フランスでの現地史料調査が不可能となり、オンラインでは代替することもできず、年度内に事業を完了することが困難となったため、再繰越をすることとなった。

上記の理由により本研究課題は2021年度に繰り越しとなったため、2019年度の研究実施概要は2021年度の『東洋文庫年報』において掲載する。

〔研究実施概要〕

2020年10月までに、国際研究会の準備、欧米に出張調査を行い、2021年3月までに、第3回国内ワークショップと国際研究会を開催し、その成果をWebに掲示する予定であったが、新型コロナウイルス感染症拡大の影響で、相手国の事情により計画の変更が必要となった。

上記の理由により本研究課題は2021年度に繰り越しとなったため、2020年度の研究実施概要は次年度の『東洋文庫年報』において掲載する。

④「現代新疆における少数民族の文化動態に関する研究：民族言語出版物からの検討」

〔研究代表者：梅村 坦〕（2020年度採用、4ヶ年間・初年度）

中央ユーラシア地域のテュルク系諸民族住民の中で、相対的に人口の多いのはウイグル人、カザフ人である。彼らの近代以降における民族文化状況を辿ることを目的とする。

とくに、比較的研究蓄積の多い中華人民共和国の成立以降の時期に焦点をあてながら、新疆ウイグル自治区地域が経験した社会変動の中で、少数民族はどのような文化動態を呈してきたのか、その文化変容の実像にアプローチする。

主要な資料となるのは民族言語による出版物であるが、1980年代から東洋

文庫や個人が収集したものを核として、研究利用のための環境を整備するとともに、日本に存在する現地出版物の公開利用態勢を整えるためにカタログ・データベースを構築する。

〔研究実施概要〕

2020年8月までに、交付金額にともなう実施計画の再編、必要機器の整備と実施打ち合わせ会議、研究対象資料（既存データ）の集約、海外調査を行い、2021年3月までに、国内調査、データ入力、データのスキャン、総括・次年度計画の検討のための会議を行う予定であったが、新型コロナウイルス感染症拡大の影響により、研究協力者・機関の事情により計画の変更が必要となった。

上記の理由により本研究課題は2021年度に繰り越しとなったため、2020年度の研究実施概要は次年度の『東洋文庫年報』において掲載する。

(3) 基盤研究 C

①「『大正新脩大藏經』編纂の実態に関する書誌学的研究：増上寺報恩蔵本を通して」

〔研究代表者：曾谷 佳光〕（2018年度採用、3ヶ年間・最終年度）

現在、冊子体、Web上のテキスト・画像データベースで、国際的な仏典のスタンダードテキストとなっている『大正新脩大藏經』については、編纂時の誤脱や衍文の多さが近年指摘されている。しかしながら、その底本や校本に用いられたテキスト、例えば増上寺の三大蔵經（高麗再彫本、宋思溪版、元普寧寺版）など、編纂時に実際に用いられたテキストを使って問題点の実証的な解明を行うことが非常に困難な状況にある。本研究の研究代表者は『大正蔵』の底本・校本として散見する「増上寺報恩蔵本」について、2010年より浄土宗寺院西蓮社にて書誌学的実地調査を重ねてきた。そこで、この西蓮社本と『大正蔵』とを校勘してテキストの異同等の状況を調査分析することで、『大正蔵』の編纂実態の一端を実証的に解明し、そこに内包される問題点を顕在化させることで、『大正蔵』をいかに活用すべきかを利用者に提起し、国内外の仏教研究に貢献することを目指す。

〔研究実施概要〕

西蓮社本のスキヤニング作業について、2020年度は69種108冊約12,000コマをスキヤンし、大正蔵の底本・校本に用いられた西蓮社本のデジタル化を完了した。

『大正新脩大藏經勘同目録』と脚注の底本・校本に関する情報を対照したエクセルデータを整理して、情報学の専門家である中村覚氏（現在、東京大学史料編纂所助教）の協力を得て、データベース化を進め、「『大正新脩大藏經』底本・校本データベース」（<https://taishozo.github.io/db/>）を構築した。

2010～12年の調査の際に作成した西蓮社本の詳細目録をデータベース用に整理し直し、中村覚氏の協力を得て「西蓮社（旧増上寺報恩蔵）藏嘉興版大藏經目録データベース」（<https://taishozo.github.io/u-renja/>）を構築した。

両データベースを連携させるとともに、西蓮社住職の青木照憲氏の下承を得て西蓮社本のスキヤニング画像ともリンクさせた。「『大正新脩大藏經』底本・校本データベース」には、そのほか、大藏出版株式会社の下承を得て『大正新脩大藏經勘同目録』の全文画像データ（IIIF）をリンクさせ、SAT 大藏經テキストデータベース研究会の下承を得て「SAT 大正新脩大藏經テキストデータベース2018版（SAT 2018）」の各経典冒頭へのリンクを貼った。

本研究の目的である『大正蔵』と西蓮社本のテキスト比較については、テキストデータ公開のための国際的ガイドライン TEI（Text Encoding Initiative）を導入して実施する方針に変更し、SAT 大藏經テキストデータベース研究会より提供いただいた『釈禪波羅蜜次第法門』の IIIF テキストを元に西蓮社本の TEI テキストを作成するべく、校勘情報のタグ付け作業を開始するとともに、中村覚氏の協力で IIIF 画像とリンクした TEI ビューワーの開発を開始した。

上記の方針変更によって生じた作業が2020年度内に終了できず、補助事業期間の延長を申請することとなった

②「三上次男考古・美術資料の研究とデータベースの作成」

〔研究代表者：金沢 陽〕（2018年度採用、4ヶ年間・第3年度）

故三上次男博士が、戦前戦後を通じてユーラシア大陸各地の踏査によって遺したフィールドノート（公益財団法人出光美術館蔵）を解析し、同氏の収集遺物（出光美術館および青山学院大学蔵）、および膨大な写真・図面・拓本等（出光美術館蔵）と、このフィールドノートの記載とを結びつけ、考古・美術史資料目録を作成する。そして東北アジア史・東西交渉史の貴重な資料

としてデータベースを整備し、後進の研究者の利用に供することを目的とする。これは、同様の先駆的な成果としての東洋文庫『梅原考古資料目録』を意識し、最終的には研究者の閲覧可能な状況に仕上げることを目標とする。

〔研究実施概要〕

当研究は、対象資料の整理・解析が主作業であり、2020年度は新たに発見された資料を含めて、書き起こしやスキニングを進捗させることが課題であり、それが資料解析等、次に進むための必須の段階であった。ところが2019年度末より新型コロナウイルス感染症拡大に伴い、資料保管者である公益財団法人出光美術館および青山学院大学より、構内の保管庫への立ち入りが停止され、今日に至っているため、1年以上にわたり完全に研究活動が停止している。したがって研究費も全く支出する機会がなかった。

③「西洋における知識革命の物質的基盤の解明—16～18世紀の西洋古典籍の紙分析から」

〔研究代表者：徐 小潔〕（2019年度採用、3ヶ年間・第2年度）

本研究は、ヨーロッパ各地域の16～18世紀の古典籍を調査・分析対象とし、各地域で使用されていた印刷用紙を非破壊的な調査方法を用いて、紙の原材料を解明する。その地域間の差異を検証するうえで、中国を主とする同時代のアジアの紙との比較を行い、当時のヨーロッパで流通していた紙の生産地を明らかにする。同時に、東西貿易に関する史料をオランダやロンドンで収集し、紙質分析の結果とあわせて「紙」の流通ルートを検討する。上記の結果を整理することによって、出版文化が急速に発達した16世紀から、ヨーロッパにおける知識革命に「紙」という物質的基盤を提供した東西交流史の一端を究明する。

〔研究実施概要〕

2020年度は、16～17世紀にヨーロッパ各地で刊行された書物を対象として、高精細デジタル顕微鏡を用いて紙の非破壊調査分析を行った。また、比較するため、同じ手法で15世紀末にヨーロッパ各地で刊行されたインキュナブラの調査分析も行った。その結果、近世ヨーロッパで使用していた印刷用の紙は地域によって異なる特徴を持つことが判明した。古布を原料として製造された紙以外に、一部の地域で使用されていた紙から製紙原料となる蘘も観察

できた。これまで言われてきた「19世紀までヨーロッパは古布からしか製紙できなかった」という主張を覆す可能性を持つ調査結果となった。

また、インキュナブラおよび16～17世紀のヨーロッパの印刷用紙から「青い繊維」が製紙原料に混合している特徴を新たに発見した。先行研究では18世紀から、紙の色を白く見せるため、「青い繊維」を混ぜ始めたとしていたが、実際にはそれ以前にこの方法が使われていた可能性がある。

一方、藁を製紙原料に混合させる方法は、中国及び日本ではよくみられる。そのため、近世ヨーロッパで使っていた藁が入っている印刷用紙は、中国あるいは日本から輸入された可能性もある。これを実証するためには、同じ種類の紙が中国や日本で製造されていたかどうかを確認する必要がある。そこで、同じ方法で同時代の和紙と中国紙も調査・分析した。しかし、現時点では、ヨーロッパで用いられていた紙はまだ見つかっていない。今後は引き続き調査データの収集に努力する予定。

④ “From Transculturation to Culture-Specific Ethics: The Implementation of Confucian Ritual Forms in 19th Century Japan”

[研究代表者：R. チャード]（2019年度採用、4ヶ年間・第2年度）

This project will examine the function of Confucian ritual forms in Japan in the late Edo period from cultural history and material culture perspectives. The focus of the research will be on documentary sources relating to domain schools, to explain why these ritual forms continued when Confucian learning declined as new forms of learning and education grew.

[研究実施概要]

In the second year of this research project on the deployment of Confucian symbols in Japan during the 19th century, the emphasis remains on locating primary source documents in libraries and archives in Japan, as much as was possible amid the ongoing pandemic restrictions. These sources reveal clues to the survival of Confucian ritual forms and their purpose in domain schools. Japanese native learning, and foreign learning, had by then assumed a major role in the curricula of such schools, yet we find that Confucian ritual forms continued to be displayed in many of them. This was in part a legacy of the Kansei restrictions imposed by Matsudaira Sadanobu late in the 18th century, with the associated major restoration of the Yushima Seido temple

in Edo. As part of this legacy, Confucius temples were maintained in some domain schools but not others, in a cultural climate where their religious nature was no longer deemed necessary to express their bona fides as educational institutions. The concept of transculturation is useful to explaining the disparity of approaches in different places: the schools' intended function was very much planned and directed by domain authorities according to local needs. The economic and social crises of the 18th century had eased in many domains, but moral transformation to maintain social order remained an important aim of domain schools, even with the diminished status of Confucian learning. Rather than passive reception of external culture, the domains were pursuing agendas they had devised themselves.

(4) 若手研究

①「20世紀初頭の西・南アジア境界域におけるアフガン人武器交易ネットワークの研究」

[研究代表者：小澤 一郎] (2019年度採用、3ヶ年間・第2年度)

この研究では、西・南アジア境界域で20世紀初頭に盛行したアフガン人の武器交易を対象とし、以下の3つの課題に取り組む。1) ペルシア湾からユーラシア大陸内陸部まで広がるアフガン人の交易網について、海陸両域の交易網を結びつける観点からその全容を明らかにする。2) イラン・インド・アフガニスタンという三国家の狭間で海上・陸上交易の結節点となったペルシア湾北岸マクラーンの「フロンティア」性に注目しつつ、アフガン人による交易活動の具体相を解明する。3) 英領インドをはじめとする周辺諸国家による交易禁圧の過程を追うことで、近代国家の成立とフロンティアの周縁化・消滅、超地域的取引網の変容の過程を跡付ける。

[研究実施概要]

- a) 2020年度は、2019年度にイギリスで2度行った史料調査にて収集したイギリス側史料を読解・検討した。そしてその成果をもとに、2020年12月に開催された日本オリエント学会第62回大会にて「19・20世紀転換期のアフガン人による武器交易の再検討」の題目で報告を行った。この報告では、本研究計画の第1段階である、19世紀末から20世紀にかけてのアフガン人の武器交易活動の全体像の再構成・再評価を行い、ペルシア湾からユーラシ

ア大陸内陸部まで広がるアフガン人の武器交易網を、近代の境界領域という場において海陸両域を結びつける交易活動という観点からとらえなおすことを試みた。この成果については2021年度中に学会誌に論文として投稿予定である。また、同時並行して、アフガン人の武器交易の舞台となった西アジア・南アジア境界領域、とりわけマクラーンに注目した形での検討も開始した。この成果については2021年度中に学会報告の形で公表できればと考えている。

- b) 一方で、新型コロナウイルス感染症拡大の影響により、2020年度の夏にイギリスで、春にイランでそれぞれ予定していた史料調査はすべて中止となった。このため、イギリス側史料の視点を相対化する可能性を持つと考えていたイラン側の史料の調査はほとんど行うことができなかった。また、イギリスの図書館・文書館の複写部門も大部分の期間閉鎖となり、複写物の購入も行うことができなかった。このため、2020年度の研究は基本的に2019年度中に収集したイギリス側史料に基づいて行わざるを得なかった。

D. 三菱財団研究助成による調査研究

(1) 人文科学研究助成

①「モリソン・コレクションの学際的・総合的研究：近代東アジア史と「アジア文庫」形成の資料的分析」

〔研究代表者：斯波 義信〕（2019年10月採用、1ヶ年間）

※新型コロナウイルス感染症拡大の影響により1年間期間延長

本研究は東洋文庫現有のモリソン文庫の資料学的・歴史学的な研究を通じて、モリソンのコレクション全体にわたるいっそう精緻な分析と周到な整理をめざすものである。モリソン文庫は24,000件余りに及ぶ、20世紀初頭の世界随一の欧文書コレクションで、そのうちモリソン自ら蒐集した6,000点余りのパンフレットは、二度と入手できない貴重なものである。本研究は従来行ってきたパンフレット・コレクションの研究を継承しつつ、時事性の高いパンフレットとそれ以外の古書コレクションとの関連性に着目し、詳しく明らかにすることで、モリソンのコレクション全体の形成過程とそれを成り立たせた歴史過程を解明する。ひいては、モリソンと同時代の東アジアをめぐる知

の体系や人々の事実認識のありようばかりでなく、現代における史実の再発見・再構成の方法をも見なおし、現代の日本に東洋文庫が存在することの、世界史上の意義をも明らかにしていきたい。

〔研究実施概要〕

本研究課題は研究活動を遂行中のため、研究期間終了後の『東洋文庫年報』において掲載する。

②「インド古代～中世初期におけるバラモンと王との関係の研究：灌頂を受ける資格としての王の出自について」

〔研究代表者：吉水 清孝〕（2020年10月採用、1ヶ年間）

※新型コロナウイルス感染症拡大の影響により1年間期間延長

伝統的なインドの社会構成を司祭バラモン・武人クシャトリヤ・平民ヴァイシャ・隷民シュードラの4階級に分け、個人が属する階級は親の階級により生まれながら決まっているとするヴァルナ制度では、王として国を統治するのはクシャトリヤのみの特権とするのが一般的であるが、歴史的資料には、バラモンやヴァイシャの出身者が王朝を築いたという記録が相当数残っている。本研究では、王権儀礼としての灌頂についての文献に着目しつつ、灌頂を受けるにはクシャトリヤ出身であることが必要だとする記述と、必要でないとする記述を収集し、王権儀礼にどうかかわるべきかについて、非クシャトリヤの王を権威づけることで得られる経済的リターンへの期待感と、階級秩序を乱すことになるリスクへの警戒感を動機とした、バラモン司祭が抱いた相矛盾する意識を読み取り、伝統的インドで宗教者と為政者が相互にどのように対立し、また依存し合っていたかを明らかにする。

〔研究実施概要〕

本研究課題は研究活動を遂行中のため、研究期間終了後の『東洋文庫年報』において掲載する。

(2) 人文科学研究助成「社会的課題解決のための大型連携研究助成」

「20世紀後半の東アジアにおける風土病の制圧過程の検証と疫学的資料の整理・保存・公開」

[研究代表者：飯島 渉] (2019年10月採用、3ヶ年間・2年目)

※新型コロナウイルス感染症拡大の影響により1年間期間延長

20世紀の日本社会は、日本住血吸虫症、リンパ系フィラリア症、マラリアなどの感染症や回虫などを原因とする寄生虫症を制圧した。こうした感染症や寄生虫症（風土病ないしは地方病と呼ばれていた）の制圧の経緯は一様ではなかったが、対策のための調査研究にもとづく学知や経験の蓄積の上に、流行地域の住民が積極的に対策に参加し、それを学校保健などの制度や組織が支えたことが大きな特徴であった。また、こうした経験は、1960年代から1970年代に、台湾・韓国や中国に導入され、各地で風土病が制圧された。

本研究計画は、人文学（医療社会史）の研究者と医療・公衆衛生の研究者が共同して、風土病の制圧過程の検証と関連する資料の収集・整理・保全・公開を進め、領域横断的な研究基盤を構築することを目標とする。こうした研究基盤の確立を通じて、今日の医療協力や国際保健に対して効果的な活動を進めるための提言を行うことも可能となる。

[研究実施概要]

本研究課題は研究活動を遂行中のため、研究期間終了後の『東洋文庫年報』において掲載する。

E. 東洋文庫研究員・研究課題一覧

研究員名	研究課題
會谷 佳光	和刻本を中心とした仏典の書誌学的研究
相原 佳之	中国明清時代環境史
青木 敦	宋代の法と経済
青山 亨	古代ジャワ史・ジャワ文学研究
青山 治世	清代一近現代の中国外交史
青山 瑠妙	現代中国政治・外交の研究
秋葉 淳	オスマン帝国末期の社会および制度
浅田 進史	独中関係史
浅野 秀剛	日本版画美術の研究
阿部 尚史	イランにおけるムスリム家族史
天児 慧	現代中国の政治体制及び国際関係

研究員名	研究課題
新井 政美	トルコ近代史
荒川 正晴	中央アジア古代史
飯尾 秀幸	中国古代国家史
飯島 明子	東南アジア大陸部北部の歴史
飯島 武次	殷周時代の考古学研究
飯島 渉	医療社会史
池田美佐子	エジプト近現代史
池田 雄一	中国古代社会史
石川 寛	南アジア史
石川 重雄	中国巡礼社会史の研究
石塚 晴通	日本語の歴史的研究、古代漢字文献学
石橋 崇雄	清朝政治史
磯貝 健一	イスラーム期中央アジア古文書研究
井上 和枝	朝鮮時代郷村社会史研究・朝鮮女性史研究
井上 和人	東アジア古代都城制度の比較研究
今西祐一郎	源氏物語を中心とした平安時代文学の研究
林 載桓	中国政治、比較政治学
上田 望	中国長編小説
上野 英二	平安朝文学の研究
内山 雅生	近代中国華北農村経済史
梅村 坦	ウイグル民族誌、内陸アジア史
宇山 智彦	中央アジア近代史・現代政治
江川ひかり	オスマン帝国社会経済史
江南 和幸	文化財科学、里山学
遠藤 光暁	中国語音韻史・方言学
大川 謙作	現代中国およびチベット民族の歴史と社会
大川 裕子	中国農業史・水利史
大河原知樹	19-20世紀シリアの社会史・政治史
大里 浩秋	清代末期の革命思想、日中関係史
大澤 顯浩	中国出版文化史、中国近世の地理書、中国地図学史
大澤 肇	近現代中国における学校教育史
大澤 正昭	中国近世社会史
太田 啓子	アラビア半島・紅海文化圏の歴史

研究員名

太田 信宏
太田 幸男
大谷 俊太
岡崎 礼奈
尾形 洋一
岡野 誠
岡本 隆司
小川 快之
奥村 哲
奥山 憲夫
尾崎 文昭
小澤 一郎
小田 壽典
小名 康之
小沼 孝博
小野寺史郎
粕谷 元
糟谷 憲一
片桐 一男
片山 章雄
片山 剛
加藤 恵美

加藤 直人
金沢 陽
金子 修一
金丸 裕一
亀谷 学
川井 伸一
川合 安
川崎 信定
川島 真
神田 豊隆

研究課題

南インド近世史
秦墓竹簡の研究
室町・江戸時代文学の研究
日本近代美術史
近現代中国政治外交史
中国法史、敦煌・吐魯番文献
近現代中国外交史
中国宋代から清代の社会史・文化史・法制史
中国近現代史
明代制度史研究
20-21世紀中国の文学
近現代西アジア軍事社会史
古トルコ語仏教文献の研究
インド近世、ムガル政治史
内陸アジア史、17-20世紀の新疆研究
中国近現代史
トルコ近現代史
18-19世紀朝鮮政治史
日蘭文化交渉史の研究
中央アジア古代史、近代探検史
珠江デルタ農村社会史、近代中国土地調査事業史
在日韓国・朝鮮人社会の史的考察と国際比較—文化間関係の観点から
清朝の民族統治政策・清代檔案史料の研究
中国陶磁史研究
中国古代史
中国政治経済史・日中関係史
初期イスラーム史
中国企業研究
六朝貴族制の研究
チベット仏教の研究
近代中国外交史
日本外交史、アジア国際関係史

研究員名

菅頭明日香
貴志 俊彦
岸本 美緒
北川 香子
北村 文夫
北本 朝展
橘堂 晃一
金 鳳珍
楠木 賢道
工藤 裕子
久保 亨
窪添 慶文
久保田 淳
熊本 裕
栗山 保之
L. グローブ
黒田 卓
氣賀澤保規
巖 善平
高野 太輔
興梠 一郎
小嶋 茂稔
小嶋 芳孝
小杉 泰
小寺 敦
後藤 明
小長谷有紀

小浜 正子
小松 久男
小南 一郎
近藤 信彰
齋藤真麻理

研究課題

考古遺物の化学的分析
東アジア地域の比較メディア史研究
明清時代地方社会史
カンボジア史
現代中東問題の研究
デジタル・アーカイブ
ウイグル仏教史の研究
東アジア国際関係史、比較思想
清代東北地域史、清代政治史
インドネシア社会史、華人史
中国近現代史
魏晉南北朝時代史
日本古典文学、和歌文学史
イラン語史の研究
インド洋世界の交流史
1930年代の社会調査から見たある華北の県政府の活動
近現代イラン史
隋唐政治社会文化史
中国の経済、三農問題、人口と労働
初期イスラーム史
現代中国論・中国現代史
中国古代史
渤海文化の考古学的研究
現代イスラーム政治思想、現代イスラーム法学
中国古代史
イスラーム社会と政治の研究
モンゴルおよび中央アジアに関する探検記録写真を用いた
地域像の再構築
東アジアジェンダー史、中国近現代社会史
中央アジア近代史
中国芸能史研究
イラン史・ペルシア語文化圏史
中世日本文学の研究

研究員名

早乙女雅博
櫻井 徹
佐々木 紳
佐藤健太郎
佐藤 慎一
佐藤 宏
佐藤 仁史
澤江 史子
塩沢 裕仁
塩谷 哲史
設楽 國廣
部 勇造
篠木 由喜
篠崎 陽子
斯波 義信
嶋尾 稔
島田 竜登
清水 宏祐
清水 信行
志茂 碩敏
徐 顕芬
徐 小潔
邵 迎建
城山 智子
新免 康
末成 道男
須川 英徳
杉本 史子
杉山 清彦
鈴木 恵美
鈴木 董
鈴木 均
鈴木 博之

研究課題

東アジア考古学の研究
在留外国人のコミュニケーション誌の現況について
オスマン帝国近代史
マグリブ・アンダルス史
中国近代政治資料研究
農村経済社会の長期変動
近現代江南農村社会史研究
現代トルコ政治
中国古代歴史地理研究
中央アジア近現代史
オスマン帝国末期政治史
南アラビア古代史
博物館展示・教育論
前近代中国文化史
中国社会経済史
ベトナム史
東南アジア経済史、海域アジア史
セルジューク朝時代イランの研究
古代の日本・大陸交流史
13・4世紀モンゴル政権中枢・中核の研究
東アジア国際関係、国際援助論、中国外交
近代日中関係史、コディコロジー
中国近現代文学
近代中国社会経済史
中央アジア史
東アジア社会人類学
高麗・朝鮮時代の商業
近世・近代移行期日本政治史
大清帝国史
近現代エジプト政治史
オスマン帝国史、比較史・比較文化
イラン近現代史
徽州民間祭祀の研究

研究員名	研究課題
鈴木 立子	元朝社会経済史
砂山 幸雄	現代中国思想・文化・政治体制
妹尾 達彦	中国古代・中世都市史
関 智英	中国人対日協力者の戦後一大陸残存者把握にむけての基礎的研究
関尾 史郎	敦煌・トルファン文書研究
曾田 三郎	中国近代政治・社会史
高久 健二	東アジア、楽浪期を中心とした中国・朝鮮半島の研究
高田 時雄	中国語史の研究
高田 幸男	長江下流域の地域社会・エリート・教育団体、近代東アジア教育文化交流史
高遠 拓児	清代における刑罰制度の研究
高橋 公明	東アジア海域史、東アジア国際関係史
高橋 英海	西洋古典学
高松 洋一	オスマン朝史、古文書学、アーカイブズ学
高村 武幸	中国秦漢社会史・行政制度史
高山 博	中世地中海における異文化交流
瀧下 彩子	近現代中国社会文化史
武内 紹人	古代チベット語の歴史言語学的研究
武内 房司	中国近代宗教社会史、近代中国・ベトナム関係史
竹越 孝	中国語文法史
武田 幸男	朝鮮古代・近世史
田島 俊雄	東アジアの経済発展
多田 狷介	漢魏晋史
多々良圭介	18世紀清代中国における名医の社会的条件—藤井文庫を中心に
立川 武蔵	チベット密教教理の研究
田中 明彦	現代東アジア国際政治の研究
田中 一成	中国演劇史
田中 時彦	日本の政治的近代化の研究
田中 仁	中国政治史、20世紀中国政治
田中比呂志	近現代中国の社会統合の研究
C. A. ダニエルス	清代西南中国の歴史

研究員名	研究課題
地田 徹朗	ソ連史、中央アジア地域研究
R.チャード	東アジア文化史
P.ツイーメ	古ウイグル文献学
塚原 東吾	科学史・科学哲学、STS
辻本 裕成	中古・中世日本文学の研究
土田 哲夫	中国近現代史、国際関係史
坪井 祐司	マレーシア近代史
鶴間 和幸	秦漢史
鶴見 尚弘	明・清時代社会経済史
寺田 浩明	中国明清法制史
唐 成	現代中国金融の研究
唐 亮	現代中国政治史の研究
徳永 洋介	中国近世史
戸倉 英美	中国古典文学資料研究
土肥 祐子	宋代海外貿易史
富澤 芳亜	中国近代経済史
鳥海 靖	日本近現代史
中兼和津次	現代中国経済・移行経済の研究
永田 雄三	オスマン帝国史
中谷 英明	インド仏教学
中塚 亮	中国古典長編小説、古典演劇
長縄 宣博	ロシア・ムスリムの近現代史
中見 立夫	清代モンゴル史・清代文書の史料的研究
中村 威也	中国古代地域社会／非漢族研究、中国史科学、コディコロ ジー
中村 元哉	中国近現代政治史・思想史
新村 容子	近代中国におけるアヘン問題
西 英昭	中国・台湾の近現代法制史
西尾 寛治	マレーシア・インドネシア近世史
野田 仁	中央アジア史研究
延廣 眞治	江戸・明治の文芸
萩田 博	ウルドゥー語学・文学の研究
馬場 英子	中国の説唱文学（語り物）

研究員名	研究課題
濱下 武志	中国近現代史
濱島 敦俊	中国近世社会経済史
濱本 真実	ロシア・ムスリム史
林 佳世子	オスマン朝期中東社会史
林 俊雄	中央ユーラシア史・草原考古学の研究
原 實	インド古代文学の研究
原山 隆広	アッバース朝末期政治史
平川 幸子	東アジア国際関係史、中国・台湾外交史
平勢 隆郎	中国考古資料研究
平野健一郎	近代東アジア国際関係論
平野 聡	中国党支配（国民党・共産党）の史的研究
弘末 雅士	インドネシア宗教社会史
廣瀬 紳一	漢字文化圏電子情報学の研究
深沢 眞二	連歌・俳諧の研究
藤井 昇三	近代中国政治外交史、日中関係史
藤井 省三	中国近現代文学
藤田 忠	中国古代政治・社会史
藤本 幸夫	朝鮮本研究
古田 和子	東アジア経済史
古屋 昭弘	中国語史
弁納 オー	近現代中国農村経済史
寶劔 久俊	現代中国の農村社会経済変動の研究
星 泉	チベット言語学
細谷 良夫	清朝政治史
堀井 聡江	イスラーム法・法制史
堀内 賢志	北東アジアの国際関係、ロシア政治
堀川 徹	中央アジア文書研究
本庄比佐子	近現代日中関係史
牧野 元紀	ベトナムのキリスト教
松井 太	中央アジア出土ウイグル語・モンゴル語文献の歴史学的研究
松重 充浩	近現代中国政治・社会史及び東北アジア地域史
松永 泰行	現代イランの政治・宗教及びシーア派研究

研究員名

松丸 道雄
松村 潤
松村 史紀
丸川 知雄
三浦 徹
水野 善文
三田 昌彦
三谷 博
峰 毅
御牧 克己
宮崎 修多
宮崎 展昌

宮脇 淳子
村井 章介
村上 衛
村田雄二郎
毛里 和子
本野 英一
粂山 明
守川 知子
森川 裕二
森平 雅彦
森安 孝夫
矢島 洋一
柳澤 明
柳田 征司
柳谷あゆみ
矢吹 晋
山内 弘一
山内 民博
山口 瑞鳳
山口 元樹

研究課題

殷周金文の研究
東北アジア民族史
国際関係論、東アジア国際政治史、中国政治外交史
中国の産業集積および日中経済関係
イスラム都市社会史
古典サンスクリット文学と中世ヒンディー文学
北インド中世史
明治維新と諸革命の比較研究
中国工業化の歴史
チベット宗義書の研究
近世近代漢詩文の研究
大乘仏教、大乘經典の研究、漢訳およびチベット語訳大蔵
経研究
アジア史
日本中世を中心とする東アジア文化交流史
近代中国社会経済史
中国近代史、中国地域研究
現代中国政治・外交及び東アジア国際関係
清末民初中国の対日英米経済関係
中国古代法制史・辺境論・資料論
イラン・イスラーム史
現代東アジアの経済ネットワーク
朝鮮中世・近世史
中央ユーラシア古代中世史、古代ウイグル文書の研究
中央アジア史
清代外交史・民族関係史
日本語の歴史的研究
中世アラブ政治史、イスラーム地域資料研究
近現代中国経済
李朝史、朝鮮儒教研究
朝鮮後期郷村社会史研究
チベット学、仏教哲学
インドネシア・イスラーム史

研究員名	研究課題
山村 義照	日本近現代史
山本 英史	17～19世紀中国社会構造の研究
山本 真	中国・台湾近現代農村社会史
山本 毅雄	デジタル人文学、デジタル・アーカイブ
湯浅 剛	中央アジア政治史
吉澤誠一郎	中国近代史
吉田建一郎	近現代中国経済史
吉田 伸之	日本近世都市社会史
吉田 光男	朝鮮近世史
吉田 豊	ソグド語及びソグド語文献の研究
吉水 清孝	古代から中世初期にかけてのインド思想史
吉水千鶴子	インド・チベット仏教思想史の研究
吉村慎太郎	イラン近現代史
吉村 武典	中世アラブ・イスラーム史、前近代エジプト社会
六反田 豊	朝鮮中世・近世史
和田 恭幸	日本近世出版文化史および通俗仏書の研究
渡辺 紘良	宋代社会史

(全284名)

2. 資料研究成果発信

アジア基礎資料研究による一次資料の解析と研究の成果は、和文および欧文の紀要・雑誌・叢書・電子ジャーナルとして継続的に刊行を行い、東洋文庫リポジトリ「ERNEST」に登録して順次オンライン公開を進めた。これらの出版物ならびに電子ジャーナルは、日本・アジア・欧米を結ぶアジア研究の国際交流をさらに促進するものとなろう。

A. 定期出版物刊行

1. 『東洋文庫和文紀要』（東洋学報）	第102巻 第1-4号	A 5 判 4 冊（刊行済）
▶ https://toyo-bunko.repo.nii.ac.jp/?action=repository_opensearch&index_id=1346		
2. 『東洋文庫欧文紀要』 (<i>Memoirs of the Research Department of the Toyo Bunko</i>)	No. 78	B 5 判 1 冊（刊行済）
▶ https://toyo-bunko.repo.nii.ac.jp/?action=repository_opensearch&index_id=1352		
3. 『近代中国研究彙報』	第43号	A 5 判 1 冊（刊行済）
▶ https://toyo-bunko.repo.nii.ac.jp/?action=repository_opensearch&index_id=1353		
4. 『東洋文庫書報』	第52号	A 5 判 1 冊（刊行済）
▶ https://toyo-bunko.repo.nii.ac.jp/?action=repository_opensearch&index_id=1354		
5. <i>Modern Asian Studies Review</i> ／新たなアジア研究に向けて	Vol.12	オンラインジャーナル （公開）
▶ https://toyo-bunko.repo.nii.ac.jp/?action=repository_opensearch&index_id=1355		
6. <i>Asian Research Trends New Series</i>	No.15	A 5 判 1 冊（刊行済）
▶ https://toyo-bunko.repo.nii.ac.jp/?action=repository_opensearch&index_id=1356		

B. 論叢等出版 ※詳細は pp.56～58を参照

1. 『戦前日本の華中・華南調査』 (東洋文庫論叢 83)	A 5 判 1 冊（刊行済）
▶ https://toyo-bunko.repo.nii.ac.jp/?action=repository_opensearch&index_id=1358	
2. 『清朝の史跡をめぐって I—清朝全土篇—』	A 4 判 1 冊（刊行済）
▶ https://toyo-bunko.repo.nii.ac.jp/?action=repository_uri&item_id=7446	
3. IOM, RAS & The Toyo Bunko eds., <i>Catalogue of the Old Uyghur Manuscripts and Blockprints in the Serindia Collection of the Institute of Oriental Manuscripts, RAS, Volume 1</i>	A 4 判 1 冊（刊行済）
▶ https://toyo-bunko.repo.nii.ac.jp/?action=repository_opensearch&index_id=1359	

※▶は、東洋文庫リポジトリ「ERNEST」の掲載アドレス。

C. 資料研究成果のオンライン公開

以下の研究部ホームページにおいて、順次資料研究成果のオンライン公開を行った。

▶ <http://www.toyo-bunko.or.jp/research/results.html>

3. 研究情報普及

A. 講演会

(1) 東洋学講座

近年の研究成果を一般に向けて広く普及するため、前期に東南アジア研究班、後期に日本研究班が東洋学講座を実施する予定であったが、新型コロナウイルス感染症拡大防止のため、次年度に延期とした。

(2) 公開講座・公開研究会

東洋文庫の所蔵資料や研究活動・研究成果をテーマとして、国内外の当該分野の著名研究者を招いて公開講座・公開研究会を実施する予定であったが、新型コロナウイルス感染症拡大防止のため、延期または中止とした。

(3) 特別講演会

東洋文庫研究員、研究班の主催によって、主として来日中の著名な外国人研究者を招いて特別講演会を実施する予定であったが、その多くが新型コロナウイルス感染症拡大防止のため、延期または中止となった。

(4) 東洋文庫談話会（東洋文庫研究会）

専門分野の若手研究者による成果報告会として、2020年度は3月開催を検討していたが、新型コロナウイルス感染症拡大防止のため、開催を延期した。

(5) ミュージアムによる公開講座・イベント

東洋学の一般への普及を目的に、企画展に合わせて、以下のミュージアムによる公開講座・イベントを、感染症対策に留意したオンラインの形式で開催した（以下、項目別に開催日順で記載）。

【公開講座（オンライン配信）】

大宇宙展一星と人の歴史（会期：2020年6月24日～9月22日）

2020年9月2日（水）～9月30日（水）（動画配信期間）

「暦に託された古代帝王の秩序観」

東洋文庫研究員

東京大学名誉教授

平勢 隆郎氏

「江戸の天文学—明治近代化へのさきがけ」

大東文化大学東洋研究所兼任研究員

中村

士氏

以上

【イベント（オンライン配信）】

2020年11月21日（土）

「未来につなぐコレクション—日米ふたりのコレクターの哲学を辿って」

国立アジア美術館日本美術学芸員

フランク・フェルテンズ氏

東洋文庫研究員・学芸員

岡崎 礼奈氏

※国立アジア美術館（フリーア美術館、アーサー・M・サックラー・ギャラリー）と共催

以上

(6) 各種研究会・講演会開催

各種研究会・講演会の開催状況は、次頁の表のとおりである。コロナ禍の影響により出張を伴う調査・研究会等が相次いで中止となったが、2020年9月以降、Zoom ミーティング等のオンライン会議システムを導入し、オンライン形式で研究会等を開催した。

年 月	総回数	総人数	対面		併用			オンラインのみ	
			回数	人数	回数	人数		回数	人数
						対面	オンライン		
2020年 4 月	—	—	—	—	—	—	—	—	—
5 月	—	—	—	—	—	—	—	—	—
6 月	6	28	6	28	—	—	—	—	—
7 月	13	57	13	57	—	—	—	—	—
8 月	10	48	10	48	—	—	—	—	—
9 月	15	95	10	50	1	1	2	4	42
10月	13	75	11	55	0	0	0	2	20
11月	17	164	9	64	4	10	50	4	40
12月	17	88	8	55	3	4	13	6	16
2021年 1 月	8	72	6	45	0	0	0	2	27
2 月	9	97	5	38	1	10	2	3	47
3 月	15	96	11	61	1	9	2	3	24
合 計	123	820	89	501	10	34	69	24	216

全体として、2020年度前半は、大学等で講義を持つ研究員が慣れないオンライン授業の準備・対応に忙殺され、研究活動が全般的に滞った感是否めない。しかし、後半にはオンラインで研究会や種々の打ち合わせを行うことが常態となり、研究会等への参加がむしろコロナ禍以前より容易になるなど、マイナスの影響ばかりではなかった。また、国内外での資料調査が困難となったため、資料収集やデータベースの構築に予算・人員を投入した。一例を挙げると、紙質調査のための紙譜（紙の素材資料集）として、『インキュナブラ零葉集：西ヨーロッパ編』・『インキュナブラ零葉集：ドイツ編』・『古今東亜紙譜』・『古今和紙譜』を購入した。また、総合アジア圏域研究班、現代中国研究班、近代中国研究班をはじめ、研究班・研究員の研究活動への活用のため、「中国海関出版物集成1850-1949年データベース」（Chinese Maritime Customs Service Publications 1850-1949）を購入した（東洋文庫内のネットワークに接続したパソコンからのみ利用可能）。

(7) 研究情報の普及

研究情報を普及するため、機関リポジトリ「ERNEST」（<https://toyo-bunko.>

repo.nii.ac.jp/。「1. アジア基礎資料研究」p.46に既出)、TB OPAC システム (<http://tbopac.toyo-bunko.or.jp/>) を管理・運営した。

2020年度 TB OPAC 利用統計

年 月	訪問者数	1 日平均	検索数	1 日平均
2020年 4 月	583	20	16,359	546
5 月	507	17	16,136	521
6 月	547	19	22,375	746
7 月	503	17	24,849	829
8 月	507	17	25,721	858
9 月	501	17	15,232	508
10月	517	17	26,259	876
11月	512	18	20,858	696
12月	523	17	18,486	617
2021年 1 月	550	18	18,037	602
2 月	499	17	19,853	710
3 月	560	19	19,854	641
合 計	6,309	213	244,019	8,150

※30分以内に同一 IP から訪問があった場合は 1 名としてカウントしている。

B. データベース公開

2020年 4 月 1 日～2021年 3 月31日までの期間における、東洋文庫の図書・資料のデータ（日本語・英語）に対するオンライン検索アクセス状況については、II 図書事業のグラフ（p.22）に示す通りである。

C. 研究者の交流および便宜供与のサービス

〈長期受入〉

(1) 外国人研究員の受入

フランソワ・ラショー（フランス国立極東学院東京支部長）

「近世日本の美術史・宗教（蒐集家と文人のネットワーク、黄檗文化等）」

「近世期の東アジアの交流史（日本・中国・ロシア・西欧）」

（2017年3月15日～2022年12月31日）

張 鵬飛（広東省警察大学院文学部写作研究室主任）

「《水経注》金石文献整理、“六朝石刻匯校集注”東魏西魏北周北齊卷」

（2019年11月24日～2020年11月24日）

〔受入担当：窪添 慶文〕

（2）2020年度日本学術振興会特別研究員 PD・RPD の受入

なし

（3）2020年度嘱託研究員の採用

小澤 一郎〔継続〕

研究課題「近現代西アジア軍事社会史」に取り組みつつ、東洋文庫諸活動の継承・発展のため欧文刊行物の編集・校閲に従事した。

中村 威也〔新規〕

研究課題「中国古代地域社会／非漢族研究、中国史科学、コディコロジー」に取り組みつつ、東洋文庫諸活動の継承・発展のため和文刊行物の編集・校閲に従事し、かつその豊富な学術刊行物編集経験を東洋文庫の内外に対して普及させることに努めた。

（4）2020年度奨励研究員の受入

中塚 亮〔継続〕

研究課題「明代小説『封神演義』の研究」に取り組みつつ、東洋文庫諸活動の継承・発展のため図書事業に参画した。

多々良圭介〔継続〕

研究課題「清代文書資料を中心とした諸文献の紙質をめぐる研究」に取り組みつつ、東洋文庫諸活動の継承・発展のため研究事業、とくに紙質調査

に参画した。

※いずれも2020年度斯波研究奨励金を受給して研究活動を行った。

〈外国人研究者への便宜供与〉

各国より東洋文庫を訪問する外国人研究者に対し、調査研究上必要とされる便宜供与を行う予定であったが、新型コロナウイルス感染症拡大の影響により未実施に終わった。

D. 国際交流

フランス国立極東学院および中央研究院の歴史語言研究所・近代史研究所(台湾)、ハーバード・エンチン研究所(アメリカ)、アレキサンドリア図書館(エジプト)、イラン議会図書館、ロンドン大学東洋アフリカ研究学院(SOAS)(イギリス)、ベトナム社会科学院漢喃研究所、マックス・プランク研究所(ドイツ)、国際テュルク・アカデミー(カザフスタン)、吉林師範大学満学研究院(中国)との学術交流を進め、資料・情報の交換と研究者の相互訪問を継続的に実施した。

なかでもハーバード大学アジア研究図書資料館であるハーバード・エンチン研究所とは、2010年10月に交流協定を結び、資料交流・人材交流のみに止まらず、共同研究ならびにそれらを通じた若手人材育成を共同で行う取り組みを開始しており、それらを一層推進した。

世界各地からアジア基礎資料研究に取り組む外国人研究者を招聘して、総合アジア圏域研究国際シンポジウム等を通じた国際学術交流を推進する予定であったが、今年度は新型コロナウイルス感染症拡大の影響により未実施に終わった。

4. 研究員等の研究業績

期間：2020年4月1日～2021年3月31日まで

略号：①…雑誌論文 ②…図書 ③…学会発表

〈 〉…共著・共編・共訳・共同発表者名

會谷 佳光

- ①「梵語千字文」,「十誦律存第四誦卷第廿二」,「阿毘達磨俱舍論存卷第十三・十四」,「悉曇章」,「四分律刪補隨機羯磨存卷上」,「成唯識論」,「緇林寶訓」,「雪竇明覺大師語錄」,「法隆寺阿彌陀院太子画像併舞樂面図」,「梵網經盧舍那仏説菩薩心地戒品」(東洋文庫編『岩崎文庫の名品:叡智と美の輝き』,36~37頁,40~41頁,44~47頁,52~53頁,56~65頁,山川出版社,2021年2月)。
- ②『『大正新脩大藏經』底本・校本データベース』(〈中村覚〉,2020年11月Web公開,[<https://taishozo.github.io/db/>])。
- ②『西蓮社(旧増上寺報恩蔵)蔵嘉興版大藏經目録データベース』(〈中村覚〉,2020年11月Web公開,[<https://taishozo.github.io/u-renja/>])。

相原 佳之

- ①「山野如何提供人們的生存資源?:以『刑科題本』為中心的研究」(杜正貞・佐藤仁史主編『山林・山民与山村:中国東南山区の歴史研究』,47~76頁,杭州:浙江大学出版社,2020年12月)。
- ①「嘉慶四(1799)年八月前半上諭の訳注および考察:清朝嘉慶維新研究序説」(〈豊岡康史・村上正和・柳静我・李侑儒〉,『信州大学人文科学論集』,第8号,67~80頁,信州大学人文学部,2021年3月)。
- ①「中国のメディアの歴史をテーマとした東洋文庫での学外研修の教育的効果について」(〈中村威也・小川快之〉,『国士館人文学』,第11号(通巻53号),23~46頁,国士館大学文学部人文学会,2021年3月)。

青木 敦

- ①「慶元文書令訳註稿」(『青山学院大学文学部紀要』,第62号,47~70頁,青山学院大学文学部,2021年3月,[<https://doi.org/10.34321/21764>])。

青山 治世

- ①「王朝期の中国統治」,「中華世界と冊封・朝貢」(川島真・小嶋華津子編著『よくわかる現代中国政治』,10~13頁,ミネルヴァ書房,2020年4月)。
- ①「(動向)歴史学」(〈山本真〉,中国研究所編『中国年鑑2020』,224~226頁,明石書店,2020年5月)。
- ①「『釣魚嶼』が描かれた「琉球図」とその系統:明代史料『広輿図』を手がかりに(上)」(『中国研究月報』,第74巻7号(869号),14~26頁,中国

研究所, 2020年7月).

①「『釣魚嶼』が描かれた『琉球図』とその系統：明代史料『広輿図』を手がかりに（下）」（『中国研究月報』, 第74巻8号（870号）, 1～14頁, 中国研究所, 2020年8月）.

①「総合部会例会「スポーツの歴史学：現在と未来」参加記」（『歴史学研究月報』, No. 731, 1～2頁, 歴史学研究会, 2020年11月）.

秋葉 淳

①「女子教育と女性教師の伝統：オスマン帝国の場合」（長沢栄治監修, 服部美奈・小林寧子編著『教育とエンパワーメント（イスラーム・ジェンダー・スタディーズ3）』, 31～34頁, 明石書店, 2020年12月）.

③「マフムト2世期人口調査台帳の史料的可能性」（東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所共同利用・共同研究課題「オスマン文書史料の基礎的研究」2019年度第2回研究会, 於：東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所（オンライン開催）, 2020年9月26日, [共催：AA 研共同利用・共同研究課題「オスマン文書史料の基礎的研究」, 科学研究費補助金 基盤研究（B）「イスラーム圏における簿記史料の通時的・共時的研究」, 課題番号：17H02398, 研究代表者：高松洋一]）.

③「オスマン朝史科学の可能性と課題」（東文研セミナー「東文研班研究：オスマン朝史科学的方法的課題（第1回研究会）」, 於：東京大学東洋文化研究所（オンライン開催）, 2021年3月15日）.

浅田 進史

①「東アジアから見る：1917年」（南塚信吾責任編集『国際関係史から世界史へ』, 149～153頁, ミネルヴァ書房, 2020年10月）.

①「戦間期ドイツの中国市場調査：華中・華南を中心に」（久保亨・瀧下彩子編『戦前日本の華中・華南調査（東洋文庫論叢第83）』, 179～203頁, （公財）東洋文庫, 2021年3月）.

②『グローバル経済史にジェンダー視点を接続する』（榎一江・竹田泉）, 日本経済評論社, 2020年, 276頁）.

浅野 秀剛

①「喜多川歌麿筆 納涼二美人図」（『国華』, 第1503号（第126編第6冊）, 29～30頁, 国華編輯委員会, 2021年1月）.

- ①「広重画「近江八景」の初摺と加版」(『浮世絵芸術』, No. 181, 36～39頁, 国際浮世絵学会編集委員会, 2021年1月).

阿部 尚史

- ①書評「長沢栄治著『近代エジプト家族の社会史』」(『史学雑誌』, 第129編第12号, 63～71頁, 史学会, 2020年12月).
- ③「イランにおける旧王家祖廟存続の試み: 18, 19世のシェイフ・サフイー＝アッディーン廟」(2020年度東洋史研究会大会, 於: 京都大学(オンライン開催), 2020年11月1日).

荒川 正晴

- ① “Introduction of Historical Materials: Wives’ Divorce and Daughters’ Inheritance of Property, Seen in Dunhuang Documents”, Masako Kohama and Linda Grove eds., *Gender History in China*, pp. 126–134, Kyoto: Kyoto University Press/Tokyo: Trans Pacific Press, Feb. 2021.
- ③「仏教の伝来とシルクロード: 東アジアにもたらされた仏教とは?」(放送大学島根学習センターだんだんセミナー「シルクロードの歴史と文化」, 於: 放送大学島根学習センター(松江), 2020年6月26日).
- ③「唐帝国における外国商人と通行証: イスラーム史料に伝えられる中国情報を踏まえて」(第84回羽田記念館定例講演会, 於: 京都大学大学院文学研究科附属文化遺産学・人文知連携センター羽田記念館, 2020年11月28日).
- ③「大唐帝国の国家財政とソグド商人」(放送大学島根学習センターだんだんセミナー「シルクロードの歴史と文化」, 於: 放送大学島根学習センター(松江), 2021年2月19日).
- ③「唐代シルクロードの実態: 唐帝国でソグド商人はどのようにキャラヴァン交易をしていたのか?」(放送大学島根学習センターだんだんセミナー「シルクロードの歴史と文化」, 於: 放送大学島根学習センター(松江), 2021年3月25日).

飯島 明子

- ①“Introduction” (特集“Southeast Asian Studies Re-contextualized: Prospects for Southeast Asia, Japan and Beyond”) (『東南アジア: 歴史と文化』, 第49号, 5～10頁, 東南アジア学会, 2020年5月).
- ②『タイ史(世界歴史大系)』(〈小泉順子〉, 山川出版社, 2020年, 536頁).

飯島 武次

- ①「二里头考古与夏王朝的真实存在」(『歴史研究』, 2020年第5期, 20～27頁, 中国歴史研究院, 2020年10月).
- ③「現代に浮かび上がる殷墟の全容」(アストライアの会, 於: としま産業振興プラザ, 2020年7月21日, [協力: 日本セカンドライフ協会]).
- ③「駒沢大学考古学研究室の歴史」(オンライン駒考サロン, オンライン開催, 2021年3月21日).

飯島 渉

- ①「感染症対策における「中国方式」の行方: COVID-19のパンデミックとロックダウン」(『中国研究月報』, 第74巻12号 (874号), 1～10頁, 中国研究所, 2020年12月).
- ①「感染症の歴史学: 世界史のなかのパンデミックとエンデミック」(嘉糠洋陸編『パンデミック時代の感染症研究 (実験医学増刊 Vol. 39 No. 2)』, 151～156頁, 羊土社, 2021年1月).
- ①“Introducing Activities of the Archives of Infectious Diseases History (AIDH) Project: Historical Epidemiology”, 〈Hiroki Inoue, Tomoo Ichikawa〉, *Tropical Medicine and Health*, Volume 49, Article No. 9, pp. 1–10, Nagasaki: Japanese Society of Tropical Medicine, Jan. 2021.
- ②『大国化する中国の歴史と向き合う』(研文出版, 2020年, 210頁).
- ②『「中国史」が亡びるとき: 地域史から医療史へ』(研文出版, 2020年, 203頁).

池田 美佐子

- ①「立憲主義の伝統と試練」(鈴木董・近藤二郎・赤堀雅幸編集代表『中東・オリент文化事典』, 318頁, 丸善出版, 2020年11月).
- ①「ビント・シャーティウ: 近代と伝統のはざままで」(長沢栄治監修, 服部美奈・小林寧子編著『教育とエンパワーメント (イスラーム・ジェンダー・スタディーズ3)』, 74～77頁, 明石書店, 2020年12月).

石川 寛

- ①「後期チャールキヤ朝統治下の中間的支配者集団: 旧ダールワダ県の事例を中心に」(『東洋学研究』, 第58号, 81～96頁, 東洋大学東洋学研究所, 2021年3月).

- ③「シンポジウム 南アジア前近代史の長期的展開をめぐって：前4千年紀後半から後2千年紀半ば」コメンテーター（日本南アジア学会第33回全国大会，於：京都大学（オンライン開催），2020年10月3日）。

磯貝 健一

- ③「遺産分割文書と相続分の算定：ロシア帝国トルキスタンとヴォルガ・ウラル地域の比較から」（『磯貝真澄』，第19回中央アジア古文書研究セミナー，於：京都大学大学院文学研究科附属文化遺産学・人文知連携センター羽田記念館（オンライン開催），2021年3月13日）。

今西 祐一郎

- ①「『御迦陵頻伽の声』続紹」（『汲古』，第77号，1～4頁，古典研究会，2020年6月）。
- ②『源氏物語（八）早蕨－浮舟（岩波文庫黄15-17）』（〈柳井滋，他4名〉，岩波書店，2020年，686頁）。

上野 英二

- ①「源氏物語と長恨歌 其十一」（『成城国文学論集』，第43輯，179～189頁，成城大学大学院文学研究科，2021年3月）。
- ①「仮名成立の意義 覚書：言葉の獲得」（『成城国文学』，第37号，104～132頁，成城国文学会，2021年3月）。

梅村 坦

- ②*Catalogue of the Old Uyghur Manuscripts and Blockprints in the Serindia Collection of the Institute of Oriental Manuscripts, RAS, Volume 1*, 〈Olga Lundysheva, Anna Turanskaya, Peter Zieme, Kristina Korosteleva〉, The Toyo Bunko, 2021, 40+386p.
- ③「オアシスとシルクロード：朝貢貿易の構造」（かわさき市民アカデミー「中央ユーラシアの歴史（第1部）」第4回，於：川崎市生涯学習プラザ，2020年10月30日）。
- ③「オアシス農村社会の実像：古文書の分析から」（かわさき市民アカデミー「中央ユーラシアの歴史（第1部）」第5回，於：川崎市生涯学習プラザ，2020年11月6日）。

宇山 智彦

- ①「インタビューで知る研究最前線 第2回：比較政治学における中央アジア研究の成果・可能性・課題」（『アジア経済』，第61巻第3号，62～67頁，アジア経済研究所，2020年9月）。
- ①「ペレストロイカ期中央アジアにおける共和国の自立と民族問題の関係：「政治の場」の浮上と遠心化・多様化」（『国際政治』，201号，98～113頁，日本国際政治学会，2020年9月）。
- ①「人民の要求か，裏切られた革命か：クルグズスタン（キルギス）の2020年政変」（『スラブ・ユーラシア研究センターニュース』，161号，11～16頁，北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター，2020年11月）。
- ①“Теория заговора мешает пониманию сути вопроса: по поводу статьи Владимира Шварца «Высочайшее повеление от 25 июня 1916 года - документ двойного назначения»”, *Изучение 1916 года: деполитизация и гуманизация знаний о восстании в Центральной Азии*. Под ред. Александра Моррисона и Гульнары Айтпаевой, pp. 397–408, Бишкек: Maxprint, 2020.
- ①「ロシアと中国の地域主義から再考する勢力圏・影響圏：国力・関与・共感」（「ユーラシアダイナミズムと日本外交」分科会2020年度報告書，1～8頁，日本国際フォーラム，2021年3月，[<https://www.jfir.or.jp/wp/wp-content/uploads/2021/03/4f988fdb73eb272f4e72b4b8623165ad.pdf>]）。

江川 ひかり

- ①「災害と対策」，「ムフスィン・エルトゥールル：現代トルコ演劇の定立者」，「ユルマズ・ギュネイ：現代トルコの伝説的映画人」（鈴木董・近藤二郎・赤堀雅幸（編集代表）『中東・オリエント文化事典』，212～213頁，440～441頁，442～443頁，丸善出版，2020年11月）。
- ①史料紹介「オスマン近代演劇ポスターを読み解く（第2回）：ムフスィン・エルトゥールルのブルサ公演（1913年6月）」（『明大アジア史論集』，第25号，55～74頁，明治大学東洋史談話会，2021年3月）。
- ③「オスマン帝国における遊牧民の定住化過程：ヤージュ・ベディル遊牧民グループの事例を中心に」（歴史学会第45回大会シンポジウム「人の移動における自由と不自由のあいだ」，オンライン開催，2020年12月20日）。

江南 和幸

- ③「高精細デジタル顕微鏡による科学分析が明かす浮世絵用紙の姿」（〈岡

田至弘・日比谷孟俊・佐藤悟・横井孝・澤山茂・徐小潔〉、日本文化財科学会第37回大会、於：別府大学（オンライン開催）、2020年9月5日～9月13日、[『日本文化財科学会第37回大会：研究発表要旨集』、28～29頁、日本文化財科学会、2020年9月]）。

③「新コディコロジーの提唱：自然科学，工学，文学の融合」（シンポジウム「紙のレンズから見た古典籍：高精細デジタルマイクロスコプの世界」，於：実践女子大学文芸資料研究所（オンライン開催），2021年3月13日，[主催：絵入本学会・実践女子大学文芸資料研究所「源氏物語研究の学際的・国際的拠点形成」文部科学省平成30年度私立大学研究ブランディング事業，共催：（公財）東洋文庫，人間文化研究機構国文学研究資料館，協力：印刷博物館]）。

③「穀物デンプン添加による紙の改質：4世紀中央アジア文書から江戸期刊本用紙にみる」（シンポジウム「紙のレンズから見た古典籍：高精細デジタルマイクロスコプの世界」，於：実践女子大学文芸資料研究所（オンライン開催），2021年3月14日[主催：絵入本学会・実践女子大学文芸資料研究所「源氏物語研究の学際的・国際的拠点形成」文部科学省平成30年度私立大学研究ブランディング事業，共催：（公財）東洋文庫，人間文化研究機構国文学研究資料館，協力：印刷博物館]）。

大川 謙作

①“Latent Modernisation in Traditional Tibet: An Essay on the Evolution of Land Lease Systems in Tibetan Rural Society”, *Revue d'Etudes Tibétaines*, Number 57, pp. 66–83, Paris: CRCAO, Jan. 2021.

①（翻訳）ペマ・ツェテン著「金の耳ひとつ」（『チベット文学と映画制作の現在 SERNYA（セルニャ）』，vol. 7, 16～32頁，東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所，2021年2月）。

①「バイリンガル作家ペマ・ツェテン」（『チベット文学と映画制作の現在 SERNYA（セルニャ）』，vol. 7, 116～117頁，東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所，2021年2月）。

①「現代チベット社会の形成と展開」（岩尾一史・池田巧編『チベットの歴史と社会（上）：歴史編・宗教篇』，151～175頁，臨川書店，2021年3月）。

②（翻訳・解説）ペマ・ツェテン著『風船：ペマ・ツェテン作品集』（春陽堂書店，2020年，256頁）。

大川 裕子

- ①「『浦御農咨』試釈」(〈大澤正昭・村上陽子〉,『上智史学』,第65号,63～101頁,上智大学史学会,2020年11月).
- ①「長江下流低湿地における水生植物利用の変遷史」(『東洋史研究』,第79巻第4号,557～586頁,東洋史研究会,2021年3月).

大里 浩秋

- ①「内山完造と日中友好運動」(『日本と中国』,2020年7～12月号,日本中国友好協会,2020年7～12月).
- ①「内山完造の雑記を読む」(『人文学研究所報』,No. 64,101～128頁,神奈川大学人文学研究所,2020年9月).
- ①「内山完造雑記1944年8月18日から46年10月5日」(〈内山籬・菊池敏夫〉,『人文学研究所報』,No. 65,18～109頁,神奈川大学人文学研究所,2021年3月).
- ①「敗戦直後,思索を重ねた完造さん」(『人文学研究所報』,No. 65,111～113頁,神奈川大学人文学研究所,2021年3月).
- ③「中国人日本留学の歴史に思うこと:東京帝国大学中国人留学関係文書を読む」(EAA 国際シンポジウム「一高中国人留学生と101号館の歴史」,於:東京大学東アジア芸文書院(オンライン開催),2021年3月17日).

大澤 顯浩

- ③コーディネーター(アーカイブズプロジェクト「学習院大学所蔵漢籍の調査」セッションミニシンポジウム「『一統志』研究の現在」,於:学習院大学東洋文化研究所(オンライン開催),2021年3月2日).

大澤 正昭

- ①「『浦御農咨』試釈」(〈村上陽子・大川裕子〉,『上智史学』,第65号,63～101頁,上智大学史学会,2020年11月).
- ①“Livelihood and Gender in the Tang and Song Dynasties”, Masako Kohama and Linda Grove eds., *Gender History in China*, pp. 153–172, Kyoto: Kyoto University Press/Tokyo: Trans Pacific Press, Feb. 2021.
- ①「『浦御農咨』から考える」(『上智史学』,第65号,103～141頁,上智大学史学会,2020年11月).
- ①(張文昌訳)「唐宋時代の職業与性別」(小浜正子・下倉渉・佐々木愛・

高嶋航・江上幸子編『被埋没の足跡：中国性別史研究入門』，161～198頁，国立台湾大学出版中心，2020年12月）。

①「太湖デルタ地域の「農業危機」：宋～清代の農書を題材に」（『唐宋变革研究通説』，第12輯，23～47頁，唐宋变革研究会，2021年3月）。

太田 幸男

①「元号制を考える」（『歴史学研究』，No. 996（2020年5月号），36～42頁，歴史学研究会，2020年5月）。

岡崎 礼奈

①「視覚化された幕末の日露交流：東洋文庫所蔵『プチャーチン来航図』が伝えること」（東洋文庫・生田美智子監修，牧野元紀編『ロマンフ王朝時代の日露交流』，222～259頁，勉誠出版，2020年8月）。

①「絵本綴染」，「書物袋絵外題集」，「酒吞童子」，「名所江戸百景」ほか（東洋文庫編『岩崎文庫の名品：叡智と美の輝き』，154～159頁，162～163頁，174～189頁，192～195頁，山川出版社，2021年2月）。

②『大宇宙展：星と人の歴史（時空をこえる本の旅25）』（（公財）東洋文庫，2020年，32頁，[項目執筆：「天文学の誕生」，「中世イスラム世界とヨーロッパの天文学：壮大な知識の交流」，「日本の天文学史：古代，中世」，「天文学と地図製作」，1～7，10，11，20]）。

②『大清帝国展 完全版（時空をこえる本の旅27）』（（公財）東洋文庫，2021年，32頁，[項目執筆：「清朝をめぐる国際関係の変化」，「義和団事件とG.E. モリソン」，「外国人が見た清」，1，6，7，11，12，14，16，18～20，24，26]）。

③「書物愛から文化・学術貢献へ：岩崎久彌のコレクションと東洋文庫」（『未来につなぐコレクション：日米ふたりのコレクターの哲学を辿って』，オンライン開催，2020年11月21日，[共催：国立アジア美術館・東洋文庫]）。

岡野 誠

①「唐代律令中の「格」字の意義：獄官令第22条の分析を中心として」（『法律論叢』，第93巻1号，65～118頁，明治大学法律研究所，2020年7月）。

①資料紹介「諸学連環の興：奥村郁三著『日本史上の中国』（『東洋法制史研究会通信』，第34号，12～16頁，東洋法制史研究会，2020年8月）。

①「新介紹の吐魯番・敦煌『唐律』『律疏』残片：以旅順博物館以及中国国

家図書館所蔵資料を中心」(〈趙晶・劉思皓・中国政法大学法律古籍研究所〉, 楊一凡・陳靈海主編『重述中国法律史 第一輯』, 311~345頁, 中国政法大学出版会, 2020年9月).

①「敦煌本唐職制律断簡再論: 趙晶著「中国国家図書館蔵兩件敦煌法典殘片考略」を讀みて」(『法史学研究会会報』, 第24号, 114~125頁, 法史学研究会, 2021年3月).

①書評「小島浩之著『唐六典』の編纂に関する一試論: 『初学記』と『唐六典』の注」(『法制史研究』, 70号, 386~388頁, 法制史学会, 2021年3月).

岡本 隆司

①「中国 (1): 史学から俯瞰する」(近藤孝弘編『歴史教育の比較史』, 11~69頁, 名古屋大学出版会, 2020年12月).

①「世界のなかの日本: 一三世紀~現代」(上島享・吉田一彦編『世界のなかの日本宗教 (日本宗教史2)』, 64~89頁, 吉川弘文館, 2021年3月).

①書評「岩井茂樹『朝貢・海禁・互市: 近世東アジアの貿易と秩序』」(『歴史学研究』, No. 1006 (2021年3月号), 58~61頁, 歴史学研究会, 2021年3月).

②『「中国」の形成: 現代への展望 (シリーズ 中国の歴史5, 岩波新書新赤版1808)』(岩波書店, 2020年, 238頁).

②『教養としての「中国史」の読み方』(PHP 研究所, 2020年, 355頁).

小川 快之

①「裁判記録の専門用語をしらべる」(漢字文献情報処理研究会編『デジタル時代の中国学リファレンスマニュアル』, 378~382頁, 好文出版, 2021年3月).

①「オンライン授業で考える中国と日本の王権と音楽」(〈中村威也・仁藤智子〉, 『国史館史学』, 第25号, 61~104頁, 国史館大学日本史学会, 2021年3月).

①「中国のメディアの歴史をテーマとした東洋文庫での学外研修の教育的効果について」(〈中村威也・相原佳之〉, 『国史館人文学』, 第11号 (通巻53号), 23~46頁, 国史館大学文学部人文学会, 2021年3月).

奥村 哲

- ②『文化大革命への道：毛沢東主義と東アジアの冷戦』（有志舎，2020年，275頁）。

尾崎 文昭

- ①「木山英雄『野草』論を読む（中）」（『颯風』，第59・60合併号，24～57頁，颯風の会，2020年11月）。
- ①「卞之琳の詩を読んでみる（続）」（『九葉読詩会』，第6号，159～172頁，九葉読詩会，2021年3月）。

小澤 一郎

- ③「19・20世紀転換期のアフガン人による武器交易の再検討」（日本オリエント学会第62回大会，於：名古屋大学（オンライン開催），2020年12月6日）。

小田 壽典

- ①「〔座談会〕先学を語る：山田信夫先生」（〈森川哲雄・堀直・森安孝夫・松田孝一・萩原守〉，『東方学』，第140輯，92～134頁，東方学会，2020年7月）。

小沼 孝博

- ①「堀直先生を偲んで」（『内陸アジア言語の研究』，35，113～122頁，中央ユーラシア学研究会，2020年10月）。
- ①新刊紹介「細谷良夫著『清朝の史跡をめぐるⅠ：清朝全土編』」（『アジア流域文化研究』，XII，106頁，東北学院大学アジア流域文化研究所，2021年3月）。
- ③「天山を越えて：ムザルト峠とその役割」（東北大学東北アジア研究センター共同研究「ユーラシア遊牧民の地図史」，於：東北大学東北アジア研究センター（オンライン開催），2021年2月20日）。

小野寺 史郎

- ①「〔第Ⅰ部〕へのコメント：人的交流に即して」（『東アジア近代史』，第24号，28～33頁，東アジア近代史学会，2020年6月）。
- ①「五・四運動から見た「二・八」と「三・一」：中国史研究の視点から」

(在日韓人歴史資料館編, 李成市監修『東アジアのなかの二・八独立宣言：若者たちの出会いと夢』, 131～147頁, 明石書店, 2020年7月)。

②(翻訳) 田雁著『近代中国の日本書翻訳出版史』(〈(翻訳) 古谷創, (解説) 中村元哉〉, 東京大学出版会, 2020年, 464頁)。

糟谷 憲一

②『朝鮮半島を日本が領土とした時代』(新日本出版社, 2020年, 232頁)。

片桐 一男

②『洋学史研究別冊 対外関係と医学・医療』(洋学史研究会, 2020年, 301頁)。

片山 章雄

①「世界に拡散した第二次・第三次大谷探検隊員橘瑞超の活動・収集品情報」(小口雅史編『古代東アジア史料論(古代史選書34)』, 364～382頁, 同成社, 2020年6月)。

①「西域を読み解く：プロローグ 大谷探検隊と大谷文書」(『K』, 0号, 42～47頁, 特定非営利活動法人 Knit-K, 2020年9月)。

①「西域を読み解く：第2回 大谷光瑞の渡欧・滞欧と西域熱」(『K』, 1号, 58～64頁, 特定非営利活動法人 Knit-K, 2021年3月)。

①史料紹介「大谷探検隊員と関係者の絵葉書数十点」(『東海史学』, 第55号, 43～48頁, 東海大学史学会, 2021年3月)。

片山 剛

①「1920年代末の南京に関する英国陸軍製地図とアメリカ海軍撮影空中写真」(〈小林茂・山本一〉, 『近代東アジア土地調査事業研究ニューズレター』, 第10号, 1～16頁, 大阪大学文学研究科片山剛研究室, 2021年3月)。

①「陸軍参謀本部は「南京攻略」作戦をいつから構想していたか：下令された作戦命令と配布された兵要地誌」(『近代東アジア土地調査事業研究ニューズレター』, 第10号, 47～124頁, 大阪大学文学研究科片山剛研究室, 2021年3月)。

①「「南清地方」をカバーする「清国二十万分一図」について：アジア歴史資料センターの小山史料所収図の検討から」(〈小林茂〉, 『外邦図研究ニューズレター』, No. 12, 93～99頁, 外邦図研究グループ, 2021年3月)。

加藤 恵美

- ①「東北朝鮮学校の歴史と現在：東日本大震災を越えて」（『帝京大学外国語外国文化』，第12号，121～148頁，帝京大学外国語学部外国語学科，2021年3月）。
- ②“Citizens’ Movement for Postwar Compensation to and the Rights of Koreans Residing in Japan”，International Workshop “The Development of Reconciliation Studies in East Asia”，Waseda University (online)，4 Mar. 2021，[hosted by the KAKENHI Project “Creation of the Study of Reconciliation” and the Center for International Reconciliation Studies in Waseda University，under the support from the International Association for Reconciliation Studies (IARS)，科学研究費補助金 新学術領域研究（研究領域提案型）「和解学の創成：正義ある和解を求めて」，課題番号：1902，研究代表者：浅野豊美]。

金沢 陽

- ③「唐宋時期在日本西南諸島水域発現的貿易商品和貿易区」（黒石号沈船出水珍品展「唐宋時期的海上絲綢之路」国際学術研討会，於：上海博物館（オンライン開催），2020年11月20日）。

金丸 裕一

- ①新刊紹介「松谷曄介著『日本の中国占領統治と宗教政策：日中キリスト者の協力と抵抗』」（『キリスト教史学』，第74集，290～292頁，キリスト教史学会，2020年7月）。
- ②「丸山傳太郎の中国伝道をめぐって：清末・民国初期」（『明治学院大学キリスト教研究所紀要』，第53号，71～121頁，明治学院大学キリスト教研究所，2021年3月）。
- ③「黒田四郎「南京回想」の探究：戦時日中キリスト教関係史をめぐる実証研究」（第71回キリスト教史学大会，於：山梨英和大学（オンライン開催），2020年9月19日）。

川合 安

- ①「南朝の州大中正」（『集刊東洋学』，第123号，84～101頁，中国文史哲研究会，2020年6月）。

川島 真

- ②『20世紀の東アジア史：I 国際関係史概論』（〈田中明彦〉，東京大学出版会，2020年，292頁）。
- ②『20世紀の東アジア史：II 各国史 1 東北アジア』（〈田中明彦〉，東京大学出版会，2020年，315頁）。
- ②『アフターコロナ時代の米中関係と世界秩序』（〈森聡〉，東京大学出版会，2020年，264頁）。
- ②『20世紀の東アジア史：II 各国史 2 東南アジア』（〈田中明彦〉，東京大学出版会，2020年，389頁）。
- ③「特別公開された外交記録から見る天安門事件と日中関係」（日本現代中国学会関東部会2021年度第1回定例研究会「日本外交記録にみる天安門事件と日中関係」，オンライン開催，2021年3月21日）。

神田 豊隆

- ①書評「宮川徹志『佐藤栄作 最後の密使』吉田書店」（『図書新聞』，3480号，武久出版，2021年1月）。
- ③“The Murayama Statement as Socialist Policy?: The Japan Socialist Party and Postwar Reconciliation”, International Workshop “The Development of Reconciliation Studies in East Asia”, Waseda University (online), 5 Mar. 2021, [hosted by the KAKENHI Project “Creation of the Study of Reconciliation” and the Center for International Reconciliation Studies in Waseda University, under the support from the International Association for Reconciliation Studies (IARS), 科学研究費補助金 新学術領域研究（研究領域提案型）「和解学の創成：正義ある和解を求めて」，課題番号：1902，研究代表者：浅野豊美]。

貴志 俊彦

- ②『視覚台湾：日本朝日新聞社報道影像選輯』（〈鍾淑敏〉，中央研究院台湾史研究所（台北），2020年，443頁）。
- ②『アジア太平洋戦争と収容所：重慶政権下の被収容者の証言と国際救済機関の記録から（アジア環太平洋研究叢書4）』（国際書院，2021年，261頁）。
- ③「華北交通写真展からみる日中間の歴史意識の位相」（Internationaler Workshop: Fotoarchiv der Nordchinesischen Verkehrs-AG und Konzeption einer Wanderausstellung in Deutschland, Institut für Orient- und Asienwissenschaften,

Universität Bonn (online), 18 Jan. 2021).

③「朝日新聞社与台湾：戦前・戦時的「報道照片」和資訊網絡」（中央研究院台湾史研究所2021新書発表会，於：中央研究院台湾史研究所（台北），2021年3月16日）。

岸本 美緒

①書評「岩井茂樹著『朝貢・海禁・互市：近世東アジアの貿易と秩序』」（『史学雑誌』，第129編第8号，51～59頁，史学会，2020年8月）。

①「「他者」から読むナショナル・ヒストリー」（『思想』，no. 1163（2021年3月号），3～11頁，岩波書店，2021年3月）。

②『礼教・契約・生存：明清史論集3（研文選書131）』（研文出版，2020年，440頁）。

②『明末清初中国と東アジア近世』（岩波書店，2021年，370頁）。

北川 香子

①「ポーサット（カンボジア）をめぐる歴史地理的環境」（『学習院女子大学紀要』，第23号，41～58頁，学習院女子大学，2021年3月）。

③「カンボジアと江戸時代日本の友好の書簡」（令和2年度学習院女子大学学会講演会，於：学習院女子大学，2020年11月5日）。

橘堂 晃一

①“The Story of Shunzi in Old Uyghur”, 〈Imre Galambos〉, *Acta Orientalia Academiae Scientiarum Hungaricae*, Volume 73, Issue 3, pp. 451–466, Budapest: Akadémiai Kiadó, Oct. 2020.

金 鳳珍

①「東アジアの『儒教的近代』と日本の『兵学的近代』」（『自然と実学』，第5号，30～48頁，日本東アジア実学研究会，2020年4月）。

①「安重根と日本，日本人」（笹川紀勝・李泰鎮・邊英浩編著『国際共同研究三・一独立万歳運動と植民地支配体制：国民意識の誕生』，487～542頁，明石書店，2020年12月）。

工藤 裕子

③「インドネシアの客家系華人：梁家7代の軌跡より」（神戸華僑華人研究

会第188回研究例会，オンライン開催，2021年2月6日，[共催：科学研究費補助金 基盤研究（B）「戦後冷戦初期日本の華僑社会に関する実証的研究：東アジア秩序の再構築」，課題番号：18H00703，研究代表者：陳來幸]）。

久保 亨

- ①「現代中国にとっての朝鮮戦争」（『年報日本現代史』，第25号，41～61頁，「年報日本現代史」編集委員会，2020年12月）。
- ①「長江産業貿易開発協会の刊行資料目録」（『近代中国研究彙報』，第43号，1～11頁，（公財）東洋文庫，2021年3月）。
- ②『現代中国の原型の出現：国民党統治下の民衆統合と財政経済』（汲古書院，2020年，426頁）。
- ②『20世紀中国経済史論』（汲古書院，2020年，604頁）。
- ②『戦前日本の華中・華南調査（東洋文庫論叢第83）』（〈瀧下彩子〉，（公財）東洋文庫，2021年，406頁，[執筆担当：「戦前日本の華中・華南調査をめぐって」，「台湾銀行の華南調査」，3～33頁，63～95頁]）。

窪添 慶文

- ①「北朝墓誌について」（『中国：社会と文化』，第35号，169～179頁，中国社会文化学会，2020年7月）。
- ①「北魏末・東魏の汎階と官僚の遷転：穆良墓誌の検討を中心に」（『立正大学文学部研究紀要』，第37号，69～91頁，立正大学文学部，2021年3月）。
- ②『北魏史：洛陽遷都の前と後（東方選書54）』（東方書店，2020年，312頁）。

久保田 淳

- ②『「うたのことば」に耳をすます』（慶應義塾大学出版会，2020年，448頁）。

栗山 保之

- ①「ルーズナーマの史料的价值の分析：アラブの航海活動研究の予備的考察」（『東洋研究』，第217号，69～100頁，大東文化大学東洋研究所，2020年11月）。
- ①「インド洋西海域におけるアラブの船乗りたちとその船上活動：クウェイトのナーフーザが記録したルーズナーマの分析より」（『中央大学アジア

史研究』, 45号, 102～78頁, 白東史学会, 2021年3月)。

③「アラブの船乗りたちの風：15・16世紀のインド洋におけるアラブの航海技術の研究」(中央大学白東史学会令和2年度年次大会, 於：中央大学(オンライン開催), 2020年12月5日)。

L. グローブ

①“Review of Chinese and Indian Merchants in Modern Asia: Networking Businesses and the Formation of a Regional Economy, edited by Chi-cheung Choi, Tomoko Shiroyama, and Takashi Oishi”, *Asian Review of World Histories*, Volume 9, Issue 1, pp. 139–142, Leiden: Brill, Dec. 2020.

①“Women’s Labor in Modern and Contemporary China”, Masako Kohama and Linda Grove eds., *Gender History in China*, pp. 301–316, Kyoto: Kyoto University Press/Tokyo: Trans Pacific Press, Feb. 2021.

②*Gender History in China*, 〈Masako Kohama〉, Kyoto: Kyoto University Press/Tokyo: Trans Pacific Press, 2021, 517p.

黒田 卓

①「『国際文化』がとりもつ奇縁」(『全学教育広報「曙光」』, 50号(2020年秋号), 11～14頁, 東北大学学務審議会, 2020年9月)。

③「メヘディー・コリー・ヘダーヤトにみる西洋と日本：自伝『回想と危難』の記述を中心に」(東北大学国際文化研究科中東表象研究会, 於：東北大学川内キャンパス, 2020年10月28日)。

③「メヘディー・コリー・ハーン・モフベロッサルタネと立憲革命」((公財)東洋文庫現代イスラーム研究班イラングループ研究会, オンライン開催, 2021年2月19日)。

③「イラン知識人のみた近代世界」(東北大学大学院国際文化研究科最終講義, 於：東北大学川内キャンパス(オンライン開催), 2021年3月9日)。

巖 善平

①「中国の雇用政策と社会保障の動向」(『日中経協ジャーナル』, 2020年5月号(通巻316号), 10～12頁, 日中経済協会, 2020年5月)。

①「改革・発展・安定の三位一体論と鳥籠政治：中国は「八九政治風波」から何を学んだか」(『アジア研究』, 66巻3号, 86～102頁, アジア政経学会, 2020年7月)。

- ①「中国における戸籍改革,「農転非」およびその社会経済的効果:中国総合社会調査(CGSS2010-2015)に基づく実証分析」(『中国21』, Vol. 53, 40～70頁, 愛知大学現代中国学会, 2020年9月).
- ②『人口移動・労働力市場及其機制研究』(人民出版社, 2020年, 286頁).
- ②『超大国:中国のあゆみ』(晃洋書房, 2021年, 260頁).

小杉 泰

- ①“‘Ijma’ in Islamic Law and Islamic Thought: Tradition, Contemporary Relevance, and Prospects” (〈IKEHATA Fukiko〉, 『イスラーム世界研究』, 第14号, 5～29頁, 京都大学イスラーム地域研究センター, 2021年3月, [<https://doi.org/10.14989/262489>]).
- ①「責任の体系としてのシャリーア:イスラーム法源学による法規定の定式化と5範疇への収斂の構造」(『イスラーム世界研究』, 第14号, 179～208頁, 京都大学イスラーム地域研究センター, 2021年3月, [<https://doi.org/10.14989/262500>]).
- ③“Resurgent Islamic Jurisprudence and an Alternative Path of Development”, 18th Asia Pacific Conference, Ritsumeikan Asia Pacific University (online), 14 Nov. 2020.
- ③「中東・イスラーム研究におけるDX(デジタルトランスフォーメーション)の次段階へ向けて:法源学データベースの戦略を事例として」(シンポジウム「中東・イスラーム研究の新地平:ウィズコロナ時代のチャレンジ」, オンライン開催, 2021年1月9日).
- ③「サラフとサラフィー主義(サラフィーヤ)の名づけとその系譜」(京都大学イスラーム地域研究センターイスラーム中道派研究班研究会「サラフィー主義とは何か」, オンライン開催, 2021年1月28日, [科学研究費補助金 基盤研究(A)「現代イスラームにおける法源学の復権と政治・経済の新動向:過激派と対峙する主流派」, 課題番号:19H00580, 研究代表者:小杉泰]).

小寺 敦

- ①書評「松井嘉徳著『記憶される西周史』」(『史学雑誌』, 第129編第11号, 67～71頁, 史学会, 2020年11月).
- ①「清華簡『越公其事』訳注」(『東京大学東洋文化研究所紀要』, 第178冊, 262～364頁, 東京大学東洋文化研究所, 2021年2月).

③「關於清華簡『趙簡子』中的晋国君主」（第二屆『群書治要』國際學術研討會「『左伝』学之多元詮釈」，於：国立成功大学中国文学系（台南），2020年9月11日，〔要旨：『第二屆『群書治要』國際學術研討會「『左伝』学之多元詮釈』會議論文集』，267～281頁，国立成功大学〕）。

小長谷 有紀

①「モンゴルで撮影された写真の歴史（1880-1930）：學術調査隊による写真コレクションを中心に」（『国立民族学博物館研究報告』，45巻3号，517～567頁，国立民族学博物館，2021年1月）。

②「モンゴルにおける木材利用：19世紀末から20世紀初頭にかけての写真記録から」（〈鈴木康平〉，『日本とモンゴル』，第55巻（141号），76～101頁，日本モンゴル協会，2021年3月）。

③書評「都馬バイカル編著『スウェーデン宣教師が写した失われたモンゴル』（『日本とモンゴル』，第55巻（141号），217～218頁，日本モンゴル協会，2021年3月）。

小浜 正子

①「ジェンダーとリプロダクションからみる中国の人口史：家父長制家族から一人っ子政策へ」（秋田茂・脇村孝平編『人口と健康の世界史（MINERVA世界史叢書8）』，117～138頁，ミネルヴァ書房，2020年8月）。

②「「はだしの医者」の誕生と消滅：中国農村の母を支えた女性医療者たち」（高田京比子・三成美保・長志珠絵編『「母」を問う：母の比較文化史』，228～256頁，神戸大学出版会，2021年1月）。

③『被埋没の足跡：中国性別史研究入門』（〈下倉渉・佐々木愛・高嶋航・江上幸子〉，国立台湾大学出版中心，2020年，552頁）。

④*Gender History in China*, 〈Linda Grove〉, Kyoto: Kyoto University Press/Tokyo: Trans Pacific Press, 2021, 517p.

⑤「歴史教育に今，求められること：ジェンダー主流化の重要性」（第69回全国社会科教育学会・第37回鳴門社会科教育学会合同全国研究大会シンポジウム「社会科教育の責任：教育に対する広範な要求にどのように向き合うか」，於：鳴門教育大学（オンライン開催），2020年10月25日）。

小松 久男

① “Yeni Kaynaklar Işığında Abdürreşid İbrahim Efendi ve Japonya”, A. Merthan

Dündar ed., *Japonya Seyyahı Abdürreşit İbrahim'in İzinde*, pp. 9–28, İstanbul: Dogu Kütüphanesi, Nov. 2020.

① “Toy ve İslâm: Geçmiş ve Bugün”, A. Merthan Dündar ed., *Prof Dr. Pulat Otkan Anısına Sinoloji, Japonoloji ve Koreanoloji Makaleleri*, pp. 9–20, Ankara: Ankara Üniversitesi, 2021.

小南 一郎

① 「中国の祥瑞文化」(山本堯・実方葉子編『瑞獣伝来 空想動物でめぐる東アジア三千年の旅：泉屋博古館開館60周年記念特別展』, 108～115頁, 泉屋博古館, 2020年9月).

① 「祖霊と穀霊：中国墓葬中の倉庫模型を中心にして(上)」(『泉屋博古館紀要』, 第36巻, 1～26頁, 泉屋博古館, 2020年12月).

佐々木 紳

① 「新オスマン人とパリ・コミュン：ムスリム知識人の西洋経験と思想的展開」(『成蹊大学文学部紀要』, 第56号, 89～104頁, 成蹊大学文学部学会, 2021年3月).

① (翻訳)「アフメト・ミドハト著『ファトマ・アリエ女史,あるいはオスマン人女流作家の誕生』(前編)」(『成蹊人文研究』, 第29号, 41～80頁, 成蹊大学大学院文学研究科, 2021年3月).

③ 「アフメト・ミドハトとファトマ・アリエ：あるいはハイブリッドな評伝の虚実」(第4回「中央ユーラシアのムスリムと家族・規範」研究会, オンライン開催, 2021年2月8日).

佐藤 健太郎

① “Isnād of Ibn Khaldūn: Maghribi Tradition of Knowledge in Mamlūk Cairo”, Maribel Fierro and Mayte Penelas eds., *The Maghrib in the Mashriq: Knowledge, Travel and Identity*, pp. 399–410, Berlin: De Gruyter, Jan. 2021.

佐藤 宏

① “The Redistributive Impact of Pro-rural Policies in the Western Ethnic Minority Regions of China”, 〈Yanzhong Wang〉, Björn A. Gustafsson, Reza Hasmath, and Sai Ding eds., *Ethnicity and Inequality in China*, pp.110–133, London: Routledge, Dec. 2020.

- ① “Rural Public Goods Provision in the Western Ethnic Minority Regions of China”, 〈Keqiang Li〉, Björn A. Gustafsson, Reza Hasmath, and Sai Ding eds., *Ethnicity and Inequality in China*, pp. 134–160, London: Routledge, Dec. 2020.
- ① “Poverty among Han and Ethnic Minorities in Seven Regions of China”, 〈Björn A. Gustafsson, Sai Ding〉, Björn A. Gustafsson, Reza Hasmath, and Sai Ding eds., *Ethnicity and Inequality in China*, pp. 283–315, London: Routledge, Dec. 2020.
- ② *Changing Trends in China’s Inequality: Evidence, Analysis, and Prospects*, 〈Terry Sicular, Shi Li, Ximing Yue〉, New York: Oxford University Press, 2020, 448p.

塩沢 裕仁

- ① 「六朝建康の都市空間」（張学鋒編『“都城圈”与“都城圈社会”研究文集：以六朝建康为中心』, 110～180頁, 南京大学出版社, 2021年1月）.
- ①（監訳）李徳方著「二十年にわたる洛陽の夏・商・周時代の考古学的な成果について」（『法政史論』, 第48号, 11～26頁, 法政大学大学院史学会, 2021年2月）.

塩谷 哲史

- ① 「ニコライ1世期ロシア帝国のアジア外交：外務省アジア局および地方総督の役割を中心に」（*Annual Report of the Murata Science Foundation*, No. 34, 339～345頁, 村田学術振興財団, 2020年6月）.
- ① 「南・中央・西アジアの砂漠 カラクム砂漠」, 「シルクロード」（日本沙漠学会編『沙漠学事典』, 28～29頁, 188～189頁, 丸善出版, 2020年7月）.
- ① 「トルクメンの遠征行」（今村薫編著『遊牧と定住化（中央アジア牧畜社会研究叢書2）』, 79～91頁, 名古屋学院大学現代社会学部今村研究室, 2020年12月）.
- ① 「ヒヴァ・ハン国史研究とフィールドでの史料調査」（『筑波大学地域研究』, 第42号, 45～54頁, 筑波大学人文社会科学部国際地域研究専攻, 2021年3月）.
- ③ 「アラル海流域における水利の在来知とアム川転流計画の影響」（鹿島学術振興財団第43回研究発表会, 於：鹿島学術振興財団, 2020年11月11日）.

篠木 由喜

②『大宇宙展：星と人の歴史（時空をこえる本の旅25）』（（公財）東洋文庫，2020年，32頁，[項目執筆：「中国の天文学史概略：殷～元の歩みをたどる」，「ヨーロッパ科学の受容」，12～18]）。

②『三菱創業150周年記念 岩崎文庫の名品展：東洋の叡智と美（時空をこえる本の旅26）』（（公財）東洋文庫，2020年，32頁，[項目執筆：「古写本と古刊本：中世日本の学問・文化にふれる」，「書物を楽しむための用語説明」，1，4，5，7，13，26，31，32]）。

②『大清帝国展 完全版（時空をこえる本の旅27）』（（公財）東洋文庫，2021年，32頁，[項目執筆：「4つの視点で見る19世紀の清Ⅰ：プロテスタント宣教師の進出」，「4つの視点で見る19世紀の清Ⅱ：太平天国の乱」，「4つの視点で見る19世紀の清Ⅲ：漢人官僚と洋務運動」，「4つの視点で見る19世紀の清Ⅳ：西太后と政体の改革」，「領土の拡大と反乱」，4，8，10，13，15，17，21～23]）。

島田 竜登

①「世界システム論」（金澤周作監修『論点・西洋史学』，126～127頁，ミネルヴァ書房，2020年4月）。

清水 信行

②『渤海の古城と国際交流』（〈鈴木靖民〉，勉誠出版，2021年，496頁，[科学研究費助成事業 研究成果公開促進費（学術図書），課題番号：20HP5106]）。

邵 迎建

①「此情唯能夢中尋：重読『流言』」（『INK 印刻文学生活誌』，205，86～93頁，印刻文学生活誌（新北），2020年9月）。

①「『緑衣』与張愛玲」（『INK 印刻文学生活誌』，207，100～107頁，印刻文学生活誌（新北），2020年11月）。

①（翻訳）佐竹保子著「中国的文学与女性」（小浜正子・下倉渉・佐々木愛・高嶋航・江上幸子編『被埋没の足跡：中国性別史研究入門』，87～104頁，国立台湾大学出版中心，2020年12月）。

城山 智子

①「中華帝国と一帯一路」（東大社研現代中国研究拠点編『現代中国ゼミ

ナール：東大駒場連続講義』，129～144頁，東京大学出版会，2020年5月）。

- ① “Chinese International Banking”, Takeshi Nishimura and Ayumu Sugawara eds., *The Development of International Banking in Asia*, pp. 309–336, Tokyo: Springer, Sep. 2020.

杉本 史子

- ① 「絵図の史学」（『ユリイカ』，2020年6月号（no. 759），121～130頁，青土社，2020年5月）。
- ① “Political Cartography in the Tokugawa Period”, David Ludden ed., *Oxford Research Encyclopedia of Asian History*, Oxford University Press (online), Aug. 2020, [<https://doi.org/10.1093/acrefore/9780190277727.013.106>].
- ③ 「近代の国家領域の模索：海域と「日本」」（世界遺産研究会，オンライン開催，2021年1月22日）。

杉山 清彦

- ① 「人びとの「まとまり」をとらえなおす：歴史の中の国家と地域」（東京大学教養学部歴史学部会編『東大連続講義：歴史学の思考法』，58～76頁，岩波書店，2020年4月）。
- ① 「孝荘文皇后」（上田信編著『俠の歴史 東洋編（下）』，290～305頁，清水書院，2020年11月）。
- ① 「複合国家としての大清帝国：マンジュ（満洲）による集塊とその構造」（『歴史学研究』，No. 1007（2021年増刊号），148～156頁，歴史学研究会，2021年3月）。
- ③ 「日本のユーラシア史研究：内陸アジア・北アジア・満洲」（トヨタ財団イニシアティブプログラム「中国学の再創生：「日本の中国研究」の連携と発信に向けて」公開研究会「日本の中国研究の軌跡と現在」，オンライン開催，2020年9月20日）。
- ③ 「複合国家としての大清帝国：マンジュ（満洲）による集塊とその構造」（2020年度歴史学研究会大会合同部会シンポジウム「「主権国家」再考 Part 3：帝国論の再定位」，オンライン開催，2020年11月29日）。

鈴木 恵美

- ① 「エジプトのリビア介入の諸要因：グローバルな危機の拡大とその影響」（松永泰行編『「境界」に現れる危機（グローバル関係学2）』，41～61頁，

岩波書店, 2021年2月).

①「三つの危機に直面するレバノン」(早稲田大学地域・地域間研究機構編『ワセダアジアレビュー』, No. 23, 4～9頁, 明石書店, 2021年2月).

鈴木 均

①「『ジャスト6.5』と『ウォーデン』の時代性と普遍性」(『ジャスト6.5: 戦いの証』『ウォーデン: 消えた死刑囚』映画パンフレット, 3～6頁, オンリー・ハーツ, 2021年1月).

①「米バイデン政権の発足とイラン情勢および中東情勢」(『中東協力センターニュース』, 2021年2月号(45巻11号), 18～25頁, 中東協力センター, 2021年2月).

③「2020年米国大統領選挙の結果と米国・イラン関係の今後」(関西経済連合会評議員会講演, 於: 関西経済連合会, 2020年11月24日).

③”2020 US Presidential Election and the US-Iran Relations: From Japanese Point of View”, Lecture for IAD (Iranian Association of Diplomacy), Iranian Association of Diplomacy, 1 Dec. 2020.

③「イラン近代史の叙述における時代区分の問題」(日本オリエント学会第62回大会, 於: 名古屋大学(オンライン開催), 2020年12月6日).

鈴木 立子

①「元朝の姦罪法から見る節義」(『中国女性史研究』, 第30号, 1～15頁, 中国女性史研究会, 2021年2月).

砂山 幸雄

①「(動向) 思想」(中国研究所編『中国年鑑2020』, 203～205頁, 明石書店, 2020年5月).

①書評「中村元哉編『憲政から見た現代中国』」(『中国研究月報』, 第74巻11号(873号), 36～39頁, 中国研究所, 2020年11月).

①書評「飯島涉著『「中国史」が亡びるとき』」(『週刊読書人』, 3375号, 4面, 読書人, 2021年1月).

妹尾 達彦

①「長安702年: 武則天と倭国朝貢使」(中尾芳治編『難波宮と古代都城』, 801～812頁, 同成社, 2020年6月).

- ①「長安七五一年：ユーラシアの変貌」（三浦徹編『750年：普遍世界の鼎立（歴史の転換期3）』，182～228頁，山川出版社，2020年8月）。
- ①（段字訳）「唐代後期の長安与伝奇小説：以『李娃伝』的分析为中心」（常建華主編『中国城市社会史名篇精読』，38～75頁，上海教育出版社，2020年8月）。
- ①「ユーラシア東部の現代都市：北京」（都市史学会編『都市史研究』，7，101～110頁，山川出版社，2020年10月）。
- ①「隋唐の王都」（広瀬和雄・山中章・吉川真司編『王宮と王都（講座畿内の古代学第Ⅲ巻）』，394～413頁，雄山閣，2020年11月）。

関 智英

- ①「清藤幸七郎関係文書・写真について」（『中国研究月報』，第74巻6号（868号），26～31頁，中国研究所，2020年6月）。
- ①書評「嵯峨隆『アジア主義全史』」（『週刊読書人』，3357号，5面，読書人，2020年9月）。
- ①書評「羽根次郎『物的中国論』」（『週刊読書人』，3363号，3面，読書人，2020年10月）。
- ②『日中戦争期「対日協力政権」』全10巻（ゆまに書房，2020年（第1～5巻），2021年（第6～10巻），490頁，482頁，379頁，543頁，390頁，664頁，442頁，640頁，348頁，279頁，[監修・解説]）。
- ③「中国第三勢力の対日協力：華北の動きを中心に」（中国現代史研究会（関西）2021年総会・研究集会シンポジウム「「対日協力」をめぐる人物研究」，オンライン開催，2021年3月13日）。

関尾 史郎

- ①展示評「「特別展 三国志」東京展」（『歴史学研究』，No. 995（2020年4月号），61～63頁，歴史学研究会，2020年4月）。
- ①「“高台学”ふたたび」（『東方』，473号，8～12頁，東方書店，2020年8月）。
- ①「“涼州諸国王”と蜀地方」（『東洋学術研究』，通巻185号（第59巻第2号），76～84頁，東洋哲学研究所，2020年12月）。
- ②『河西魏晋・「五胡」墓出土鎮墓瓶銘（鎮墓文）集成』（汲古書院，2020年，154頁）。

高田 時雄

- ①「京都大学所蔵『永楽大典』の流传」(『国際漢学研究通説』, 第21期, 206~218頁, 北京大学国際漢学家研修基地, 2020年6月).
- ①「天理図書館所蔵敦煌写卷補遺」(陳益源主編『漢学と東亜文化: 王三慶教授七秩華誕祝寿論文集』, 41~52頁, 台北: 万卷楼圖書公司, 2020年7月).
- ①「藏訳本『大唐西域記』写本中所見「今地名」注考」(『敦煌学』, 第36期, 347~358頁, 南華大学敦煌学研究中心(嘉義県), 2020年8月).
- ①「再び白堅について」(『敦煌写本研究年報』, 第15号, 137~158頁, 京都大学人文科学研究所中国中世写本研究會, 2021年3月).
- ③「『大唐西域記』音義与『西域記』唐原本之重構」(2020仏教文献与文学国際学術研討會, 於: 国立政治大学(台北), 2020年11月29日).

高田 幸男

- ①「日本の華南教育調査」(久保亨・瀧下彩子編『戦前日本の華中・華南調査(東洋文庫論叢第83)』, 151~178頁, (公財)東洋文庫, 2021年3月).
- ①「王清穆『農隱廬日記』(10)」(〈編注〉王清穆研究会(代表: 高田幸男)), 『近代中国研究彙報』, 第43号, 13~64頁, (公財)東洋文庫, 2021年3月).

高松 洋一

- ①“‘I. Mahmûd Döneminde Ayasofya Kütüphanesi ve Koleksiyonu’”, Hatice Aynur ed., *Gölegelenen Sultan, Unutulan Yıllar: I. Mahmûd ve Dönemi (1730-1754)*, 1. clit, pp. 308-357, İstanbul: Dergâh Yayınları, Mar. 2021.

高山 博

- ①「2019年の歴史学界: 回顧と展望 総説」(『史学雑誌』, 第129編第5号, 1~5頁, 史学会, 2020年5月).
- ①「文明の交流と衝突: 中世, 十字軍から現代を見る」(『Aspen Fellow』, No. 36, 8~11頁, 日本アスペン研究所, 2020年).
- ①「ノルマン朝シチリア王国」(齊藤寛海編『イタリア史2: 中世・近世(世界歴史大系)』, 106~125頁, 山川出版社, 2021年3月).
- ②『衝突と共存の地中海世界: 古代から近世まで』(〈本村凌二〉, 左右社, 2020年, 304頁).

③「中世パレルモとシチリア：異文化の重なりと謎解きの愉しみ」(第44回地中海学会大会，オンライン開催，2020年11月22日)。

瀧下 彩子

①「戦前日本の観光業と華中・華南：華中鉄道の旅客業務を中心に」(久保亨・瀧下彩子編『戦前日本の華中・華南調査(東洋文庫論叢第83)』，271～299頁，(公財)東洋文庫，2021年3月)。

①「学習マンガ制作現場のエスノグラフィー：葛藤を調整する「ドラマトゥルク」の必要性」(〈山中千恵・伊藤遊〉，『マンガ研究』，vol. 27，35～52頁，日本マンガ学会，2021年3月)。

②『戦前日本の華中・華南調査(東洋文庫論叢第83)』(〈久保亨〉，(公財)東洋文庫，2021年，406頁)。

③「学習漫画のドラマトゥルク」(〈山中千恵・イトウユウ〉，2020年日本マンガ学会オンライン研究発表会，オンライン開催，2020年7月5日，[『2020年日本マンガ学会オンライン研究発表会プログラム・発表要旨集』，16頁，2020年6月，https://www.jsscc.net/wp/wp-content/uploads/2020_abstract.pdf])。

竹越 孝

①「『一百条』系漢語鈔本二種の言語」(沈国威・奥村佳代子編『文化交渉と言語接触：内田慶市教授退職記念論文集』，69～90頁，東方書店，2021年2月)。

①「朝鮮における通訳と語学教科書」(金文京編『漢字を使った文化はどう広がっていたのか：東アジアの漢字漢文文化圏(東アジア文化講座2)』，363～374頁，文学通信，2021年3月)。

②『『老乞大』四種版本対照テキスト(神戸市外国語大学研究叢書63)』(神戸市外国語大学外国語研究所，2020年，271頁)。

武田 幸男

②『新羅中古期の史的研究』(勉誠出版，2020年，568頁)。

田島 俊雄

①「中国的電力産業：短欠経済格局下的大陸型発展」(朱蔭貴・楊大慶編『世界能源史中的中国：誕生・演変・利用及其影響』，113～137頁，復旦大学出版社，2020年6月)。

①書評「山田七絵著『現代中国の農村発展と資源管理：村による集団所有と経営』」（『中国経済経営研究』，第4巻第2号，38～43頁，中国経済経営学会，2020年12月）。

多々良 圭介

①（翻訳）張哲嘉著『欽定格体全録』の成立と翻訳（加藤直人・松重充浩編『東アジアにおける認知空間の諸相：具象化される「帝国」：理念，身体，メディア』，55～102頁，日本大学文理学部情報科学研究所，2020年12月）。

③「機械は紙を見分けられるのか：紙質観察画像データベースの構築と画像分類における機械学習技術応用の試み」（〈報告者〉中村覚，〈共同研究者〉徐小潔・段宇），「紙のレンズから見た古書籍：高精細デジタルマイクロスコープの世界」，於：実践女子大学文芸資料研究所（オンライン開催），2021年3月14日，〔主催：絵入本学会・実践女子大学文芸資料研究所「源氏物語研究の学際的・国際的拠点形成」文部科学省平成30年度私立大学研究ブランディング事業，共催：（公財）東洋文庫，大学共同利用機関法人人間文化研究機構国文学研究資料館，協力：印刷博物館，資料集，40～44頁〕。

立川 武蔵

②『アジア仏教美術論集：南アジアⅡ（ポスト・グプタ朝～パーラ朝）』（〈森雅秀〉，中央公論美術出版，2021年，656頁）。

田仲 一成

①「中国戯曲文学的美感：従元雜劇到潮劇」（蕭国健・游子安主編『鐘峰古今：香港歴史文化論集2018』，珠海学院香港歴史文化研究中心出版，2019年11月，〔2020年度刊行〕）。

①「山西隊戯向西南地区的伝播」（『中華戯曲』，第59輯，1～24頁，中国戯曲学会・山西師範大学戯曲文物研究所，2019年12月，〔2020年度刊行〕）。

田中 仁

①（阿路思訳）「中共十一届三中全会与当代中国政治転型」（『大阪大学中国文化フォーラム・ディスカッションペーパー』，No. 2020-3，1～16頁，大阪大学中国文化フォーラム，2020年6月）。

①「日本学界对中国抗戰史研究新趨勢」（馬軍等『海外与港台地区中国抗戰

史研究理論前沿』, 107～117頁, 上海社会科学院出版社, 2020年10月)。

②『現代中国變動与東亜新格局 (第二輯)』(〈江沛・陳鴻図〉, 社会科学文献出版社, 2020年, 645頁)。

③「『喬欽起工作筆記』から見る現代中国政治の転換」(「20世紀中国史の資料的復元」共同研究班, 於: 京都大学人文科学研究所, 2020年10月2日)。

③「『華国鋒』という問い: 現代中国政治の転換と毛沢東思想の再定義」(「国共両党の比較研究」2020年度会議, 於: 中央研究院近代史研究所(台北), 2020年11月3日)。

田中 比呂志

①「清末民初における国家と個人・地域: 国家建設と地域社会・個人」(『歴史評論』, 2020年6月号(第842), 57～69頁, 歴史科学協議会, 2020年6月)。

①「鳥居文庫所蔵文献目録」(〈藤谷浩悦・佐藤仁史・宮原佳昭〉, 『アカデミア: 社会科学編』, 第19号, 105～121頁, 南山大学, 2020年6月)。

①「研究成果を公表する: 増補版のための補論」(飯島渉編『大国化する中国の歴史と向き合う』, 11～28頁, 研文出版, 2020年8月)。

①「『支那時報』とその華中・華南関係記事: 「満洲事変」までの期間を中心として」(久保亨・瀧下彩子編『戦前日本の華中・華南調査(東洋文庫論叢第83)』, 207～227頁, (公財) 東洋文庫, 2021年3月)。

地田 徹朗

①「ペレストロイカと環境問題: 「アラル海問題」をめぐるポリティクス」(『国際政治』, 201号, 33～48頁, 日本国際政治学会, 2020年9月)。

①「小アラル海南岸でのラクダ飼養の特徴について: 2020年2月, カザフスタン出張報告」(〈タルガルバイ・コヌスバエフ, マルグラン・イクラソフ〉, 今村薫編著『遊牧と定住化(中央アジア牧畜社会研究叢書2)』, 19～27頁, 名古屋学院大学現代社会学部, 2020年12月)。

②『牧畜を人文学する』(〈シンジルト〉, 名古屋外国語大学出版会, 2021年, 258頁, [執筆担当: 「ソ連はカザフに何をもたらしたのか?: 遊牧民と近代化」, 66～86頁])。

②『ユーラシア国境域の自然環境と境域社会の生活戦略(CIRAS Discussion Paper No. 103)』(〈柳澤雅之〉, 京都大学東南アジア地域研究研究所, 2021年, 54頁, [執筆担当: 「中央アジア・アラル海をめぐる境界の変容とスケー

ルの政治」, 5～20頁)].

P. ツィーメ

① “The Old Uigur Translation of the Siddham Songs”, Christoph Anderl and Christian Wittern eds., *Chán Buddhism in Dūnhuáng and Beyond: A Study of Manuscripts, Texts, and Contexts in Memory of John R. McRae*, pp. 143–193, Leiden/Boston: Brill, Nov. 2020.

① “Mount Wutai and Mañjuśrī in Old Uigur Buddhism”, Susan Andrews, Jinhua Chen, and Guang Kuan eds., *The Transnational Cult of Mount Wutai: Historical and Comparative Perspectives*, pp. 223–237, Leiden/Boston: Brill, Nov. 2020.

① “Swimming in the Caustic Lye Stream. Marginal Notes on the Old Uyghur Maitrisimit Nom Bitig”, Johannes Reckel and Merle Schatz eds., *Ancient Texts and Languages of Ethnic Groups along the Silk Road*, pp. 213–220, Göttingen: Universitätsverlag Göttingen, Mar. 2021.

① “Streiflichter aus der mündlichen Überlieferung der alten Uiguren Zentralasiens”, *The Written and the Spoken in Central Asia / Mündlichkeit und Schriftlichkeit in Zentralasien: Festschrift for Ingeborg Baldauf*, pp. 423–436, Potsdam: edition-tethys, Mar. 2021.

② *Catalogue of the Old Uyghur Manuscripts and Blockprints in the Serindia Collection of the Institute of Oriental Manuscripts, RAS*, Volume 1, 〈Olga Lundysheva, Anna Turanskaya, Hiroshi Umemura, Kristina Korosteleva〉, The Toyo Bunko, 2021, 40+386p.

塚原 東吾

① 「コロナから発される問い：二一世紀のコロンブスの交換, 「人新世」における「自然」 (『現代思想』, 2020年5月号, 145～155頁, 青土社, 2020年4月).

① “Putting Joseph Needham in the East Asian Context: Commentaries on Papers about the Reception of Needham’s Works in Korea and Taiwan”, 〈Jianjun Mei〉, *East Asian Science, Technology and Society: An International Journal*, Volume 14, Issue 2, pp. 403–410, Boca Raton: Taylor & Francis Group, Oct. 2020.

① “Global Climate Change and Uncertainty: An Examination from the History of Science”, Tsuyoshi Matsuda, Jonathan Wolff, and Takashi Yanagawa eds., *Risks and Regulation of New Technologies*, pp. 291–312, Singapore: Springer, Dec.

2020.

① “Tropical Cyclones over the Western North Pacific since the Mid-nineteenth Century”, <Hisayuki Kubota, Jun Matsumoto, Masumi Zaiki et al.>, *Climatic Change*, Volume 164, Article number: 29, pp. 1–19, Dordrecht: Springer, Feb. 2021.

① 「ウラニウム：現代史における「原子力性」」(<井上雅俊>, 桃木至朗・中島秀人編『ものがつなぐ世界史 (MINERVA 世界史叢書 5)』, 363～385 頁, ミネルヴァ書房, 2021年 3 月).

辻本 裕成

① 「『石清水物語』試論：作者の視座をめぐる」(『南山大学日本文化学科論集』, 第21号, 31～56頁, 南山大学日本文化学科, 2021年 3 月).

坪井 祐司

① 「「千一問」におけるコーランの引用」(光成歩・山本博之編著『『カラム』の時代 XII：マレー・イスラム世界の社会変容と女性』, 22～30頁, 京都大学東南アジア地域研究研究所, 2021年 3 月).

① “The World View of Malay Nationalists during the 1930s: Their Perspective on Conflicts in Multiethnic Society”, Ikuya Tokoro and Hisao Tomizawa eds., *Islam and Cultural Diversity in Southeast Asia*, vol. 3, pp. 59–78, Research Institute for Languages and Culture of Asia and Africa, Tokyo University of Foreign Studies, Mar. 2021.

鶴間 和幸

② 『木村武山と中国美術コレクション (学習院大学東洋文化研究所調査研究報告70)』(学習院大学東洋文化研究所, 2021年, 202頁).

鶴見 尚弘

① 「満洲への挽歌」(『錦州会報』, 第44号 (最終号), 29～35頁, 錦州会, 2020年12月).

① 「錦州で経験したこと」(『錦州会報』, 第44号 (最終号), 62～71頁, 錦州会, 2020年12月, [病のため弟の鶴見州宏代筆]).

寺田 浩明

- ③「『司法利用』比較研究の前提問題：伝統中国法の視角から」（『伝統社会の司法利用』第1回研究会，オンライン開催，2020年5月31日，[科学研究費補助金 基盤研究（B）「伝統社会の司法利用：利用者行動の実証的分析による東西比較法史研究」，課題番号：20H01416，研究代表者：松本尚子]）。
- ③「近世中国における下級裁判権：ヘルター報告に対するコメント」（『伝統社会の司法利用』第2回研究会，オンライン開催，2021年1月23日，[科学研究費補助金 基盤研究（B）「伝統社会の司法利用：利用者行動の実証的分析による東西比較法史研究」，課題番号：20H01416，研究代表者：松本尚子]）。

土肥 祐子

- ①「南宋数学書所記南海貿易品：以『数書九章』之『均貨推本』為中心」（『南宋政治与社会新探（国際社会科学雑誌（中文版）第37卷第3期）』，86～96頁，中国社会科学院・聯合國教科文組織（UNESCO），2020年9月）。

富澤 芳亜

- ①「計画経済期中国の綿製品輸出について」（村上衛編『転換期中国における社会経済制度』，173～205頁，京都大学人文科学研究所，2021年1月）。
- ①「華中棉産改進黨（1939-45年）とその棉産調査」（久保亨・瀧下彩子編『戦前日本の華中・華南調査（東洋文庫論叢第83）』，119～150頁，（公財）東洋文庫，2021年3月）。

中兼 和津次

- ①「毛沢東時代の中国農村における「疑似安定化」仮説について」（鄭浩瀾・中兼和津次編著『毛沢東時代の政治運動と民衆の日常』，29～51頁，慶應義塾大学出版会，2021年3月）。
- ②『毛沢東時代の政治運動と民衆の日常』（鄭浩瀾），慶應義塾大学出版会，2021年，320頁）。

永田 雄三

- ①「トルコ圏」，「トルコ語とトルコ人」，「トルコの影絵芝居カラギョズ：躍動する「道化」」，「トルコにおける近代西洋演劇の受容：アルメニア人からムスリム演劇人へ」，「コラム カント歌手：イスタンブール大衆演劇の花形」

(鈴木董・近藤二郎・赤堀雅幸編『中東・オリエント文化事典』, 12～13頁, 110～113頁, 434～435頁, 438～439頁, 466頁, 丸善出版, 2020年11月, [第十章「演劇・映画」(431～467頁)の編集委員を担当]).

中谷 英明

- ①「自省利他の思想：『スッタニパータ』八頌品における釈尊の教え」(『祝禱文化講演集』, 第20輯, 85～98頁, 駒澤大学, 2020年11月).
- ③「自省利他研究の推進：現状と展望」(「世界の人々のアイデンティティとしての「自省利他」の研究：社会実装を視野に入れて」第2回研究会, オンライン開催, 2020年10月16日, [科学研究費補助金 挑戦的研究(開拓)「世界の人々のアイデンティティとしての「自省利他」の研究：社会実装を視野に入れて」, 課題番号：20K20410, 研究代表者：中谷英明]).
- ③「東日本大震災と「自省利他」」(龍谷大学東日本大震災追悼法要講演, 於：龍谷大学深草学舎顕真館(オンライン開催), 2021年3月11日).

中塚 亮

- ①「演文庫所蔵レコード目録」(〈中里見敬・長嶺亮子〉, 『九州大学附属図書館研究開発室年報』, 2019/2020, 1～26頁, 九州大学附属図書館研究開発室, 2020年7月).
- ①「戯単解説」(中里見敬・松浦恆雄編『演文庫戯単図録：中国芝居番付コレクション』, 93～111頁, 花書院, 2021年1月).
- ①(翻訳)王煊著「「重なり合う視線」と「単独の視線」：古典演劇の視覚性と視覚の中の舞台」(中里見敬編『中国戯単の世界：「戯単, 劇場と20世紀前半の東アジア演劇」学術シンポジウム論文集』, 19～39頁, 花書院, 2021年3月).
- ①(翻訳)汪詩珮著「1918年上半期の栄慶社：北京進出, 地歩の確立から隆盛まで」(中里見敬編『中国戯単の世界：「戯単, 劇場と20世紀前半の東アジア演劇」学術シンポジウム論文集』, 89～119頁, 花書院, 2021年3月).

長縄 宣博

- ①“Grazhdanskaia voina kak tsivilizatorskaia missiia: Rol' tatarskikh politrabotnikov Krasnoi armii v Turkestane”, N.V. Mikhailov, Mark D. Steinberg et al. eds., *Grazhdanskaia voina v Rossii: Zhizn' v epokhu sotsial'nykh eksperimentov i voennykh ispytaniy, 1917–1922*, pp. 417–435, St. Petersburg: Nestor-Istoriia, 2020.

- ① “Reconfirming the Khalidiyya Ties: ‘Abd Allāh al-Ma‘ādhī on his Hajj in 1910”, *Vestnik Cheliabinskogo gosudarstvennogo universiteta: Filosofskie nauki*, No. 58, pp. 21–25, Chelyabinsk State University, 2020.
- ① “Tatars and Imperialist Wars: From the Tsar’s Servitors to the Red Warriors”, *Ab Imperio*, vol. 21, no. 1, pp. 164–196, Kazan: Association for Slavic, East European, and Eurasian Studies (ASEEES), 2020.
- ③ “Making an Anti-imperialist Empire: Revolutionary Russia and the Muslim World”, Jordan Center Seminar, NYU Jordan Center for Advanced Study of Russia (online), 16 Feb. 2021.
- ③ “Officious Aliens: Tatars’ Involvement in the Central Asian Revolution”, SHS Weekly Colloquium, Institute for Advanced Study, Princeton (online), 8 Mar. 2021.

中見 立夫

- ① 「佐々木揚さんの思い出」(『東アジア近代史』, 第24号, 209～212頁, 東アジア近代史学会, 2020年6月).
- ① 「清史満学研究割記: 陳捷先, 成百仁教授の御逝去, 日本所在の満洲語歴史文書, 重要文化財に指定される」(『満族史研究』, 第18号, 67～74頁, 満族史研究会, 2020年12月).
- ① 「ウンゲルン・シュテルンベルグ男爵に関する近年の文献とモンゴル国で開催された初めての国際学術会議」(『Север (セーヴェル)』, 第37号, 172～178頁, ハルビン・ウラジオストクを語る会, 2021年3月).
- ③ “Japanese People in the Troops of Baron R.F.von Ungern-Sternberg”, International Conference “Baron R.F. von Ungern-Sternberg in History of Mongolia”, Institute of International Relations of the Mongolian Academy of Sciences, Ulaanbaatar (online), 4 Feb. 2021.

中村 威也

- ① 「オンライン授業で考える中国と日本の王権と音楽」(〈小川快之・仁藤智子〉, 『国史館史学』, 第25号, 61～104頁, 国史館大学日本史学会, 2021年3月).
- ① 「中国のメディアの歴史をテーマとした東洋文庫での学外研修の教育的効果について」(〈小川快之・相原佳之〉, 『国史館人文学』, 第11号 (通巻53号), 23～46頁, 国史館大学文学部人文学会, 2021年3月).

③「炎上せずに惹きつける！：研究成果を Twitter で発信せよ」(KURA「研究者の歩きかた」セミナー：ジャーナルをたちあげる&ジャーナルを可視化する，於：京都大学学術研究支援室（オンライン開催），2021年1月28日）.

中村 元哉

①「関西館アジア情報室が所蔵する上海新華書店旧蔵書について」(『アジア情報室通報』，第18巻第3号，2～6頁，国立国会図書館，2020年9月，[<https://rnavi.ndl.go.jp/asia/entry/bulletin18-3-1.php>]).

①「中国憲法史における尊厳概念：その背後にある政治思想」(加藤泰史・小倉紀蔵・小島毅編『東アジアの尊厳概念』，法政大学出版局，2021年3月).

①“Liberalism in Hong Kong and Taiwan during the Cold War”, *Modern Asian Studies Review* / 新たなアジア研究に向けて，Vol. 12, pp. 1–17, The Toyo Bunko, Mar. 2021.

②『東洋文庫近代中国研究委員会編『明治以降日本人の中国旅行記（解題）補遺（戦後篇）』（〈村田雄二郎・池田尚広・久保茉莉子・関智英・山口早苗・吉見崇〉，（公財）東洋文庫超域アジア研究部門現代中国研究班，2021年，18頁，[<http://doi.org/10.24739/00007426>]).

③「黄克武『顧孟余の清高：中国近代史の別一種可能』をめぐって」(東洋文庫超域アジア部門現代中国班国際関係・文化グループ2020年度第2回研究会，於：（公財）東洋文庫（オンライン開催），2020年12月14日，[中国語]).

西 英昭

①「佐伯復堂について」(『法政研究』，第87巻1号，270～233頁，九州大学法政学会，2020年7月).

①「佐伯復堂について・再論」(『法政研究』，第87巻3号，494～475頁，九州大学法政学会，2020年12月).

野田 仁

①「新疆における露清間の国際集会裁判の運用：帝国と民族の境界をこえて」(『西南アジア研究』，No. 90，53～76頁，西南アジア研究会，2020年6月).

延廣 眞治

- ①「落語・講談・手品」(吉原健一郎・西海賢二・滝口正哉編『郷土史大系：宗教・教育・芸能・地域文化』, 314～322頁, 朝倉書店, 2020年6月)。

馬場 英子

- ①「浙江省舟山市岱山島単檔布袋戯『薛丁山与樊梨花』「三擒三放」」(東洋文庫研究部ホームページ, (公財) 東洋文庫, 2020年9月, [<http://124.33.215.236/movie/baba/20200912/fanlihua.html>], 東洋文庫データベース『中国浙江省木偶戯資料』(東アジア資料研究班)として, 解説・字幕を付けて動画を公開)。
- ①「浙江省舟山市定海区単檔布袋戯『月唐・郭子儀』「李白出考」, 「開弓降獸」」(東洋文庫研究部ホームページ, (公財) 東洋文庫, 2020年12月, [<http://124.33.215.236/movie/baba/20201205/getsutou.html>], 東洋文庫データベース『中国浙江省木偶戯資料』(東アジア資料研究班)として, 解説・字幕を付けて動画を公開)。

濱下 武志

- ①「華僑華人のネットワーク：社会ネットワークから地域ネットワークへ」(奈倉京子編著『中華世界を読む』, 167～184頁, 東方書店, 2020年4月)。
- ①「中華世界と日本」(奈倉京子編著『中華世界を読む』, 199～215頁, 東方書店, 2020年4月)。
- ①「中国海関史研究的三個循環」(『史林』, 2020年第6期, 1～13頁, 上海社会科学院歴史研究所, 2020年12月)。
- ①「海関資料に生かされる：旧中国海関資料群の活用と次代の東アジア研究」(『史学雑誌』, 第130編第1号, 36～38頁, 史学会, 2021年1月)。

濱本 真実

- ①「モスク建築からみるロシア・ムスリム史」(『ユーラシア研究』, 第62号, 20～25頁, ユーラシア研究所, 2020年6月)。
- ①(翻訳) デリヤーラ・ウスmanoヴァ著「極東と新疆へのテュルク・タタール系移住者による1920～40年代の教科書出版」(新免康編著『ユーラシアにおける移動・交流と社会・文化変容(中央大学政策文化総合研究所研究叢書30)』, 中央大学出版部, 2021年3月)。

平勢 隆郎

- ①「春秋学と日本『左伝』学」(葉翰・李紀祥主編『聖域麟經：世界漢学与春秋学論集』, 33～46頁, 唐山出版社(台北), 2020年9月)。
- ①「序文」(日向康三郎著, 呂静・葉韻雋訳『北京山本照像館：日本攝影師和他鏡頭下的近代中国』, 1～4頁, 上海書画出版社, 2021年1月, [「訳後記」(257～260頁)に, 東京大学蔵東洋文化研究所保管古写真の寄贈者や寄贈経緯と保管状況について補足解説あり])。
- ②『中国の歴史2 都市国家から中華へ：殷周 春秋戦国』(講談社学術文庫2652) (講談社, 2020年, 536頁, [2005年版の体裁を改め「学術文庫版のあとがき」を補入])。
- ③「日本『左伝』学与秋山玉山」(第二届『群書治要』国際學術研討会「『左伝』学之多元詮釈」, 於：国立成功大学中国文学系(台南), 2020年9月11日, [主催：国立成功大学中国文学系・香港中文大学中国語言及文学系])。

平野 聡

- ①「『一帯一路』時代における中国少数民族社会の変容と苦境」(東大社研現代中国研究拠点編『現代中国ゼミナール：東大駒場連続講義』, 49～71頁, 東京大学出版会, 2020年5月)。
- ①「(動向・政治) 民族問題」(中国研究所編『中国年鑑2020』, 83～86頁, 明石書店, 2020年5月)。
- ①「緊迫する香港：中国共産党の本質に目を向けよ」(『Wedge』, 2020年8月号(第32巻第8号), 8～10頁, ウェッジ, 2020年8月)。
- ①「少数民族政策にみる中国の本質：チベット・新疆ウイグル自治区における「中国化」の意味」(『国基研紀要』, 創刊号, 96～111頁, 国家基本問題研究所, 2020年10月)。
- ①「中国公式資料の“オウンゴール”「新疆ジェノサイド」を許すな」(『Wedge』, 2021年3月号(第33巻第3号), 74～77頁, ウェッジ, 2021年3月)。

弘末 雅士

- ①“Introduction: The Comparative Study of Mediterranean and Non-Mediterranean Slavery and Bondage from Historical Perspectives”, *Memoirs of the Research Department of the Toyo Bunko*, No. 78, pp. 1-3, The Toyo Bunko, 2020.
- ③「海上ネットワークの結節点と地域の窓口としての港市」(立教大学アジ

ア地域研究所主催シンポジウム「港市と渡海者：港を結ぶネットワーク」,
於：立教大学池袋キャンパス（オンライン開催）、2021年1月31日）.

深沢 眞二

①「山も庭に：芭蕉発句叢考」（『俳文学報：会報』、第54号、1～5頁、大阪俳文学研究会、2020年10月）.

①「もう一つの「細道」続貂」（浅田徹・小川剛生・兼築信行・神作研一・田渕句美子・堀川貴司編『和歌史の中世から近世へ』、405～428頁、花鳥社、2020年11月）.

藤井 省三

①「友情と愛情の久しきこと天地の如く：『在りし日の歌』が描く改革・開放と一人っ子政策の30年史」（『在りし日の歌』映画パンフレット、5～7頁、ビターズ・エンド、2020年4月）.

②（潘世聖訳）『魯迅の都市漫遊：東亜視域下の魯迅言説』（北京：新星出版社、2020年、vii+292頁、[[魯迅：東アジアを生きる文学』（岩波書店、2011年）の中国語訳]）.

②『魯迅と世界文学』（東方書店、2020年、368頁）.

②（翻訳）李昂著『眠れる美男』（文藝春秋、2020年、280頁、[原題：『睡美男』]）.

藤本 幸夫

①「日本と朝鮮の書籍交流」（金文京編『漢字を使った文化はどう広がっていたのか：東アジアの漢字漢文文化圏（東アジア文化講座2）』、418～422頁、文学通信、2021年3月）.

古屋 昭弘

①（馬之涛訳）「王仁昉『切韻』与顧野王『玉篇』」（『漢語史学報』、第23輯、106～123頁、上海教育出版社、2020年11月）.

①「字音の変遷について」（金文京編『漢字を使った文化はどう広がっていたのか：東アジアの漢字漢文文化圏（東アジア文化講座2）』、35～60頁、文学通信、2021年3月）.

弁納 才一

- ①「近現代東アジアにおける政治・経済の動向と地域統合」(鹿島正裕・倉田徹・古畑徹編『国際学入門：異文化との共生に向けて〔三訂版〕』, 85～97頁, 風行社, 2020年8月)。
- ①「華中農村訪問調査報告(3): 2019年10月, 湖南省の農村」(『中国研究論叢』, 第20号, 89～102頁, 霞山会, 2020年11月)。
- ①「台湾総督府『南支那及南洋情報』に見える華南農村情報」(久保亨・瀧下彩子編『戦前日本の華中・華南調査(東洋文庫論叢第83)』, 97～118頁, (公財) 東洋文庫, 2021年3月)。
- ①「華東農村訪問調査報告(15): 2019年12月, 江蘇省無錫市の農村」(『金沢大学経済論集』, 第41巻第2号, 157～173頁, 金沢大学経済学経営学系, 2021年3月)。

寶劔 久俊

- ①「中国農業の構造調整と新たな担い手の展開」(川島真・21世紀政策研究所編著『現代中国を読み解く三要素』, 64～90頁, 勁草書房, 2020年8月)。
- ①「中国で『農業の女性化』は広がっているのか」(『中国21』, Vol. 53, 191～208頁, 愛知大学現代中国学会, 2020年9月)。

細谷 良夫

- ②『清朝の史跡をめぐってI: 清朝全土篇』((公財) 東洋文庫, 2021年, 292頁)。

堀井 聡江

- ②『中東イスラーム圏における社会的弱者の権利を考える(SIAS Working Paper Series 33)』(〈小野仁美・細谷幸子・森田豊子〉, 上智大学イスラーム研究センター, 2021年, iv+106頁)。

本庄 比佐子

- ①「附論: 『台湾時報』掲載華南関係記事目録」(久保亨・瀧下彩子編『戦前日本の華中・華南調査(東洋文庫論叢第83)』, 321～356頁, (公財) 東洋文庫, 2021年3月, [原載: 東洋文庫近代中国研究班編『近代中国研究彙報』, 第37号, 121～156頁, (公財) 東洋文庫, 2015年3月])。

牧野 元紀

①「前近代ベトナムにおける聖職者養成のための現地教育：パリ外国宣教会西トンキン代牧区のコレージュとセミネール」（大橋幸泰編『「近世日本のキリシタンと異文化交流」中間成果報告集』, 102～116頁, 早稲田大学教育・総合科学学術院, 2021年2月, [科学研究費補助金 基盤研究 (B)「近世日本のキリシタンと異文化交流」, 課題番号: 17H02392, 研究代表者: 大橋幸泰]）.

①「マルケサスの異人たち：ポリネシア島嶼世界における近代の幕開け」（『昭和女子大学文化史研究』, 24, 121～107頁, 昭和女子大学文化史学会, 2021年3月）.

②『ロマンフ王朝時代の日露交流』（〈監修〉東洋文庫・生田美智子）, 勉強出版, 2020年, 520頁, [執筆担当:「本書刊行のねらい」, コラム「日露歴史さんぽ1 イルクーツク」, 「『魯西亜漂船聞書』の挿絵について: 東洋文庫蔵と横浜市立大学図書館蔵の比較考察」, コラム「日露歴史さんぽ2 厚岸と根室」, コラム「日露歴史さんぽ4 函館と淡路」, コラム「日露歴史さんぽ6 ハバロフスクとシカチ・アリヤン」, コラム「日露歴史さんぽ9 長崎・鹿児島・大津: ニコライ皇太子の足跡」, 1～37頁, 82～90頁, 91～133頁, 134～140頁, 195～198頁, 251～259頁, 390～399頁]）.

③「異人たちの島マルケサス: 19世紀初頭ポリネシア島嶼世界の一断面」（昭和女子大学文化史学会第37回大会, 於: 昭和女子大学（オンライン開催）, 2020年12月19日）.

松井 太

①「宮紀子『モンゴル時代の「知」の東西』を読む（二）」（『内陸アジア言語の研究』, 35, 53～111頁, 中央ユーラシア学研究会, 2020年10月）.

①「大桃児溝第9窟八十四大成就者図像補考」（〈陳愛峰・陳玉珍〉, 『敦煌研究』, 2020年第5期, 63～76頁, 敦煌研究院, 2020年10月）.

① “Shish muhr-i ǧahr-i ḥukm-i Amīr Chūpān dar sāl-i 726 hijrī qamarī / 1326 milādī”, ‘Imād al-Dīn Shaykh al-Ḥukamā’ī, Takagi Sanae, and Watabe Ryoko eds., *Justārḥāyī darbāra-yi sanadshināsī-yi dawra-yi Mughūl*, pp. 75–84, Tih-rān: Intishārāt-i Duktur Maḥmūd Afshār, 2020.

③ “Graffiti by Old Uigur Pilgrims in Dunhuang and Eastern Eurasia”, Scratched, Scrawled, Sprayed: Towards a Cross-Cultural Research on Graffiti, Session 2: Graffiti in Medieval and Early Modern Cultures, Centre for the Study of Manu-

script Cultures, Universität Hamburg (online), 5 Mar. 2021.

松重 充浩

- ①「大連日本人社会における「華中・華南」情報：総合雑誌『満蒙』を事例として」（久保亨・瀧下彩子編『戦前日本の華中・華南調査（東洋文庫論叢第83）』，229～246頁，（公財）東洋文庫，2021年3月）。
- ①「附表：『満蒙』掲載「華中・華南」関係記事一覧（1920年9月～1931年9月）」（久保亨・瀧下彩子編『戦前日本の華中・華南調査（東洋文庫論叢第83）』，357～374頁，（公財）東洋文庫，2021年3月）。
- ①「『満鉄調査時報』（1919年12月～1931年8月）華中・華南関係記事目録」（『近代中国研究彙報』，第43号，107～160頁，（公財）東洋文庫，2021年3月）。
- ②『吉田謙吉が撮った戦前の東アジア：1934年満洲／1939年南支・朝鮮南部』（〈塩澤珠江〉，草思社，2020年，157頁）。
- ③「在大連日本側メディアにおけるシベリア出兵認識：『満洲日日新聞』（1918年9月～1920年12月）掲載関係記事を事例として」（2020年度ロシア史研究会年次大会，オンライン開催，2020年11月15日）。

松永 泰行

- ①「国民国家への道」（〈八尾師誠〉，羽田正編『イラン史（YAMAKAWA Selection）』，257～266頁，山川出版社，2020年12月）。
- ②『「境界」に現れる危機（グローバル関係学第2巻）』（岩波書店，2021年，226頁）。

松村 史紀

- ①「強制と自主独立の間：日本共産党「軍事方針」をめぐる国際環境（1949-55）（4）」（『宇都宮大学国際学部研究論集』，第50号，135～156頁，宇都宮大学国際学部，2020年9月）。
- ①「強制と自主独立の間：日本共産党「軍事方針」をめぐる国際環境（1949-55）（5）」（『宇都宮大学国際学部研究論集』，第51号，83～104頁，宇都宮大学国際学部，2021年2月）。
- ③「中ソ分業体制の再考（1950年代前半）：世界労働組合連盟を中心に」（2020年度ロシア史研究会年次大会，オンライン開催，2020年11月14日）。

三浦 徹

- ① “Who and What Led Urban Riots in the Late Mamluk Period? Reconsidering the Zu‘r and Popular Actions in Damascus”, Stephan Conermann and Toru Miura eds., *Studies on the History and Culture of the Mamluk Sultanate (1250–1517)* (Mamluk Studies 25), pp. 247–262, Bonn University Press, Mar. 2021.
- ② *Studies on the History and Culture of the Mamluk Sultanate (1250–1517)* (Mamluk Studies 25), 〈Stephan Conermann〉, Bonn University Press, 2021, 326p.

水野 善文

- ① 「「初髭剃り式」と「三途の川の渡し賃」：godāna をめぐって」(『東京外国語大学論集』, 第100号, 77～100頁, 東京外国語大学, 2020年7月).
- ① 「序章 VII インドの聖典, 近代」, 「ジャータカ・マーラー」, 「スール・サーガル」, 「ビージャク」, 「グル・グラント・サーヒブ」, 「ラーム・チャリット・マーナス」, 「藍栽培鏡」, 「自伝」, 「変り行く時代」, 「サーダナー：生命の実現」(齋藤明・丸井浩・下田正弘ほか編『仏典解題事典(第三版)』, 68～69頁, 94～95頁, 449～452頁, 454～458頁, 春秋社, 2020年12月).
- ① 「サンスクリット文学：教養の宝箱」, 「パーリ語文学：仏典の中の文学世界」(栗屋利江・太田信宏・水野善文編『言語別南アジア文学ガイドブック』, 3～28頁, 29～44頁, 東京外国語大学拠点南アジア研究センター, 2021年3月).
- ② 『言語別南アジア文学ガイドブック』(〈栗屋利江・太田信宏〉, 東京外国語大学拠点南アジア研究センター, 2021年, 425頁).

三田 昌彦

- ③ 「南アジア古代・中世史の長期的展開について：前1千年紀半ば～後2千年紀半ば」(日本南アジア学会第33回全国大会, 於：京都大学(オンライン開催), 2020年10月3日).
- ③ 「インド中世の国家(王権)と寺院の関係について」(科研費基盤(A)「グプタ朝以降のインド仏教の僧院に関する総合的研究」第4回国内研究会, オンライン開催, 2020年12月19日, [科学研究費補助金 基盤研究(A)「グプタ朝以降のインド仏教の僧院に関する総合的研究」, 課題番号：18H03569, 研究代表者：久間泰賢]).

三谷 博

- ③ “Opening Remarks”, the 1st International Meeting of “Pen and Sword in Revolutions” day 1, online, 15 Dec. 2020, [[科学研究費補助金 基盤研究 (B)「公論と暴力：革命の比較研究」, 課題番号：19H01302, 研究代表者：三谷博, <https://kakumeihikaku.jimdosite.com/reports/>].

峰 毅

- ② 『中国セメント工業発展の歴史：一帯一路の先兵か』（セメント新聞社, 2020年, 190頁）.

宮崎 修多

- ① 「瓊浦余韻：京都大学附属図書館蔵『崎陽蜀山人書集』から」（『成城国文学論集』, 第43輯, 25～71頁, 成城大学大学院文学研究科, 2021年3月）.

宮崎 展昌

- ① 「〈金光明經〉漢訳諸本の翻訳と伝承に関する諸問題：史伝・経録類にみえる記述を中心として」（『鶴見大学仏教文化研究所紀要』, 第26号, 7～40頁, 鶴見大学, 2021年3月）.
- ① 「日本古写一切経諸本の相互関係に関する事例研究：〈阿闍世王経〉漢訳二種を対象として」（『鶴見大学仏教文化研究所紀要』, 第26号, 263～285頁, 鶴見大学, 2021年3月）.
- ① “Relationships among the Old Manuscript Collections of Buddhist Scriptures Preserved in Japan: Focusing on the *Puchao sanmei jing* 普超三昧経, Dharmarakṣa’s Version of the **Ajātaśatrukaukṛtyavinodana*”（『印度学仏教学研究』, 第69巻第3号, 1165～1172頁, 日本印度学仏教学会, 2021年3月）.
- ③ 「日本古写一切経諸本の相互関係：〈阿闍世王経〉漢訳2種を対象として」（日本印度学仏教学会第71回学術大会, 於：創価大学（オンライン開催）, 2020年7月5日）.
- ③ 「金刻大蔵経の現存版本にみえる契丹蔵からの影響について：高麗蔵再雕本に残された注記を手がかりとして」（鶴見大学仏教文化研究所研究例会, 於：鶴見大学仏教文化研究所（オンライン開催）, 2020年12月17日）.

宮脇 淳子

- ① 「昭和12年のモンゴルと徳王」（『昭和12年学会 PDF 論文』, 5号, 昭和

12年学会，2020年11月，[<https://s12gakkai.wixsite.com/mysite>)]).

②『朝鮮半島をめぐる歴史歪曲の舞台裏：韓流時代劇と朝鮮史の真実（扶桑社新書329）』（扶桑社，2020年，327頁）.

②『かわいそうな歴史の国の中国人』（徳間書店，2020年，240頁）.

②『悲しい歴史の国の韓国人』（徳間書店，2020年，224頁）.

②『米中ソに翻弄されたアジア史：カンボジアで考えた日本の対アジア戦略』（江崎道朗・福島香織，扶桑社，2020年，298頁）.

村上 衛

①書評「豊岡康史・大橋厚子編『銀の流通と中国・東南アジア』（『社会経済史学』，第86巻第1号，83～85頁，社会経済史学会，2020年5月）.

①書評「古田和子編著『都市から学ぶアジア経済史』（『歴史と経済』，第249号（第63巻第1号），54～56頁，政治経済学・経済史学会，2020年10月）.

①書評「秋田茂編『グローバル化の世界史』（『経営史学』，第55巻第3号，55～58頁，経営史学会，2020年12月）.

②『グローバル経済の歴史』（河崎信樹・山本千映，有斐閣，2020年，424頁）.

②『転換期中国における社会経済制度』（京都大学人文科学研究所附属現代中国センター，2021年，430頁）.

村田 雄二郎

①書評「東アジア現代思想史への挑戦：武藤秀太郎著『大正デモクラットの精神史：東アジアにおける「知識人」の誕生』（『中国研究月報』，第74巻7号（869号），37～39頁，中国研究所，2020年7月）.

①（宋舒揚訳）「孫中山之後の大亞洲主義：民国時期中国的日本認識」（『日本学研究』，第30号，9～28頁，北京日本学研究中心，2020年7月）.

①エッセイ「特集 アジ歴との出会い」（『アジ歴ニューズレター』，第34号，国立公文書館アジア歴史資料センター，2021年3月，[https://www.jacar.go.jp/newsletter/newsletter_034j/newsletter_etc_034j.html]) .

②『語言・民族・国家・歴史：村田雄二郎中国研究文集』（（主編）楊偉，重慶出版社，2020年，228頁）.

②『大清帝国展 完全版（時空をこえる本の旅27）』（（公財）東洋文庫，2021年，32頁，[企画協力]）.

毛里 和子

- ①「当代中国研究：系譜と挑戦」（『天皇皇后両陛下が受けた特別講義：講書始のご進講』，120～128頁，KADOKAWA，2020年5月，〔平成29年講書始の儀，2017年1月11日〕）。
- ①「日本当代中国学研究的新範式」（『中央社会主義学院学報』，2020年第2期，5～10頁，中央社会主義学院，2020年5月，〔「論日本的当代中国研究」講演要旨，「北京大学趙宝煦學術基金」系列講座第17期，於：北京大学政府管理学院，2019年12月6日〕）。

本野 英一

- ①“The Import Sales Contract System in Shanghai 1903–1918, with Special Reference to US-Chinese Commercial Disputes”, *International Journal of Asian Studies*, Volume 17, Issue 2, pp. 145–161, Cambridge University Press, Jul. 2020, [<https://doi.org/10.1017/S147959142000025X>].
- ①書評「戦後第一世代アメリカ人研究者の辿った人生：Paul A. Cohen, *A Path Twice Traveled: My Journey as a Historian of China*」（『東方』，478号，26～29頁，東方書店，2021年1月）。
- ①“Reinterpreting Modern Chinese History with FO 17”, *China and the Modern World* (Imperial China and the West, Part I, 1815–1881), Cengage Learning (EMEA), Mar. 2021.
- ①書評「20世紀の「戊戌政変」：石井知章・及川淳子編『六四と一九八九：習近平帝国とどう向き合うのか』」（『中国21』，Vol. 54, 313～319頁，愛知大学現代中国学会，2021年3月）。
- ③「1920年代の華洋商業紛争処理問題：上海会審衙門の債権回収機能低下を中心に」（京都大学人文科学研究所附属現代中国研究センター「近現代中国の制度とモデル班」例会報告，於：京都大学人文科学研究所附属現代中国研究センター，2020年6月12日）。

粂山 明

- ②『秦帝国の誕生：古代史研究のクロスロード』（〈ロータール・フォン・ファルケンハウゼン〉，六一書房，2020年，207頁）。

守川 知子

- ①「イスラーム教の聖地巡礼とその多層性：日本の巡礼との比較研究に向

けて」(上島享・吉田一彦編『世界のなかの日本宗教(日本宗教史2)』, 121~144頁, 吉川弘文館, 2021年2月)。

①「職人のまちイスファハーン：19世紀の手工業者一覧にみる伝統産業」(山田重郎編『科研費新学術領域研究 都市文明の本質：古代西アジアにおける都市の発生と変容の学際研究3 研究成果報告2020年度』, 3, 255~265頁, 筑波大学人文社会系西アジア文明研究センター, 2021年3月, [科学研究費補助金 新学術領域研究(研究領域提案型)「都市文明の本質：古代西アジアにおける都市の発生と変容の学際研究」, 課題番号：5001, 研究代表者：山田重郎])。

森平 雅彦

①「モンゴル時代における朝中間の海上交流と航路」(『国立歴史民俗博物館研究報告』, 第223集, 285~312頁, 国立歴史民俗博物館, 2021年3月)。

①「朝鮮時代における食用淡水魚種の概観」(『史淵』, 第158輯, 1~48頁, 九州大学大学院人文科学研究院歴史部門, 2021年3月)。

③「朝鮮中期の洛東江上流域における「淡水魚生活」」(朝鮮史研究会関東部会3月例会「朝鮮環境史の創成にむけた河川の管理・利用に関する総合的研究」ミニ・シンポジウム, オンライン開催, 2021年3月27日)。

③「朝鮮船が対馬海峡を渡るとき：近世の事例から」(九州大学韓国研究センター第95回定例研究会「日韓交流史における対馬海峡の交通」, オンライン開催, 2021年3月30日)。

森安 孝夫

①「(座談会)先学を語る：山田信夫先生」(〈小田壽典・森川哲雄・堀直・松田孝一・萩原守〉, 『東方学』, 第140輯, 92~134頁, 東方学会, 2020年7月)。

①「今こそ、シルクロードから世界史を見る」(『本：読書人の雑誌』, 第45巻第10号, 44~45頁, 講談社, 2020年10月)。

②『シルクロード世界史(講談社選書メチエ733)』(講談社, 2020年, 232頁)。

③「前近代中央ユーラシア東部におけるトルコ・モンゴル族のキリスト教改宗」(第21回遼金西夏史研究会大会, オンライン開催, 2021年3月13日)。

矢島 洋一

- ③「ジュナイドのトラブゾン・グルジスターン侵入」(共同研究「イスラーム聖者廟の財産管理に関する史料学的研究：イラン・サファヴィー朝祖廟を事例として」第9回研究会，オンライン開催，2021年3月20日)。

柳谷 あゆみ

- ②(翻訳) アフマド・サアダーウィー著『バグダードのフランケンシュタイン』(集英社，2020年，400頁，[アラビア語原書からの翻訳，翻訳及び解説を行った])。
- ③「ザンギー朝期のモスル構築」(「中世から近代の西アジア・イスラーム都市の構造に関する歴史学的研究」第18回研究会，オンライン開催，2020年12月10日)。
- ③「ザイヌ・アッディーン・アリー・クーチュク・ブン・ベクタギーン：忠誠心について」(科研基盤(A)「前近代ユーラシア世界における広域諸帝国の総合的研究：移動する軍事力と政治社会」第2年度第4回研究会，オンライン開催，2021年2月13日，[科学研究費補助金 基盤研究(A)「前近代ユーラシア世界における広域諸帝国の総合的研究：移動する軍事力と政治社会」，課題番号：19H00535，研究代表者：杉山清彦])。
- ③“Tarjamat “Frānkshtāyn fī Baghdād” ilā al-lughah al-Yābānīyah: Bāb ilā al-mujtama‘ wa-al-tārīkh al-‘Irāqī (Translating of Frankenstein in Baghdad into Japanese as a Door to Iraqi Society and History)”, the Online 12th Iraqi Japanese International Conference, “Japan and the Arab World from Oil to Culture: The Iraqi Case”, College of Arts, University of Baghdad, College of Arts, Mustansiriyah University, and Chiba University (online), 25 Mar. 2021, [Sponsored by Japan Foundation].

矢吹 晋

- ①「インフォデミックとしてのコロナ狂想曲」(21世紀中国総研編『中国情報ハンドブック2020年版』，28～41頁，蒼蒼社，2020年7月)。
- ①「選挙用具を中国に発注しつつ脱中国を説くトランプの矛盾：新型コロナウイルス後の米中展望」(『善隣』，No. 514 (通巻781)，6～13頁，国際善隣協会，2020年9月)。
- ②『コロナ後の世界は中国一強か』(花伝社，2020年，184頁)。
- ②『「中国の時代」の越え方：一九六〇年の世界革命から二〇二〇年の米中

衝突へ』(白水社, 2020年, 234頁).

山内 民博

②『戸籍からみた朝鮮の周縁: 17-19世紀の社会変動と僧・白丁』(知泉書館, 2021年, 276頁).

山口 元樹

①「イスラームの文字, マレーの文字: 独立期インドネシアにおけるジャウィ復活論とマラヤとの関係」(『東南アジア研究』, 58巻2号, 141~163頁, 京都大学東南アジア地域研究研究所, 2021年1月).

①(共訳)「カースィアの説教」(〈佐野東生・野元晋・吉田京子・平野貴大・水上遼・村山木乃実〉, 佐野東生編『カースィアの説教: 悪魔にいかに対処するか: カリフ・アリーの『雄弁の道』 Nahj al-Balāghah より』, 4~18頁, 龍谷大学国際社会文化研究所, 2021年3月).

①「東南アジア古典文学の中のアリー」(佐野東生編『カースィアの説教: 悪魔にいかに対処するか: カリフ・アリーの『雄弁の道』 Nahj al-Balāghah より』, 37~38頁, 龍谷大学国際社会文化研究所, 2021年3月).

山本 英史

①「伝統中国の法秩序からみた人間とその社会: 「宋以後の法令分析」研究班の活動とその意義」(『東洋見聞録』, 第28号, 3頁, (公財) 東洋文庫, 2020年9月).

①「清代浙江の山林資源糾紛: 以19世紀末の諸暨県為例」(杜正貞・佐藤仁史主編『山林・山民与山村: 中国東南山区の歴史研究』, 77~111頁, 杭州: 浙江大学出版社, 2020年12月).

山本 真

①「社会主義国家の成立」(川島真・小嶋華津子編著『よくわかる現代中国政治』, 20~21頁, ミネルヴァ書房, 2020年4月).

①「(動向) 文化概観」, 「(動向) 歴史学」(〈(後者のみ) 青山治世〉, 中国研究所編『中国年鑑2020』, 199頁, 224~226頁, 明石書店, 2020年5月).

①「戦争, 動員と地域社会: 日中戦争時期から冷戦時期の金門島」(笹川裕史編『現地資料が語る基層社会像: 20世紀中葉 東アジアの戦争と戦後』, 93~121頁, 汲古書院, 2020年12月).

①「対山林資源の伝統式共同管理以及近代以来国家的控制与開発：以福建省為例」(杜正貞・佐藤仁史主編『山林・山民与山村：中国東南山区の歴史研究』, 202～238頁, 杭州：浙江大学出版社, 2020年12月)。

①「戦時期の華南調査について：福建・広東を中心に」(久保亨・瀧下彩子編『戦前日本の華中・華南調査（東洋文庫論叢第83）』, 37～61頁, (公財) 東洋文庫, 2021年3月)。

湯浅 剛

③「ユーラシアの地政学から見た中央アジア・コーカサス」(国際協力機構(JICA) 内陸アジア地域専門家による講演会シリーズ, 於：JICA 本部(オンライン開催), 2021年3月1日)。

吉澤 誠一郎

①「白鳥庫吉と東洋史学の始原」(吉見俊哉・森本祥子編『東大という思想：群像としての近代知』, 133～151頁, 東京大学出版会, 2020年8月)。

①「日本語ガイドブックに見る華北・華中・華南」(久保亨・瀧下彩子編『戦前日本の華中・華南調査（東洋文庫論叢第83）』, 301～320頁, (公財) 東洋文庫, 2021年3月)。

吉田 建一郎

①「1930年前後の日ソ茶貿易」(『大阪経大論集』, 第71巻第2号, 57～75頁, 大阪経大会, 2020年7月)。

①「戦間期華中の茶貿易に関する日本の認識」(久保亨・瀧下彩子編『戦前日本の華中・華南調査（東洋文庫論叢第83）』, 247～269頁, (公財) 東洋文庫, 2021年3月)。

吉田 豊

①「地藏菩薩像(マニ像)」(〈古川撰一〉, 『国華』, 第1495号(第125編第10冊), 図版5+33～35頁, 国華編輯委員会, 2020年5月)。

①「仏教与摩尼教的接触：一件新刊粟特本の再研究」(『敦煌学』, 第36期, 105～118頁, 南華大学敦煌学研究中心(嘉義県), 2020年8月)。

①(慶昭蓉訳)「古代龜茲境内現存粟特文石窟題記」(趙莉・榮新江主編『龜茲石窟題記：研究論文篇』, 71～91頁, 上海：中西書局, 2020年10月)。

①“Some Problems Surrounding Sogdian Esoteric Texts and the Buddhism of

Semirech'e (ソグド語の密教經典とセミレチエ仏教)”(『帝京大学文化財研究所研究報告』, 第19集, 193~203頁, 帝京大学文化財研究所, 2020年11月).

①「ウイグル語の漢字・漢文受容の様態：庄垣内正弘の研究から」(金文京編『漢字を使った文化はどう広がっていたのか：東アジアの漢字漢文文化圏(東アジア文化講座2)』, 157~160頁, 文学通信, 2021年3月).

吉水 清孝

①“The Physical Existence of a Living Being and Kumārila’s Theory of Arthâpatti”, Malcolm Keating ed., *Controversial Reasoning in Indian Philosophy: Major Texts and Arguments on Arthâpatti*, pp. 225–254, London: Bloomsbury Academic, Jul. 2020.

①「クマーリラの王権論とその背景：Rājasūya の祭主資格について」(『印度学仏教学研究』, 第69巻第1号, 481~488頁, 日本印度学仏教学会, 2020年12月).

①“Another Look at avinābhāva and niyama in Kumārila’s Exegetical Works”, Birgit Kellner, Patrick McAllister, Horst Lasic, and Sara McClintock eds., *Reverberations of Dharmakīrti’s Philosophy: Proceedings of the Fifth International Dharmakīrti Conference Heidelberg, August 26 to 30, 2014*, pp. 529–547, Vienna: Austrian Academy of Sciences Press, Dec. 2020.

吉水 千鶴子

①「プトン仏教史」, 「ターラナータ仏教史」, 「チベット仏教史[学者の宴]」(斎藤明・丸井浩・下田正弘ほか編『仏典解題事典(第三版)』, 218~219頁, 220~221頁, 223~224頁, 春秋社, 2020年12月).

①「中観派における他生否定の歴史的展開：カマラシーラによる転換点」(『印度学仏教学研究』, 第69巻第2号, 868~873頁, 日本印度学仏教学会, 2021年3月).

③「中観派における他生否定の歴史的展開：カマラシーラによる転換点」(第71回日本印度学仏教学会学術大会, 於：創価大学(オンライン開催), 2020年7月4日).

③「種から芽は生じるか? : 仏教における「不生不滅」の思想」(筑波大学哲学・思想学会第41回学術大会, オンライン開催, 2020年10月17日).

吉村 慎太郎

- ②『改訂増補 イラン現代史：従属と抵抗の100年』（有志舎，2020年，262頁）。
- ②『現代アジアと環境問題：多様性とダイナミズム』（〈豊田知世・濱田泰弘・福原裕二〉，花伝社，2020年，334頁）。

吉村 武典

- ① “The Role of Middle and Lower Rank Military Officers in Fourteenth-Century Mamluk Egypt: Establishment and Development of the Regional Administration Offices of wālī and kāshif”, Stephan Conermann and Toru Miura eds., *Studies on the History and Culture of the Mamluk Sultanate (1250–1517)* (Mamluk Studies 25), pp. 299–320, Bonn University Press, Mar. 2021.
- ③「イスラーム都市と水施設：マムルーク・オスマン期カイロのサビール・クッターブについて」（地中海学会研究会，オンライン開催，2020年12月5日）。

六反田 豊

- ③「環境史からみた朝鮮時代の水利施設：堤堰と川防を中心として」（「朝鮮環境史の創成にむけた河川の管理・利用に関する総合的研究」ミニ・シンポジウム（朝鮮史研究会関東部会2021年3月例会），オンライン開催，2021年3月27日，[科学研究費補助金 基盤研究（B）「朝鮮環境史の創成にむけた河川の管理・利用に関する総合的研究」，課題番号：16H03486，研究代表者：六反田豊，共催：朝鮮史研究会]）。

渡辺 紘良

- ①「宋初の漕運対策」（『東洋学報』，第102巻第2号，1～31頁，（公財）東洋文庫，2020年9月）。